

3・11 百九人の手記 岩手県山田町東日本大震災の記録

岩手県山田町／山田町東日本大震災を記録する会 編

題字 佐藤信逸 山田町長



20110311 15:21

がれきを巻き込みながら町役場に向かって押し寄せる津波
平成23年3月11日午後3時21分撮影

あ
の
日
：



津波と火災で壊滅した町の中心部。震災から7日目、うっすらと雪が積もっている
[平成23年3月17日午前10時28分撮影]



20060713 16:14

美しかったかつての町並み。山田湾を漂う「やませ」が幻想的な風景をつくり出す
平成18年7月13日午後4時14分撮影



山田は熱い祭りの町でもある。震災前の「山田祭」で躍動する山田八幡宮の神輿
[平成20年9月14日午前9時47分撮影]

ありし日…

刊行にあたって

復興果たし、町に恩返しを

山田町長 佐藤信逸

私

たちの町に大津波と紅蓮ぐれんの炎が襲い掛かった東日本大震災から、早くも4年の月日が流れます。震災は慣れ親しんだ町並みを一瞬にしてこの世の地獄に変え、あまりにも深い悲しみと途方もない喪失感をもたらしました。ここに収められた109人の方々の体験手記を拝読すると、あらためて当時の惨状がありありと目の前に浮かび、涙を禁じ得ません。つらい記憶にあえて向き合い、後世に貴重な教訓を伝えようとする勇氣ある皆さんに倣って、私もあの日のことを少しく記したいと思います。

当時、震災の数日前から地震が頻発していました。私の自宅付近は地盤が固いためか、地震が来る前にゴーツちまという地響きがしました。その中で一際大きかったのが、3月9日午前11時45分に発生した震度4の地震。間もなく津波注意報が発令されましたが、事なきを得ました。巷では「最近、地震が多いね」という話でした。

そして、2日後の3月11日午後2時46分。ついにその時がやって来ました。大きな揺れです。私は当時経営する会社で取引相手と話をしていました。尋常ではない揺れなので、その方に山側に通じる関谷道路を回るようにと道順を教えて盛岡に帰しました。海沿いの国道45号線を通っていけば渋滞に巻き込まれ、津波の直撃を受けたかもしれない。田の浜地区から来ていた従業員にも帰るように指示。この人もあと3分遅れていた津波にのみ込まれていたそうです。運というしかありません。

避難指示をしようとして別会社に行くと、付近では多くの町民が車で高台に向かって逃げる最中でした。皆さんの顔には緊迫感がにじんでいました。3時半前でしょうか。海の方に目をやると、ものすごい高さの黒いカーテンのようなものが少しづつ押し寄せて来ます。津波で家屋が倒壊し、その時に舞い立つ土ぼこりでした。1波、2波、3波と来て、水は引いて行きました。数限りないがれきの山を残して……。

小さな火事が発生しました。いわゆる津波火災です。水で洗われているから火の勢いはじきに収まるだろうと高をくくっていました。ところが、鎮まるどころかプロパンガス、灯油、ガソリンなどに次々と引火、燎原^{りやうげん}の火となって町をなめ尽くしました。津波では助かったのに、がれきの中で命を落とされた方も多数おられたようです。翌々日、海岸を歩いてみると、至る所にご遺体があり、愕然^{がくぜん}としました。がれきに挟まれたりし

ているご遺体で痛々しいものでした。

私の家族はたまたま内陸の方に出掛けていて国道が不通になったせいで帰って来られず、電話も通じません。14日に私を頼って岩手町からトラックで食料を持ってきてくれた仲間がいて、山田南小学校で避難者にお配りしました。この後、自宅へと向かっていたら、次男が向こうからこちらに歩いて来るのが見えました。5日ぶりの対面。ついぞ人目をはばかりことなく抱き合いました。こらえようとしても涙があふれます。家内も長男も一緒に帰宅しているといえます。しかし、娘とは連絡が取れずにいました。震災から1週間ほどして役場前に衛星電話が開設されたというので急ぎ足で向かいました。長蛇の列。通話は1人3分ということでした。やっと自分の番が来ました。番号を押す指に力が入ります。受話器の向こうから優しさと安堵感に包まれた娘の声が聞こえました。その後は2人とも言葉になりません。家族のぬくもりを実感し、親子の絆を確認した3分間でした。

多くの町民が大切な家族や友人を亡くし、自宅を失いました。その無念さを正面から受け止め、二度とあのような犠牲を出さない安全な町づくりをしようと、私は震災の翌年、町長に就任いたしました。私たちを育んでくれた山田の町にご恩返しをいたし、完全復興を果たすため、役場職員と力を合わせて頑張りたいと決意を新たにしています。

目次

刊行にあたって

復興果たし、町に恩返しを

山田町長 佐藤信逸

1

はじめに

14

山田

chapter 1

生きていた譲り合いの心
復興することが恩返しに
深く傷ついた心
できることを精いっぱいやった
祖母と親友を失って
父の死を乗り越えて
生きる喜びを知った
友達の遺志継ぐ
「当たり前」の幸せ

佐々木深音 20
堀合 泉 21
堀合琴乃 23
山崎美来 24
大河原陽花 26
川村大喜 28
木下 葵 30
小林優太 32
齋藤南海 33

友達の分まで生きる
語り継ぐ大切さ
妹との再会願ひ
平和だった当たり前の日々
全てが変わった日
少しでも復興を手伝いたい
支え合う大切さ
私を変えた母の教え
早くみんなが笑える町に
つらさの中で得たもの
「いつか胸を張って」 僕の挑戦
避難所になった小学校
夢であってほしかった
3月11日以降の日記より
生きていただけでも幸せ
生かされた命をしっかりと生きる

佐々木緋毬 35
澤田拓真 37
山根大弥 39
阿部祥子 40
山崎庸子 43
佐々木美結 45
伊藤真由 48
佐藤雅依瑠 50
佐藤明恵 53
福土有哉 56
佐藤貴大 59
佐賀敏子 64
阿部トシ子 68
梅木なか 70
川端信作 75
貫河寛喜 81

心の復興めざし慰問に励む
『やぶつばき』と佐藤豊子さん追悼
社屋3階に上って助かる
父と兄を追想して
お金で買えぬ宝物を得た
生き地獄と化した故郷
1、2秒差で助かった
信頼される地域警察官に
一人でも多く救助する
多くの「死」を乗り越えて

新保 公 84
福士 博 88
前川 良子 92
三田地智之 95
湊 三代子 99
本宿 一夫 102
山根和子 105
熊谷啓延 108
鈴木隆晃 110
吉田朋史 115

あの日、学んだこと
生きているだけで幸せ
自分の身は自分で
次の世代に伝える
津波の悲しみと再会の喜び

白野虹歩 126
福士友梨佳 128
伊藤 徹 130
古久保優希菜 131
箱石瑛己 133

保育士になって役立ちたい
教訓伝え、未来につなげる
民生児童委員の私が心掛けたこと
反省と教訓と
自分の道を探して歩む
つらくても生きてこそ
不安と寒さに震えた夜
避難所で心の交流

若江ひかり 134
大川ヒメ子 136
中村きの 139
中村ふさ 142
寺本充子 145
中嶋るみ子 147
箱石初代 149
福士鷹子 151

犠牲を無駄にすまい
価値観がすっかり変わった
誰もが地獄に突き落とされた
震災に亡き父を思う
変わり果てた町に涙
意識が薄れていくのを感じた
虫の知らせと夫の声

堀合紳弥 158
稲川壽子 161
昆野昭子 163
沼崎敦子 166
中村あづ子 168
蛇石福子 170
八木良子 171

助けられた命を生きる
 自ら進んで体験伝える
 誰かを助けられる人に
 みんなが一つになれた
 判断力の大切さ学ぶ
 3・11を経て原子力を考える
 「正常化の偏見」から脱する
 震災の教訓を次代へ
 命ある感謝と生きるつらさと
 人の温かさに触れた
 夢なら覚めてほしい
 思い出すだけで恐ろしい
 無常を突き付けられた
 船が逆さまになって
 津波にのみ込まれて

富山浩恵 176
 芳賀優香 178
 大畑優美南 180
 三上涼太 182
 山崎魁斗 183
 山崎昂太 185
 佐々木道雄 187
 後藤夕香里 190
 三浦初子 192
 大槻悦子 193
 黒沼五百子 197
 福館真美子 198
 港 安子 200
 村木まさ子 202
 長根美紀 203

未来の山田に必要な人に
 生涯で3度の大津波に遭う
 火事から逃げ回った日々
 亡くなった人の分も生きる
 より高い所へ逃げねば
 内陸にいて難逃れる
 常に津波の備えを
 町のにぎわいを再び
 視覚障害の夫と共に
 津波碑の教訓、心に刻み
 明治津波の教訓語り継ぐ
 それでも海を恨めない
 毎日同じ空もなし
 高台の家にて助かる
 職員一丸で患者を救う
 マイナスからのスタート

荒川茉莉亜 210
 中村とき 212
 菊地みち子 216
 五十嵐浩子 219
 金子真喜子 221
 後藤マツノ 223
 佐々木サツ 226
 佐々木しめ 228
 佐々木スエ 230
 佐々木タミ 233
 佐々木房子 236
 下村房子 239
 中村百合 241
 浜登幸子 243
 山崎洋子 245
 阿部優子 248

まるで地獄絵図だった
今日より良い明日を信じて
明けない夜はない
張り詰めた心を支え合う

五十嵐まき子 251
坂本加代子 254
佐々木千秋 256
佐々木光子 257

二度と犠牲者出さぬよう
心も体も強くなる
気付いたら屋根の上に
母の教訓が役立った
大津波、船を避難させる
何も持たず、すぐに高所へ
息子を待ちわびた一本道
父の教訓を語り継いで
悲しみも感謝の心も忘れない
傾聴活動の幅を広げたい

小林夏希 262
佐々木智輝 263
阿部裕徳 267
小林タミ子 268
野田 實 271
山崎卓三 275
阿部秋子 278
小林かき子 280
漣磯一美 282
横田章子 284

姉の分まで強く生きる
油断と過信があった
後方支援に徹して
感謝の心を子や孫に
「結いの精神」あってこそ

福士広大 290
内田 明 293
吉川淑子 296
尾形マサ子 300
斉藤順子 302
佐々木マサ子 305

炊き出しに熱い思いを込めて
住民と避難者が一丸となって
非常時の初動態勢をしっかり
おにぎり作り続けた1カ月

根子光子 307
芳賀恵美子 309
三ヶ尻ミツ子 311

故郷・山田町に迫った巨大津波と悲しい被害 小岩清水

314

「震災体験記」と心の復興

福士 博

320

■東日本大震災の概要

発生	平成23[2011]年3月11日午後2時46分
震源地	三陸沖
震源の深さ	24キロメートル
地震の規模	マグニチュード9・0
山田町の震度	5強(大沢地区) ※山田町役場の震度計は5弱

■山田町の被害(平成26年10月3日現在)

死者	676人(外国人1人を含む)
行方不明者	148人(うち死亡届の受理件数は147人)
全半壊家屋	3,167戸
被災家屋の割合	46・7%(一部損壊を含む)
津波浸水面積	486・9ヘクタール



■山田町

面積	263・45平方キロメートル
人口	16,727人(平成27年1月1日現在)
震災前の人口	19,270人(平成23年3月1日)



はじめに

【Prologue】

ここに、岩手県沿岸部の山田町で東日本大震災に遭遇した109人の手記がある。

山田町は県庁所在地の盛岡市から東南東に約70キロ離れた陸中海岸のほぼ中央に位置する。波の穏やかな山田湾と船越湾に面し、豊かな海を育む山野と溪流が背後を取り囲む、自然の美しい土地だ。カキやホタテガイの養殖漁業、サケやタラ、スルメイカ、アワビ、ウニなど多種多様な魚介類が水揚げされる沿岸漁業の拠点として知られ、山間の地域では米作や野菜栽培などの農業も幅広く行われている。人々の笑顔ははつらつと輝いていた。あの日、あの瞬間までは……。

平成23（2011）年3月11日。震度5強の激しい揺れの後、恵みをもたらしてくれた海は突然、大津波となって牙をむき、町を、家を、人を、次々とのみ込んだ。内陸につながる大動脈の国道

45号線は寸断され、陸の孤島となった各地区では大規模な火災が発生。町の中心部は懸命の消火活動も空しく、焼け落ちた。約1万9千人が平和に暮らしていた町で、犠牲者は800人を超えた。三陸沿岸は古くから「津波常襲地帯」といわれる。東日本大震災による「平成の大津波」は、明治三陸津波（1896年）と昭和三陸津波（1933年）の記憶や教訓が風化し、チリ地震津波（1960年）から51年を経た、まさに「忘れたころ」に襲来した。

109編の体験手記は、震災の「生き地獄」を目の当たりにした人々の嘆きや悲しみ、やるせない思いで満ちあふれている。一方で、未曾有の震災を受けての貴重な教訓、明日への希望も同時につづる。あの日、何が起こり、人々はどのように行動し、何を思ったのか。手記からは陸中海岸の美しい町、山田を襲った震災の全体像がくっきりと浮かび上がってくる。本書では、大津波が押し寄せた沿岸の町内各地、山田▼大沢▼織笠▼船越▼田の浜▼大浦——と、内陸で津波被害がなく後方支援の拠点となった豊間根・荒川地区に分けて手記を掲載、山田町の人々がこの震災とどう向き合ったのかを明らかにする。

山田

Yamada

1

chapter 1

津波が襲った後に住宅街から上がった火は
またたく間に燃え広がった
(3月11日午後5時42分撮影)



凡例

本書には、

- 1 「山田町東日本大震災を記録する会」が主に平成25（2013）年1月～26年3月に公募した手記
- 2 同会の呼び掛けで26年1月に山田中学校、山田高校の生徒から提出された作文
- 3 山田町婦人団体協議会発行の文集「明日へ向かって」第1集（25年3月）、同第2集（同年10月）に掲載された手記
- 4 田の浜婦人会・船越湾漁協田の浜地区女性部が26年3月に発行した文集「忘れない・そして前へ」に掲載された手記
- 5 町内の小中学校の児童・生徒による優秀な作文を集めた「やまだの作文」第40集（24年2月）に掲載された作文
- 6 岩手県警察の警察官らによる震災手記集「使命 証言・岩手県警察の3・11」（25年10月、岩手日報社刊）

の中から選んだ108編のほか、平成24年度「甦れ日本！高校生アスリート作文コンテスト」（公益財団法人全国高等学校体育連盟主催）の本町出身者の入選作1編を収録した。

執筆者の敬称は略し、年齢や学年は手記の提出時期やそれぞれの媒体などに発表された当時のものを記した。**3 4 5 6**の手記については各文の末尾に出典を示した。

また、山田町出身で地理学が専門の小岩清水氏（サイエンス・ポランティア）による特別寄稿を掲載し、地理学の観点から過去に町を襲った津波の実態を分析、先人の教訓を伝えることにした。

※町内各地区の死者・行方不明者は、当時住民票のあった方々と本町に居住していた外国人1人。
※被災家屋の割合は一部損壊を含む。



地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

山田

町役場や文教施設があり、震災前は多くの住宅や商店が軒を連ねていた、中心街の山田地区。高さ8メートルを超える津波は密集する建物を容赦なく押し流してがれきの山に変えた上、大規模な火災を引き起こした。倒壊した家屋やプロパンガスボンベ、車両に次々と引火して勢いを増し、堆積したがれきが消火活動を阻んだ。火災は3日間燃え続けてようやく鎮火。東京ドーム2・8個分の面積に当たる約13ヘクタールを焼き尽くし、今回の津波が各地で誘発した火災の中でも最悪の被害を出したとされる。JR山田線の陸中山田駅や周辺の商店街も壊滅した。人々は高台にある役場や公民館にいったん逃げ込んだが、迫り来る火の手に、山間の豊間根地区などへの避難を余儀なくされた。地区の全家屋の半数に当たる1300棟が全壊、今も多くの住民が仮設住宅などで不便な生活を送っている。

死者・行方不明者	323人
震災前の人口	6,806人
全半壊家屋	1,507戸
被災家屋の割合	62%

生きていた譲り合いの心

〔山田〕 1

山田中学校1年「当時・山田南小学校4年」佐々木深音^{みお}

あの日から私たちの生活は一変しました。たくさん建物が流され、たくさん尊い命が奪われました。

あの日は、学校で6時間目の授業を受けていました。なんの変化もない日々を過ごしていました。そして午後2時46分、聞いたこともない地鳴りと共に、体感したこともない地震が起ったのです。私は、何が起ったのか状況が理解できず、ただ机の下にもぐって揺れがおさまるのを待つばかりでした。1分くらい経っても揺れはおさまらず、校庭に避難しました。中には泣く人もいました。少し経つと、地元の方も避難してきました。そして、保護者の方たちが子供たちを迎えにきました。

余震が続く最中、私は何も考えられませんでした。これからどうなるのだろうか。家族は生きていけるだろうか。家はどうなっているだろうか。ただ先生の指示を待ち、頭が空っぽでした。やっとお母さんが迎えに来ました。しばらく校庭にいましたが、町の様子が気になり、車を止めていた学校の下坂付近の駐車場に行きました。長崎街道に出ると、目の前の光景に思わず目をおおいたくなりました。いつもの街並みが崩れ落ち、がれきの山ができ、至る所で火の手が上

がっています。昨日まで当たり前にそこにあった駅や公園やお店が、跡形もなくなっていました。その夜は、あまりの恐怖に呼吸ができなくなり、病院に入院しました。ベッドの空気がなく、院内は人であふれていましたが、私に長いすをゆずってくれた人がいたのです。自分のことだけで精いっぱいな時でも、他人に対してゆずりあいの精神が病院のあちこちで、息づいていました。あの震災で、私はいろんなことを学びました。失ったものばかりではないのだな、と気付きました。震災から学んだことを教訓に、風化させないようにしていきたいと強く思います。

復興することが恩返しに

〔山田〕 2

山田中学校1年「当時・山田南小学校4年」堀合 泉

大きな地鳴りと激しい揺れが起きました。あまりにも揺れは大きく、机やいす、体全体が建物と同じように左右に動きました。東日本大震災です。町は大きく変わり、辺りは一面焼け野原でした。店もなくなり、買い物など今まで普通にしていたことができなくなりました。たくさんのがれきのために、歩く所がありませんでした。今まで暮らしていた、大好きだった山田がたった一日で豹変してしまいました。

あれから、もう少しで3年です。町は活気にあふれています。震災でなくなった店や、できな

くなっていた漁など、一時止まった時間が動き始めました。しかし、復興の力になっているのは、山田の人たちだけではありません。私たちを元気づけようと、はるばる来てくださったアーティストのみなさん、住宅再建や土地のかさ上げのために来た工事事務所のみなさん、寄せられた募金などの資金、国内外のさまざまな支援に支えられてここまでできました。いくら震災で大変だからといって、被災者だからといって、何もしないのは、支えてくれた方たちに失礼です。そこで私は、どのようにすれば感謝の気持ちが伝えられるか考えてみました。

答えは一つ。復興することです。寄せられた応援に応えることができるのは、私たちだけなのです。

これから、いろいろな方たちに支えてもらうと思います。感謝しながら、私たちは立ち上がっていかねばなりません。この、真っ白になってしまった町に、山田町の人たちで、それぞれが思い描く山田を造りあげていきたいです。それは、私たちにしかできないことなのです。

深く傷ついた心

〔山田〕

3

山田中学校1年〔当時・山田北小学校4年〕 堀合琴乃

千年に一度といわれる大きな津波が来たあの日から、全てが変わってしまった。

初めは何とも思っていなかった地震。だけど、その時の地震は違った。教室のロッカーから教科書が落ち、机の上からも教科書、筆記用具が周りに転がった。しばらくして地震がおさまり、みんなで校舎裏に行った。私は怖くて泣いていた。他の人も泣いていた。しばらくすると祖母が自転車に乗って来てくれた。とても安心した。学校から家に向かう途中、不審な音がして、私と祖母はふり返った。川が逆流して来るのが見えた。町が波にのみ込まれていくのが祖母には見えたという。

家に帰り、急いで荷物をまとめた。棚に飾ってあった小物類は落ち、ガラスの破片もあった。私はとても不安だった。母が仕事に出かけていたからだ。携帯電話もつながらなかった。泣きそうになっていたところに母が帰ってきて、私は泣いた。安心した。しかし怖かった。幸い、家までは津波は来なかったが、家の前にある畑の所まで水が来ていたらしい。

日が暮れてきたころ、通っている学校のすぐ近くに住んでいるいとこたちが来た。話を聞かなくても、彼らの様子から津波の被害にあったことが分かった。夜はボットにあったお湯を使っ

て、レトルト食品をみんなで食べた。ろうそくの火がいつもの照明代わり。みんな黙っていた。それからは忙しく、大変な日が続いた。地震で散らかった部屋の掃除をしたり、役場の方へ物資をもらいに私といとこの2人で行ったりした。夜は発電機とろうそくを使って過ごした。学校にはしばらく行くことはできなかった。時々起きる地震のたびに私は怖くなった。いつもの地震の怖さとは違い、3月11日の事を思い出してしまう、恐怖の対象だった。

今でも地震を感じたり、緊急地震速報を聞いたりするたび、恐怖をおぼえ、あの日の事がよみがえる。それほど私の心には大きな傷ができた。被災者はもちろん、町にも大きな爪痕を残していた東日本大震災。忘れたくても忘れられない。多くの犠牲者や被害を出さないように、あの日の事を忘れず、語り継いでいくべきだと私は考えている。

できることを精いっぱいやった

〔山田〕 4

山田中学校1年「当時・山田南小学校4年」 山崎美来^{みく}

あの日、私は学校で当たり前に授業を受けていた。算数の授業。ごく普通に先生の声が教室に響き、話を聞いていた。するとその時、今まで感じたことのない地震が起こった。私は特に焦っていなかった。先生も周りの子も落ちて着いていた。先生が地震情報を見ようとテレビをつけた

時、テレビは消えた。停電だ。

地震がおさまり、「校庭に逃げなさい」という放送で私たちはすぐ外に出た。家族が来るのを待った。津波なんて来るわけないでしょ。私は軽い気持ちだった。そんな時、先生が携帯を取り出して「津波だ。金石に津波が来ている」と言った。他の先生や生徒が携帯の映像を見に集まっていた。「えっ、本当なの」。そう私は思った。津波のことをようやく信じた。

だんだん怖くなってきた。周りの友達の親は迎えに来る。なのに私の親は迎えに来ない。もしかして来ないんじゃないか……。すぐく焦った。すると見慣れた人が来た。お母さんだった。その瞬間、とても安心した。

私は家に帰った。電気はつかない。水も飲めない。テーブルにろうそくを1本立てた。ごはんは小さいおにぎりとお茶だけ。家にいるのも嫌だった。この家も燃えるんじゃないか。「お母さん、学校に避難しよう」。そう言っても「大丈夫だよ」と受け入れようとしなかった。不安な一夜を明かしたが、家は焼けなかったし大丈夫だった。

しかし、大変なのはここからだ。電気は使えないし水も使えない。私は毎日山の水をくみに行くなど、できることを精いっぱいがんばった。夜はいつもこたつにろうそくを1本立て、少し話をした後、7時ぐらいにはもうこたつの中で寝ていた。早すぎて全然眠くならなかった。「やることがないんだし、寝た方がいい。早く寝れば早く明日になるよ」。毎日のようにお母さんはこう話していた。

やがて電気もつき、水も出るようになった。いくらか前よりは楽になった。でも食べ物がない。私はお姉ちゃんと毎日支援物資をもらいに行った。たくさんの食べ物をリュックに詰め込んで、重い荷物を背負いながら家に帰る。リュックが破けたこともあった。それでも家の役に立っているかもしれないと思うとうれしかった。

そんなことも今では昔の話。今は電気も水も当たり前に使える。食べ物もある。しかし物を大切にしなければいけないと思う。津波なんて来ないと、勝手に決めつけてはいけない。まず落착くまでは避難所にいるべきだと思う。今回の体験を今後に生かしたい。一つ一つの物、人に感謝したい。あの日のことを絶対に忘れてはいけない。

祖母と親友を失って

〔山田〕

5

山田中学校2年「当時・山田北小学校5年」大河原陽花^{ひか}

あの日、私は普段と変わらず、登校の準備をしていました。玄関から見えるおじいちゃんとおばあちゃんの姿。いつもは、玄関から2人に「行ってきます」と言ってから家を出ていました。でも、この日は友達との待ち合わせの時間に遅れそうで急いでいたので、私はあいさつを返さないうで家を出てしまいました。

学校に着いてからもいつもと変わらず友達と遊び、1日が終わるはずでした。5時間目。いきなり教室が揺れて、みんなで机の下に潜りました。怖くて、隣の席の親友と手を握り合って揺れが小さくなるのを待ちました。そして全校のみんなが高台へ避難しました。高台にいても大きな揺れは続き、地響きまでしていました。泣いている子や、震えている子もいました。私は親友の手をずっと握っていました。

しばらくたつと、みんなの親が迎えに来て、次々と帰っていきました。私と親友にも迎えが来たので、帰りました。高台にある駐車場に車を止めて、お母さんが荷物を取って来ると言って家へ戻っていきました。車の中は私1人です。しばらくたつても家族のみんなは戻って来ず、心配になって車の外へ出ました。そこで私が見たのは、町が泥水に沈んでいる光景でした。何が起きたのか分からず、私はただその場に立っていることしかできませんでした。周りの人たちもみんな泣いていました。

水が引くと屋根からお父さんの姿が見え、「そこにいろよ」と言って手を振ってくれました。私は安心して家族5人がそろうのを待ちました。少したって、お母さん、おじいちゃん、お父さん、とみんなが来ました。でも、おばあちゃんが来ません。お母さんに聞いても、お母さんは何も答えてくれませんでした。4人で車に乗り、車を走らせました。どこをどう走ったのかは覚えていません。次の日、私たちはお母さんの実家に行き、そこに泊めてもらうことにしました。その日は、家へは行きませんでした。その次の日から私たちは家へ行き、家の片づけをしました。

1階の部屋に人がいました。おばあちゃんが亡くなっていました。大好きだったおばあちゃん。すごく悲しくて、涙が止まりませんでした。

3月下旬、お母さんの携帯に担任の先生から電話がありました。悲しい知らせでした。親友が亡くなってしまったのです。大事な人を2人も失って、もうどうすればよいか分かりませんでした。

津波から約3年。町も少しずつ元に戻ってきて、みんなが楽しく過ごせる山田町になりました。震災を体験した私たちだからこそ分かる、家族・友達の大切さ。いつまでもその事を忘れず、みんながずっと幸せに暮らせたらいいいなと思います。

父の死を乗り越えて

〔山田〕

6

山田中学校2年「当時・山田北小学校5年」 川村大喜

あの日、小学5年生だった僕は、いつも通りに登校していた。ちょうど僕の誕生日で、少しテンションが高かった。でも、そんな気持ちが一転した。午後2時46分、突然の出来事だった。大きな揺れが起こり、僕たちは机の下に隠れた。揺れがおさまってから、学校裏の避難場所に逃げた。移動して間もなく、波が押し寄せてきた。安全な場所で状況を見に行ったら、信じられない

光景が広がっていた。次々とのみ込まれていく家や街を見て、夢じゃないかと思う自分がいた。

急に家族が心配になった。中には泣き叫ぶ人もいた。僕たちは、みんなの無事を祈ることしかできなかった。津波がおさまり、一晩泊まることになって、体育館に向かった。遠くの方を見ると、オレンジ色に光っていて、大きな爆発音も聞こえてきた。火事だった。すごく大きな被害で、心配は積もるばかりだった。体育館は電気もつかず、トイレも遠く、寒く、お腹も空いて、すごく気持ちが落ち込んだ。味わったことのない体験だった。そんな時、温かいおにぎりやサバの缶詰が届いた。日々、普通に食べている物だけど、すごくおいしく感じた。食事をするこの大切さが身に染みた。

まともに寝ることもできずに、次の日の朝、避難所へ向かった。深刻な気持ちのまま、そこで家族の帰りを待ち続けた。友達之母親がだんだんと帰ってきていた。でも、僕之母はまだ来ない。心配していると、やっと母の顔が見えた。安心した。姉2人も祖母も無事だった。でも、父の行方がまだ分からなかった。探しに行っても、見つからなかった。

僕たち姉弟は、いとこのいる秋田に行くことになった。母は残った。何日かたったある日、父が見つかったことを聞いた。父は帰らぬ人となってしまった。すごく悲しかった。立ち直れないくらいの気持ちだった。でも、乗り越えるしかなかった。帰る家もなくなり、避難所生活が続いた。避難所の人たちと助け合い、協力し合って暮らした。

あの時のことは、今でも一生忘れられない。悪いことばかりだったけれど、普段の生活で気付

かなかったことに気付いたり、大切なことを学べたりした。あの時の記憶は、大切にしていきたい。

生きる喜びを知った

〔山田〕

7

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」 木下 葵

あの日、私は小学校にいました。校庭に避難し、母が車で迎えに来てくれました。家では父が仕事をしているはずなので、父と一緒に山田中学校へ逃げようと母は考えました。そして、海がすぐそばの家へ戻りました。いつも家へ帰る道なのに、その日はおかしいことがたくさんありました。私は何となく嫌な感じがしました。

家に着き、母が家へ入ると同時に、波がすぐそばまで来ました。高い波でした。私はすぐに車内にいる弟の手をとり、母と3人で3階に上がりました。心臓はドキドキして涙が出ました。家がバキバキと音を立てて3階だけが残りました。勢いよく波が家にぶつかり、家ごと流されました。私は夢なのか、現実なのか分からなくなり、死んだのかな、とも思いました。本当に一瞬の出来事でした。

少し時間がたち窓の外を見ると、がれきがたくさんあり、道路が見えません。私たち3人

はがれきの上を歩きました。途中、名前を呼んで泣き叫ぶ人や、ただ黙然としている人を見ました。私たちは親せきの家にとどまることにしました。母は疲れきった顔をし、弟は寝ていました。母は「ごめんね」と何回も私に謝りました。ふと気づくと、家族のことが心配になってきました。今思うと自分たちが生きるということに必死だったのでしょう。

祖父が来ました。なぜここにいると分かったのかはいまだに不思議です。再会を喜びどこかへ出かけました。さすが「木下家のスーパージいちゃん」だと思いました。夕方の少し暗くなった時、突然、父が現れました。涙があふれるくらいうれしかったです。今までの話を話すと父は泣きました。私は初めて父が流す涙を見ました。それからは役場にいるいとこと合流し、関口にある倉庫へ歩いていきました。

3月12日になり、朝、外に出てみるとこげ臭かったです。倉庫の掃除をし、14人（知らない方を合わせて）で暮らしました。知らない方も受け入れられる私の家族はすごいと思い、感動しました。

私は小さいとこたちの面倒を見る日々が続きました。水をくみに行った時、チョコをもらってうれしかったことを覚えています。みんなでトランプも作りました。

私は震災にあつてから、人の優しさを知ることができました。困ったときには誰かが支える。そんな心がこの先も続いていってほしいです。そのために私たちは、今は苦しいかもしれませんが、優しい心を持ち、山田町と共に精いっぱい、生きていくしかないのです。震災を経験した私

たちにしか分からないこと。それは、生きていることの喜びです。

友達の遺志継ぐ

〔山田〕 8

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」 小林優太

その日は悪い事は起こらないはずだった。あの地震さえなければ。

その時、僕たちは体育の授業で体育館にいた。地震が起こるとは全員が考えていなかっただろう。地響きと共に地面が大きく揺れ始めた。天井の照明が今にも落ちてきそうならいだった。僕たちは危険だと判断し、やつとのもので非常口から校庭へ逃げる事ができた。初めてとても大きい恐怖を感じた。身震いが少しの間止まらなかった。その時はみんな両親の事を考えていただろう。

親と合流することができ、車で夜を過ごした。街からの爆音で寝ることがあまりできなかった。それから限られた食料での避難所生活が始まった。避難所は狭くて寒く、暖房をつけてもあまり暖かくはならなかった。10日ぐらい過ぎたところに、親戚の家に行くことにした。道中で見たのは、がれきだらけの街並みだった。親戚の家での生活は避難所よりはましだったが、電気が使えないのが不便だった。

4月になり、自分の家へ帰ってみると、目の前まで津波が来た跡があった。家に入ると、全ての物が落ちたり倒れたりしていて、地震の強さを物語っていた。学校に行ってみると、少しない人もいたが、クラスメートが教室に集まっていた。そこで友達が津波に流されて亡くなったという話を聞いた。最初は信じられなかった。だが本当の話だった。その人は震災の日は病気で家にいたらしく、逃げることもできなかったらしい。

次の登校日、図書室で追悼式が行われた。泣いている人が多かった。その時に僕は思った。僕たちが亡くなった人の遺志を継いでいかなければいけない、と。その人の分まで生きなければ、と。あの日から約3年がたとうとしている。あの震災の事を後の世代へと伝えることが、震災を経験した僕たちの役目なのだ。

「当たり前」の幸せ

〔山田〕 9

山田中学校2年「当時・山田北小学校5年」 齋藤南海^{みなみ}

あの日、誰もが想像していなかった大きな地震があり、津波が山田町に押し寄せてきた。東日本大震災。たくさんの方が亡くなり、絶望しか感じない日々が続く、不安だった。

私はいつも通り学校に通い、いつも通りの生活を送っていた。しかし、授業中、大きな揺れが

おそった。先生方に連れられて急いで学校裏に向かい、それぞれの親が迎えに来るのをひたすら待った。しばらくして私の親が来て山の上に逃げた。必死に上へ上へ、ただひたすらに上を目指して走った。何かが倒れていくようなすごく大きな音がした。その方向を見てみると、たくさん家、電柱、木々が砂ぼこりを立てながらくずれさっていった。黒ずんだ汚い波がどんどん町をのみ込んでいき、私の家の方へ近づいて来るのを見た。怖いという感情は全くなく、ただぼう然とながめているだけだった。

それから私は、宮古のおばあちゃんの家に避難した。部屋の中は真っ暗で寒くて、ただ不安で明日がどうなるかも分からずそのまま眠りについた。次の日、目が覚めると当たり前だがおばあちゃんの家だった。多分私は、心のどこかで夢だと思い込みたかったのだ。自分の家が、町がなくなつたという事実はあまりにもショックで信じたくなかつた。しばらく私たちはおばあちゃんの家に住んでいた。その間、誰とも連絡も取れず、山田がどうなっているかも分からない毎日ですごした。そんな時、母から「Aちゃんが行方不明だつて」と聞かされた。初めは「何、冗談言ってるの」と思ったが、後からこの子が見つかったと聞いた。すごく、すごく悲しかった。だが私は家族の前では絶対泣かなかつた。というより泣けなかつたのだ。家族のみんなが泣く姿を一度も見ることがなかつたからだ。私は夜、みんなが寝た後、一人で泣いていた。そんな夜がずっと続いた。

友達や家をなくした悲しみを抱えながら学校が始まった。最初は山田にすることもつらかつた

が、友達的笑顔を見られるようになり、安心したし、幸せだなと思えるようになった。この小さな幸せを感じた時、私は今まで当たり前だった事が幸せな事なんだと気づかされた。

当たり前にできていた事ができなくなる怖さ、悲しみ、つらさ、これに気づいた時にはもう、大切な物を失っていた。誰もがそうだったと思う。だから私は、この経験があったことで、壁を乗り越える強さ、思いやり、本当の幸せに気づけたのだと思う。つらくて苦しい体験が私たちを成長させてくれたのだ。

この経験を忘れず、今の生活が幸せだということを心にとめておいてほしい。今を大切に、精いっぱい生きてほしい。

友達の分まで生きる

〔山田〕

10

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」佐々木^{ひまり}緋毬

ゴーツという地鳴りが響き、その直後大きな揺れが私達を襲った。午後2時46分。私はあの時を忘れない。

当時私は、小学5年生だった。いつものように授業を受けていた時、その悲劇は起こった。あんな事が起こるなんて誰も想像をしていなかっただろう。

地震がおさまった時、全校生徒はみんな学校の後ろの高台に避難した。そこには、町から避難してきた数人の人たちがいた。避難訓練は何回か経験していたが、本当の避難というものは初めてで、避難してきた人たちを見るのも初めてだった。自分が過去に経験してきていないものになり、少し恐かった。

そのうち、保護者が迎えに来た生徒は帰れることとなり次々と下校していった。私の親も迎えに来たので私は5年生みんなに「またね」と言った。その言葉が、クラス15人で話す最後の言葉になるとは思わなかった。

家に帰ると母がいた。その姿を見てなぜか涙が流れた。その日から大変な生活が始まった。

水は自転車ですくまで行き、くんできて、食料は救援物資と冷蔵庫にあったものだけとなった。ある日、私といとこが物資をもらいに並んでいると、テレビの取材が来た。私たちはインタビューされ、「今、欲しいものは何ですか」という質問に答えることができなかった。欲しいものがありすぎたからだ。どんなに考えても答えが出ない。店も流され、得られる食料といえは救援物資しかなかった今、何を言えがいいのだろうか。言ったところで本当に来るのだろうか。

生活もやつと落ち着いてきたころ、友達の死が告げられた。私を児童会に誘ってくれて、ピアノと一緒に弾き合った仲だった。

あの日からもうすぐ3年がたとうとしている。私は今でも友達の死が信じられない。まだどこかで生きているのではないかと思ってしまう。ピアノを弾いていても部活をしていても、友達の

存在を近くに感じ、クラスメート全員が友達の分まで強く生きる。これこそ私たちが今できることだと思う。

そして、どこかで見守ってくれていると信じることによって、被災者は犠牲者の思いと共に生きられる。

語り継ぐ大切さ

〔山田〕

11

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」 澤田拓真

僕はこの先、何十年生きていくのだろうか。その間、様々な経験をするだろう。楽しいこと、つらいことや悲しいことも経験するだろう。

しかし、東日本大震災で経験したことは、生涯忘れられない出来事だろうと確信する。

変わり果てた山田町を目のあたりにしたのは震災発生3日後であった。大好きな町が悲惨な状態になってしまった、という事実をどう僕に知らせたらよいかと家族は悩んだようだ。しかし、大人たちの表情や会話から、僕はこの町が尋常な状況ではないことを理解していた。

母に連れられて高台から町を見ると、そこには信じられない世界が広がっていた。僕の記憶にあった町ではなかった。覚悟はしていたが衝撃を受けた。ぼうぜんとしてみると、母の知人が声

をにかけてきた。お互いの無事を喜び、それと同時に悲しい知らせも聞かされた。

悔しかった、悲しかった。どこに怒りをぶつけたら良いかわからずに自分自身の心のやり場がわからなかった。

地震も津波も自然災害だから――。しかし、おそらくこの災害を経験した人々みんながそうは割りきれない気持ちでいただろう。

人間は自然と共存してきた。その関係はずっと続いていくだろう。しかし、自然は時として荒れ狂い、人間を苦しめる。いつかまた、災害はやってくるだろう。そのことを僕たちは忘れてはならない。

この東日本大震災での経験を後世に伝え、減災に努めるにはどうしたらよいのだろうか、もう二度とあのような悲しみが起きないようにするにはどうしたらよいのだろうか。語り継ぐこと。そのことが大切ではないかと僕は思う。

僕は戦争を経験していない。だが、戦争の悲惨さは理解しており、戦争を起こさないためには世の中の人間が助け合い、争いを避けるべきであることを理解している。戦争については本を読んだり、テレビを見たり、戦争経験者の話を聞いたりすることで戦争について考える機会を得たからだ。

今回の震災について、震災を経験していない人々や後世に語り継ぐことは、自然災害や減災に對して考える機会になるのではないか。

人間は知恵ある生き物であり、それによって進歩してきた。自然災害に負けない知恵を持って生きていきたい。そう思った。

妹との再会願ひ

〔山田〕

12

山田中学校2年「当時・山田南小学校5年」 山根大弥^{だいや}

3月11日午後2時46分、誰も予期せぬ未曾有の大震災が発生した。

僕は、学校にいて校庭に避難していた。友達とふざけながら、僕は「大丈夫、またいつも通りに過ごせる」と思い込んでいた。寒くなってきたので近くの保育園の中に入り、迎えが来るのを待っていた。迎えはなかなか来なかった。そんな時、外からボン、ボンと爆発音が聞えてきた。不思議に思っ外に出てみると、燃え上がる炎が目飛びこんできた。僕は、地震の揺れを思い出したり、炎を見たりして不安がこみ上げ、泣いてしまった。しばらくたって自分をだますように「大丈夫、大丈夫」と言い聞かせて涙をぬぐい、その日は就寝した。

次の日になり先生に起こされ、親が迎えに来てくれたと聞き、一安心していた。たった1日ではあったが、すごく久しぶりのような感じだった。僕は、真っ先に妹のことを聞いた。親の顔がみるみる暗くなり「流された」と言った。僕はその言葉が信じられず、「冗談だよ」と何回も

聞いたが反応がなかった。しばらく歩くと親の友人に出会い、妹のことを聞かれると親が泣き出した。これでようやく「本当だったのか」と気づき、涙があふれてきて止まらなかった。

しばらくして涙も止まり、祖父母のいる避難所に向かって歩き出した。町は見渡す限り、津波で押し寄せたがれきでいっぱいだった。僕は、あ然としてしまった。それでも立ち止まらず避難所に向かった。途中、自分の家の辺りを見た。昨日見えた炎のせいで、トタン屋根以外は全てが灰になっていた。妹が流されたのは家の中だと聞いていた。今すぐにでも探したかったが、危険だったので近づくことすらできず、離れた場所から無言のまま見続けていた。避難所では祖父母との再会を喜び、全員で親戚の家に泊めてもらうことになった。

あれから3年がたち、今は仮設に住んでいる。以前住んでいた所は、がれきも撤去されてもう何もない。妹はいまだに見つかっていない。妹とはあの日を境に会えないが、また会える日を願う、僕は今日もしっかりと生きていく。

平和だった当たり前の日々

〔山田〕

13

山田高校2年〔当時・山田中学校2年〕 阿部祥子

あの日、私は中学校にいました。教室にいと、あの揺れが来ました。本当に、本当に途方も

なく大きな地震でした。学校の天井が崩れる、と思いました。そんなことにはならなかったけれど、自分は確実にここで死ぬんだとすら思いました。生まれて初めて死を覚悟しました。でも、私は死にませんでした。

体育館に避難し、そこでは皆それぞれ、不安そうだったり、楽しそうに談笑したり、泣いていたり、ふざけていたりといろいろでした。家や車が無事な家庭では、その日のうちに学校に子供を迎えに来ました。どんどん人は少なくなっていました。高校の体育館に移ると、生徒はもっとと少なくなりました。その心細さ、寂しさは本当にうまく表現できません。自分の親は迎えに来ないし、親しくしゃべれる友達はいなくなっていました、そこにいる間は毎日泣いていました。絶対に生きていくはずだと自分を励ましたが、何の情報もないので、じっとしているだけでした。今もその時のことを思い出すと、すごく嫌な感じがします。

津波に襲われた町を見たのは、震災発生後、数日たってからでした。思わず涙が出てしまいました。ぼうぜんとしました。何もなくなっただけというか、がれきしかない町を見るのは不思議な気持ちでした。やたらと風が強く吹いていたのを覚えています。家族と無事に再会できた時は、泣くつもりなんて全くなかったのに、思いつき泣いてしまいました。家族と自分が生きていて、心の底から良かったと思います。

被災後の体験で印象に残っていることはたくさんありますが、中でも遺体安置所に行ったことはしっかり覚えています。津波が来なければ、そこに行くことはなかったのに、不思議な気分では

す。親族のおばさんの遺体を確認しに行きました。私はそこで、人が死ぬということを実感しました。安置所の外はかすかに嫌な臭いがして、それが私を怖いと感じさせました。中に入るとひやりと涼しくて無臭でした。一面に並ぶブルーシート、白い仕切りをはさんで、その奥は薄暗くてよく見えませんでした。怖かった。

どんなに時間が過ぎても、震災のことはよく覚えています。本当に昨日のこのように思い出すことができます。多分、数年後でも数十年後でも、思い出すことができるでしょう。そう考えると、震災後から時間が進んでいないような、奇妙な気持ちに襲われたりもします。

自宅にいる時、ふと「震災前はこういうふうに住生活していたんだろう？」と思うことがあります。でも、具体的には思い浮かばなくて妙だなと思います。思い出せないほどに、平和で当たり前すぎる日々だったんだと思うと切なくなります。私はそれでも、今は自宅でのうのうと暮らして、家族も生きています。家も失って、家族がみんななくなってしまった人がいます。それ以上につらいことはないと思います。私はとても幸運でしたし、今も幸せな状態なのだと思います。

何もかも失った人も、そうではない人も、同じこの町に住んでいるという意識と、震災の教訓を生かして、助け合っていけたらいいなと思います。忘れたいつらい経験もあるけれども、忘れなければいいなと思います。

全てが変わった日

〔山田〕

14

山田高校3年〔当時・山田中学校3年〕 山崎庸子

あの日を境に私の知る山田町は姿を消しました。今まで生きてきた中で、これほど鮮明に記憶に残った事はありませんでした。

当時私は中学3年生で、その日はホームルームが終わり、教室で帰りの準備をしていました。クラスメートと共に階段を下りている時、地震が発生しました。かなり大きなと感じつつも、すぐ収まるだろうと思っていましたが、先生が大声で「急いで机の下に入れ！」と叫びながら教室を見回りに来たのを見て、何やら大ごとだなと思いながら机の下に入りました。揺れが収まると、学校に残っていた生徒は校庭に集められました。下校時間から地震の発生まであまり時間が経過していなかったもので、下校途中だった生徒が一人、二人と学校に引き返して来ました。私は友人と「きつと今日のニュースで取り上げられるだろう」などと話をしていました。地震発生直後は楽観的な考えだったのです。

しかし、そのしばらく後、普段聞こえるはずもない波の音が海の方から聞こえてきました。津波が発生したのです。数人の先生が確認し、生徒は体育館の中で過ごすことになりましたが、パニックで過呼吸になる生徒が何人もいました。それから一日中余震が続きました。最初のうち

は、図らずも学校に泊まる形になったことで、生徒たちは元気がありました。ラジオや学校に戻って来た人たちから告げられる情報を聞くたびに体育館の中は静かになっていきました。

学校には住民の方々が次々と避難して来ました。学校中の暖房器具や、少しでも寒さをしのげるようにカーテンやタオルなどをかき集め、名簿などを作成しているうちに、あつという間に夜になっていました。町で火事が起こったようで、体育館の窓から空がオレンジ色になっているのが見えました。中学校にも飛び火する危険があるということで山田高校に避難することになりました。時計は地震発生時のまま止まり、時間は分かりませんでした。外は真つ暗で、3月といても雪が残っていたので高校に着くまでがとても長く感じ、怖かったです。体育館に着いた後、就寝時間となりましたが、寒さと緊張のためか一睡もできませんでした。

翌日、1人1個のおにぎりと1グループに1缶ずつキャンパンが配給されました。それをもたらした時、普段当たり前のように毎日食事が取れているということがありがたいことなんだなと思いました。前日の夜は何も食べる物がありませんでした。親が迎えに来ないと帰れないということだったので、町はどうなったのだろう、などと考えながら待っていました。午後になって親が来て、ようやく学校から出ることができました。外に出て、私は言葉を失いました。前日まで普通に見ていた町が、見渡す限りがれきの山になっていました。通学路が通れない状態になっていたのも、車1台通るのがやつとの山道をたどって何とか帰宅することができました。家は停電しており、ラジオで情報を得るだけで、町の様子をニュースで見えることはできませんでした。

震災からしばらくたって初めて、自分の目で町中を見た時はショックでした。町のほとんどががれきに埋もれ、駅の近くには津波によりどこからか流されてきた大きなタンクが横たわっていました。教科書でしか見たことはないけれど、終戦後の町みたいだなと感じました。あれから3年がたとうとしている今、町の復興もだんだんと進んできました。今までの山田町とは町並みがかなり変わってしまったけれど、また新しい山田町ができていくように願っています。町が再建された後に今回のような震災が起こっても、一人の犠牲者も出ないようになってほしいです。

少しでも復興を手伝いたい

〔山田〕

15

山田南小学校5年 佐々木美結^{みく}

わたしたち5年生は、震災後の山田が、どのようにして復興に向けて歩みを進めているのかを調べ、そのことをもとに学習発表会のげきを作りました。震災に関わったげきをする聞いて、震災があってもがんばっている人たちをえんじたかったので、げきの完成が楽しみでした。

山田の復興について調べ、学習を進めていくと、被害は大きかったけど復興の計画が少しずつでも進んでいて、少し安心しました。はじめに役場の方が来てくださって、山田の被災の様子や今後の山田の復興計画について聞くことができました。取材に行った場所は、スーパーの「びは

ん」・魚市場・むしやきカキが食べられる「かき小屋」(みんなは行けないので先生だけ行きました)・なかよし商店街と、どの場所もわたしたちの町にとってもなじみのある場所です。

役場の方の話では、被害額が大きすぎて、すぐおどろきました。200億円とあまりにも大きく、逆にピンとこないくらいでした。たくさんの建物が流されて被害を受けたということも聞き、本当に大変な状況だということがわかりました。わたしは、「こんなに被災をして復興できるのかな? 無理なんじゃないのかな?」と思っていたけど、10年くらいかけて復興していくという話を聞きました。正直、「長いなあ」と思いました。

びはんの方に復興について話を聞くと、ほかの店や町に比べて再開が早かったことがわかりました。専務さんは、震災の翌日から、山田のために何かしなければいけないと考え、いろいろな人に連絡をとったそうです。今のお店が再開できるまでの間、仮設のお店や移動販売をしているときに聞いた、「早くお店を再開してほしい」というお客さんの声にこたえるために、おぼん前までにはという目標でがんばってきたそうです。わたしは、震災の翌日、「さくら幼稚園」にひなんしていました。とても山田町の未来や将来の様子を考えられる状況ではありませんでした。でも、そんな中で専務さんは、少しでも山田の人がくらしやすいようにとたくさんの努力をしてくださっていました。専務さんの、山田の町を思う強い気持ちを感じました。

魚市場の方にお話を聞いたときには、去年までの2、3割だけど魚がとれはじめているということを知り、うれしく思いました。取材をした時間は夕方だったので、作業の様子は見ることは

できませんでした。ちがう日に先生方が水あげの様子をビデオでとったのを見ました。暗い中でもたくさんの漁師の方々が一生けん命働いていました。震災前に比べるとまだまだそうです。山田の復興を信じて、そして生きていくためにがんばる漁師さんの姿に人間の強さを感じました。

わたしは、学習発表会で漁師のおかみさんの役をえんじることになったのですが、漁師の方々の漁をしている姿を見て、真剣にえんじようとあらためて感じました。

練習期間は短かったのですが、漁師をはげますおかみさんの役がしっかり表現できるように練習しました。特にがっかりしている漁師に「何しけだあ顔してんだあえ」とかつをいれる場面や、「日本中の人だづが応援してけでんだよ」と言う場面では、本当に気合いを入れて練習しました。また、復興に向けてがんばっている町の人や漁師さんのことを考えると、「負けてはいられない。最高のえんぎをしよう」と力になりました。

本番では、満足できたし、会場のみなさんにも思いを伝えられたと思います。

しっかりと復興するまでには、10年かかる見通しなのだそうです。私も、10年後には21才になっています。私も人のためになるような仕事をしたいと感じています。私の将来の夢は薬剤師です。こんな私でも、少しでも復興の手助けができたらと、今、がんばっています。

山田中学校1年 伊藤真由

私が、あらためて「支え合うこと」の大切さを感じたのは、3月11日に起きた東日本大地震から今日までのことである。地震が起きた日のラジオを聞いていると、色々な情報がながれてきて、次の日、自分の町を見るのがこわかった。

テレビではよく、外国でおきた大地震や津波を放送しているけど、まさか、自分もそんな体験をするとは、正直思ってもいなかった。もちろん、夢であってほしかった。夜中の地震のたびに目が覚めて、ただ、ただこわかった。でも、私の家族は「大丈夫」と何度も声をかけてくれて、少しだけ、ほっとすることができた。

3月11日の山田町は、想像以上に変わりはてていた。海に近かった家は、もちろんない。町の一部が焼けている。橋の上から自分の町を見下ろした時、あまりのショックで、一瞬、声が出なかった。みんなは、無事なのだろうか、とか、とても心配でたまらなかった。

地震が起きた日は、卒業式のちょうど1週間前だった。卒業式がみんなそろってできないということを知ったとき、すごく悲しかった。3月11日の大地震で、何もかも変わってしまったて、一度は他の町へ行くことなどを家族で話しあったけど、大好きな自分の町から離れることに私は反

対だった。山田のお祭りも好きだし、仲の良い友達と離れ、他の学校に通うことがいやだった。

私は津波のとき、高い道路に逃げたので津波を目の前で見た。川からすごい勢いで水が流れてくるのや、壁のようになって襲ってくる波、流れてくる電信柱や家の屋根、2、3人の人が救出されるのを見た。津波の一部始終を見て、山田町は変わってしまったても、やっぱり残ってたかった。

大きな余震がつづく中、私とお母さんが再会したのは3月12日。私は、意外にも早く再会できた喜びが、こみ上げてくるばかりだった。でも、お母さんは、それだけではなかった。朝早くから、私とおじいちゃん、おばちゃんを探してくれていた。お母さんが泣いていたのは、今でも強く印象に残っている。「大丈夫」とはげましてくれた、家族や親せきの言葉も印象に残っている。

そんな経験から感じたことは、やっぱり支え合うということだ。私が避難していた親せきの家では、食べ物から着る物まで、いろいろな物を分けてくれた。1カ月くらい私たちを支えてくれた。そのおかげもあり、住む所も見つかって楽しく学校に通っているの、今度は逆に何かしてあげたいと思った。

学校には、全国からの物資や手紙が飾られてあつてすごいなと思った。この感謝の気持ちを絶対に忘れず、震災に負けないように頑張りたい。最近、被災したお店が次々とオープンしていて、すごくうれしいなあと思う。それが山田町民の元気にもつながると思った。そして、支え合いながら、一日でも早く、復興できればいいなあと思う。3月11日の大地震は忘れない記憶でも

ある一方、忘れてはいけない記憶なのではないかと思う。そして、みんなの支えがあったからこそまで来れたんだということは、忘れないようにしたい。

地震から約9カ月。今でも、まだ不安なこととはたくさんあるけど、こういうときだからこそ「支え合うこと」が大切だと思うし、それを意識して過ごしていかなければならないと思った。あらためて「大地震」ということから、「支え合うこと」を考えさせられた。私は、こういう災害が起こったからといって、人に頼ってばかりではなく、勉強でも、部活でも積極的に取り組めるようにしたい。

「やまだの作文」第40集

私を変えた母の教え

〔山田〕

17

山田中学校2年 佐藤雅依瑠^{あいら}

私が今、伝えたいこと、それは「誰しも一人じゃない」ということだ。これほど一人じゃないということ私を私は痛いほど思い知らされたことはない。

3月11日、私たちは未曾有の大震災を経験した。学校から見た美しい山田の景色、地域の人々の笑顔、家や大きな建物も昨日まで当たり前にあつたとは思えない無惨な姿となった。家族はど

うしているだろう。私の家は？ 物は？ そんなことばかりが頭をよぎる。あの時の気持ちは今も、そしてこれからも忘れることはないだろう。

次の日の午後、母が私を迎えに来てくれた。母が、「無事でよかった」と涙を流して言ってくれたあの時、私は涙が止まらなかった。それから2日くらいたった。気仙沼へ仕事に行った父が帰ってきた。運送の仕事をしていて、いつも明るい父だったが、その時は違っていた。「これからどうすればいいんだろう……」。そう呟^{つぶや}いた父の表情は今まで見たことがないほど疲れきっていた。私は心が締めつけられた。

数日後の山田も、あの時と変わらない無惨な姿だった。町のおいも潮風というよりも魚が腐りきったような、すべてが燃えてしまったような、表し方のないようなおいだった。本当にこれは自分の住んでいる町なのだろうか……。そんな思いと共に自分の目にうつる現実を疑った。涙が出そうだった。いつもは、学校が面倒だと思っていた震災前とは逆の思いがあつた。こんなに学校に行きたいと思つたのは初めてだ。電気も水もない生活はとても苦痛だった。あらためて今までの便利さ、裕福さを知った。

昼夜問わず揺れる。余震が来るたびに恐怖心がよみがえる。いつになったらこの生活から離れることができるのだろうか。そんな不安が毎日続いた。そんなとき、母が言ってくれた言葉が私のそれまでの気持ちを変えた。

「確かに毎日地震が来て怖いかもしれない。けど怖いのは雅依瑠だけじゃないし、お母さんも

怖いけど家族の命を守らなきゃならない。今度また大きな地震が来たとき、足を引っぱったら自分だけでなく他の人まで犠牲になるかもしれないんだから。強くなれ」

その言葉で私は自分の心の弱さを思い知った。それと同じように自分は誰かに助けられたり、助けたりしながら生きている、たとえ離れていても一人じゃないんだという気持ちがあふれてきた。母のその言葉で少しは心が軽くなった気がした。少し強い余震が来た時、私は今でもその言葉を思い出す。

何日かたって、ようやく電気が復旧した。あの瞬間は忘れられない。やっと元の生活へと歩み始めているのだろうと思うと心がはずんだ。そのうち水道も復旧し、元の生活と同じようになったが、町の様子はあまり変わらない。しかし、元の生活に戻り始めてきたのも、復旧させるためにがんばっている人たちのおかげだと感じている。

震災から4カ月くらいたって、町は少しずつ活気と笑顔を取り戻しつつある。しかし、この震災が残した大きな傷痕が元に戻るにはまだまだ長い年月がかかると思う。全国各地から来るボランティア、支援物資、がんばれという励ましのメッセージ……。日本だけでなく世界の人々がこの震災復興のために一つになってがんばっているのだと思うと、感謝の気持ちがいっぱいあふれてくる。震災は大きな爪痕を残していったが、私たちに「一人じゃない」と教えてくれた。

今考えれば、確かに支えられて生きていると心の底から思える。自分自身だって両親がいて、両親にもさらに両親がいるというように親がいなければ生まれてこれなかったし、一人だけで

生きていくことはできないと思う。自分が普通の生活ができるのも自分たちのために働いてくれたり、動いてくれたりする人たちがいるからだ。

私は、震災で多くのことを学ぶことができた。さまざまな体験と母の言葉がなかったら、この8カ月で周りの人たちのことを考えて生きていかなかったと思う。これから私は自分だけでなく、周りの人たちを考えられる思いやりのある人間になりたい。母はきっと私にそう伝えたかったのだろう。

「やまだの作文」第40集

早くみんなが笑える町に

【山田】

18

山田中学校2年 佐藤明恵

東日本大震災。罪のない多くの方々をたった一日でこの世の人ではなくなしてしまった。たくさんの家や思い出も破壊して。

あの日、奇跡的に震災5分前に撮ったクラス全体の笑顔の写真がある。その写真を見ると、怒っていても、笑っていても悲しくなり、涙があふれる。「この時は、みんなとつらい体験をし、一番の友達を失うなんて思わなかったなあ」。過去に戻れないと分かっている、震災から

8カ月たった今でもまだ、心の整理はついていない。

3月11日。岩手・宮城・福島を大きな地震と津波が襲った。あの時、人生で初めて「死ぬかも」と思った。町の様子も見えず、情報も入らず、あらためて「震災にあったんだ」と思われた。体育館に全校で避難して、暗くなって気付いたら色んな噂が流れていた。本当の事や、大げさな事。でも、あの時は全てが本当に思えた。それだけ、避難はつらかった。

次の日、私は兄弟と共に内陸に20日間、預けられた。その中で、震災をばかにする人に出会った。その人は、私たち家族を被災者だとは思わず、普通に「映画みたいだねー。ありえない」と笑っていた。悔しかった。なぜ、理解してくれないんだろう。そんな事、思っても口に出すことじゃない。だって世界には70億人もの人がいる。全員が理解し合える訳がない。でも、相手側の立場になって考えれば少しは理解できるんじゃない？ そんな思いが心に残った。

でも、世界には支援の声がたくさんあった。Tシャツ。靴。ノート。スクールザック。その中で、私が立ち直る、心を整理するために必要な言葉を今日、見つけることができた。「あれはあれで必要な過去」――。シンプル。そして何も考えてないような気もする。これはタレントのベッキーさんの言葉だ。自分には心をふわっと浮かせてくれる、優しい言葉だった。大切な友達と離ればなれになった。たくさんの方が亡くなった。それがなんで必要？ そう思った。でも、自分を責めずにいられるようにしてくれた。前へ踏み出す勇気をくれた。自分にとって必要な言葉なんだって思えた。うれしかった。

まだ、震災の傷は消えてない。いや、消してはいけないと思う。二度と未来の人に同じ思いをしてほしくないから。山田町は震災の傷痕を消さずに何らかの形で残してほしい。復興をがんばって、早く町のみんなが笑えるようになったらいい。

自分は、生きていこうと思う。どんなに苦しいことがあっても、どれだけつらいことがあっても。生きたくても生きられなかった人がある。人のために自分の命を犠牲にした人がある。生きたくて、がむしゃらに津波から逃れた人もいる。そんな人たちに堂々と、「自分は、みなさんの分も人生を楽しみ、充実させ、一生懸命生きました」と言えるように。生きていくことにつらくなり、今にも自分で命を絶とうとしている人。苦しみを人に言えず苦しんでいる人。そんな人たちが一人でも多く救えるようになりたい。ほんの少しでもその人の心をいやすことができ、生きる力を与えられるような、そんな人になりたい。

「10年後の自分へ。周りの人を笑顔にできてますか。もちろん、自分は笑顔ですよね？ 苦しい時、つらい時は泣いてもいい。でも、周りの人まで悲しませないで。そして、私が生まれた時、私は泣いていて周りは笑顔でした。私が死ぬ時、周りが泣いて私が笑顔になるような人生を」

山田中学校3年 富士有哉

3月11日、思いもよらぬ出来事が起きました。

この日は、たくさんの方がいつも通りの日常を過ごして、いつも通りの景色を見て、いつも通りに過ごしていたでしょう。そう、僕もその一人でした。学校に通い、友達と何気ない会話をし、普通の学校生活をしていました。誰もが、あんな悪夢を想像してはいなかったでしょう。

授業が終わり、掃除を終え、帰りの短学活をしている時でした。グラグラと揺れはじめました。揺れは思ったより強く、長い時間揺れていました。突然の大きな地震に叫び声なども聞こえませんでした。その時、先生の「外に避難します」という声で、僕たちは校庭へ「おはし」（押さないう・走らない・しゃべらない）を守り迅速に避難しました。この時点では、大きな地震だったなとしか思っておらず、津波も来るわけではないという甘い考えでした。

校庭に避難した僕たちは体育館に移動しました。この時は、早く家に帰りたいと思っていました。校長先生の話聞いていました。その内容は、町は大変な状況で、家に帰るのは困難なので、ここで一晩過ごすということでした。その後、バッグを取りに自分のクラスに戻りました。教室から見た光景は、かなり衝撃的で信じられませんでした。何度か遊びに行った友達の家が跡

形もありませんでした。そんな光景を見た後に、体育館に戻り、津波のことや、これからどうなるんだろうということを友達と話していました。

突然のことにパニックになり、泣く人も多数いました。辺りが暗くなっても、電気もなく、水もない。毛布が2枚あり、僕たちは7人くらいで使いました。その日はかなり寒く、腹も減り、今まで経験したことなかった日でした。

夜になりました。外は暗いはずなのに、赤く明るく光っていました。外を見ると真っ赤な炎でした。火事の勢いは強く、ここまで火が来る恐れがあったので、山田高校に避難しました。空を見上げると、いつも以上に輝く星空でした。僕たちは、山田高校の体育館で寝ました。目が覚めたらいつも通りの朝が来るはずと願いながら。しかし、状況は変わりませんでした。朝食が出ました。おにぎり一つと、コップ1杯の水でした。食べ物の大切さを実感し、作ってくれた人たちの優しさに感動しました。

一番心配だったのが家族の安否です。父は内陸の方に行っていたので大丈夫だと思ったけれど、母は地震の時間帯は仕事帰りで、兄は遊びに行っていました。嫌な予感もして不安でしたが、昼ごろに母が迎えに来ました。心が落ち着きました。やっとのことで家に帰ることができると思うと安心しました。町の様子がとても気になりましたが、裏道から帰ったので、いつもと変わらぬ景色でした。本当に津波が来たのか？と思いました。

家に着くと、家族全員とばあちゃんたちも無事で安心しました。疲れや緊張が一気にほぐれま

した。ほっとしたせいか、腹の虫も鳴きました。でも、水もなく、食べる物も家にはありませんでした。食料を探しに兄と外に出ました。町の様子も気になり、見に行きました。地獄の光景でした。ばあちゃんの家があった所の一带は、津波と火事によって大きな被害を受けました。

見覚えのある家、小学校からの友達の家すべてを焼きつくしてしまいました。ばあちゃんの家にあった僕の思い出の柿の木も流されていました。心臓が止まるような出来事でした。暗くなってきたので家に帰り、食べる物もないのでボーっとして、家族と今回のことを話し合って寝ました。でも、すぐ目が覚めました。何とも言えない気分でした。

3月13日。まだ火事は続き、余震も絶えず、不安でした。この日は食料を求めて、いつものスーパーに行きました。もちろん営業はしていません。しかし、流された商品を自由に拾っていいという許可があったので、拾わせてもらいました。こういう日々が何日か続き、ついに電気が通りました。3月19日、地震発生から9日目のことでした。その2日後に水道が通りました。地震発生から1週間はとてつらい日々でしたが、人と人との関わりや、何気なく使う水や電気の大切さを学びました。

千年に一度といわれる今回の震災は、失ったものも大きすぎましたが、得たものもあります。それは、支え合う大切さです。何十年先も、東日本大震災について忘れず、この気持ちを次世代に受け継いでいかなければなりません。

「やまだの作文」第40集

「いつか胸を張って」 僕の挑戦

〔山田〕

20

黒沢尻北高校1年「当時・山田中学校2年」佐藤貴大^{たかひろ}

いつもの練習をするために――。そう、いつものように。

平成23年3月11日。あの日中学2年生だった僕は所属しているソフトテニス部の部活動のため、学校から少し離れた体育館へ移動しようとしていた。帰りの会終了のチャイムが鳴り、教室を出ようとしたその時、今まで体験したことのない揺れに襲われた。先生の指示で僕は机の下にもぐった。ものすごい地鳴り、そして悲鳴。一旦おさまっても余震がすぐに襲ってきた。

僕達はその地震とともに昨日までとは異なる世界に入り込んだようだった。中学校は高台にあり、まわりは山に囲まれている。僕達は教室から外へと避難した。海からは遠いのに、油が浮いた海とドブの水が混ざったような臭い。息もしたくない臭いだった。山田町がどんなことになっているか分からない状況で生徒を下校させるのは危険だという学校の判断で、その夜は体育館で過ごすことになった。先生方と僕達生徒、そして避難してきた人達は、飲まず食わずで、暗く寒く長い夜を過ごした。避難所になった中学校には沢山の人々が避難してきて、町の状況を知らない僕達に本当かどうか分からない情報がはいつてくる。町にはもう何もないとか船が陸のあちこちにあがっている……。その中の1人が来る時に火事になっていたと言い、万が一に備え、中学

校よりもさらに高い山田高校へと歩いて避難した。暗闇の向こうに赤い火が見えた。火の手はまだきてはいないと確認し、束の間、ほっとした。高校には既に千人近い人達が避難していた。みんなが家族の安否を一秒でもはやく知りたがっていた。一人一人が不安や焦りと戦っていた。

僕が家族に会えたのは震災から3日後のことだった。家族は5人。父と母、兄と姉と僕だ。盛岡で仕事をしている父は回り道をしているものの何倍もの時間をかけて山田町にたどり着いた。何かあったときのためあらかじめ家族で避難場所を決めていたので震災当日から家族が逃げているであろう小学校に父は向かい、再会し無事を確認したそうである。人づてに中学校の生徒全員無事だと聞いたという。

家族全員がそろったのは震災から1カ月くらいたった頃だ。海沿いにある僕の家は第1波にのまれてしまっていた。この日を境にあたり前だった日常生活が避難所生活へと変わった。小学校の体育館には何百人もの人々がいた。毎日何度となく襲ってくる余震と津波警報に緊張はほどけず安心して眠ることができない。それでも朝になれば太陽が顔を出し少し元気が出た。けれど町の惨状も毎日目についた。3月だというのに雪のちらつく寒い日が続いた。何百人もの見ず知らずの人達との体育館での共同生活、友達とも会えない。つらい日々は続いた。

僕は3月末に行われるはずの「都道府県対抗全日本中学生ソフトテニス大会」に出場するため、地震の前日まで練習に明け暮れていた。この大会は中学生としてのテニスの総決算であり、大きな挑戦でもあったからだ。

だが当然のこととして大会は中止になった。もちろん残念だったが、仕方のないことだ。日本中が大変なことになっていたのだ。けれどそれとは別に少し悲しいことがあった。県の選抜メンバーとしてのユニホームを僕一人だけ津波で流されていたのだ。僕は母に、「何で持って逃げなかったの?」とちょっぴりとがめるように言った。母は「今までにない揺れだったから何も持たずに逃げた。まさか大津波が来るとは思っていないで揺れがおさまったらもう一度帰ってくるつもりでいたから、ごめんね」と言った。謝る母を見て僕は自分の言葉と愚かさをすぐに後悔した。ユニホームを取りに戻ったら母はここにこうしていないかもしれない。謝るのは僕の方だった。

けれど両親は顧問の先生に相談してくれた。すると先生は「確かにせっかくの県選抜のユニホームだからなあ」と両親や僕の気持ちを察してくれ、ユニホームを新調してくれたのだった。そのユニホームは今、僕の下宿の部屋にかけられ、毎日僕にプライドと感謝の気持ちを自覚させ、励ましをくれる。感謝の気持ちは僕を再び奮い立たせてくれた。「頑張ろう」という気持ちが強く湧き上がってきた。

僕の中学校は被災をまぬがれていた。しかし、町は僕の知っている町ではなくなっていた。いつも行く近くのコンビニは柱だけになっていた。自衛隊の搜索活動も毎日行われていた。まだ町はがれきだらけで、家が流されてしまったため避難所での待機が始まった。

僕のテニス人生は再スタートしたはずだったがテニスをしたという思いは日を追うごとに募

るものの、練習場所もなく、限られたスペースでの生活に心も体も参ってきていた。地区中総体が近くなってくる。練習をしていなくても試合には出なければならなかった。運動ができなかった3カ月間は思った以上に身体のダメージとなって僕にあらわれた。筋肉は落ち、テニスの感覚を取り戻すのにも時間がかかり思うように身体が反応しなかった。中学生としての最後の大会、県中総体。この大会へ向けて普段と同じように練習をしてくる相手にこっちのコンディションなど関係なく、コートに入ってしまったえば対等であり、どんな言い訳まがいの事を言っても負けてしまえばそれで終わりである。

同じチームメートでも被災していない人は、僕とはやっぱり感じ方や考え方が少し違った。帰る家がある人は、気持ちの上でも安定しているように見えた。被災した僕にはテニスが思うようにできない葛藤があった。団体戦は負けてしまったが、個人戦ではベスト8に入り、東北大会の切符を手にした。チームで来るはずだった青森の会場に僕は立っていた。心の中にチームメートの声が聞こえてきた。あいつらの分まで頑張ろうとさらに強い思いがこみあげてきた。練習量も相変わらず少なく不安だらけで、ベストの自分ではなかった。でも不思議と試合では緊張しない、それだけはちよつとした僕の強みである。両親は山田から青森まで応援に来てくれた。結果は2回戦敗退だったが「ここまでよく頑張ったな」とほめてくれた。今まで家族に支えられてテニスができていたことに僕はこの言葉を聞いてあらためて気づき、そして感謝した。

中学卒業が近づくにつれて、テニスを続けたいという思いはますます募っていた。そして僕

に大きな選択をしなければならない時が訪れた。地元に残るか、内陸の強豪校に進むか――。仮設住宅の4畳半の部屋で母は言った。

「震災のせいにすることなく、こんな時だからこそ夢を追いかけなさい。後悔のないように」

家族に背中を押され、今山田町を離れ下宿生活を送っている。テニスができる喜びをかみしめながらボールを追いかけている日々は、夢のような時間である。あの震災で僕達家族の生活は一変してしまったが、本当に沢山の方々に支援していただき、心のあたたかさを頂きました。炊き出しのラーメン、歌手の方々の歌声。本当にありがとうございました。

勉強との両立や下宿生活での自己管理など頑張らなければならぬ場面は多いが、日本一を取るといふ大きな目標に向かって僕は歩いている。

いつか胸を張って、支援してくれた人々や家族にありがとう、そして自分自身に「やったぞ」と言えるように毎日を積み重ねていこうと思う。

平成24年度「甞れ日本！高校生アスリート作文コンテスト」

財団法人学生サポートセンター理事長賞

山田南小学校長〔現・盛岡市立杜陵小学校長〕佐賀敏子（58歳）

大きな揺れの後、校庭に全児童を無事避難させました。その後、多くの人たちが自動車で校庭に急いで避難してきました。防災無線が切れ、情報は何も入りません。「子どもたちを守らねば！」と強く思いました。ゴゴオツと大地は休みなく揺れ、ただごとではないことが起きていると感じました。

ラジオから「津波の高さは3メートル」という放送があり、「大丈夫だ」という声が校庭にいる人たちから聞こえました。すぐに、60人を超える保護者の方が子どもを引き取るため来校されました。直ちに整列をした後に、安全な場所への避難を約束してもらい、児童名簿に担任が1人ずつチェックしながら保護者に引き渡しました。残った多くの児童は校庭で休ませました。

恐ろしさの中で、海の方を見ると、黄色い煙が見えます。「あれは、何なの？」。津波が巻き上げた土煙でした。自分の体も心も震えていました。避難者は増える一方で、気が付くと、児童の列は校庭の端まで移動せざるを得ない状況でした。避難訓練では想像もできぬことが起こっていたのです。

その後、男性職員と相談をし、体育館を避難所とするため、器具室にあったマットを敷きました。隣接する幼稚園のホールに児童を避難させ、女性教員に担当してもらいました。最後に迎えるにきた保護者に引き渡したのは、3日後のことでした。避難した大勢の地域の方々と、体育館は足の踏み場がありません。さらに、被災した消防署から、本部を本校に設置したいという要請を受けました。職員室の一角をお貸しました。しばらくして、自衛隊の方が水と毛布80枚を届けてくれましたが、とうてい足りる数ではありませんでした。

私たち職員は、夢中で水を運び、ポットやジャーに入れて避難の方に提供しました。体育館では「寒い」「空腹だ」という声が多く、職員は、自分の持っている服を提供したり、布テープで隙間風を防いだり、凍ったプールから水洗トイレの流し水のために水をくんだりしました。

近隣の病院のスタッフが保健室に避難してくると同時に、けがを負った方やおぼれた方が運ばれてきて、保健室は瞬く間に医療の現場となりました。近所の上野建設さんから男性職員が発電機を2台借用し、体育館への避難者のためのヒーターと、保健室で始まった医療のために使用しました。3日間、不眠不休だけが人の診療に当たるスタッフに頭が下がりました。若い男性教諭は消防からの依頼で、高架橋に着いた車から軽油を運ぶ役も引き受け、真っ暗な山道を登っていました。

あの惨状の中で、「地域の方々に寄り添うこと」と「児童を守ること」を、どのようにしたら両立できるのか、私は自問自答を繰り返していました。「とにかく、どちらもやるしかない」との結論に達しました。

保健室で治療を受けていたおばあちゃんが息を引き取られたのは、夜中でした。急きょ遺体安置場をつくりました。「先生方、今後どうなるか分からないから、全教室の机やいすを廊下に出しましょう。寒いので、カーテンを撤去し、毛布代わりに渡しましょう」。私の提案に、職員は真剣な表情でうなずき、黙々と作業に入りました。役場の方が学校に来るまでの3日間は、全ての課題に学校職員が対応しました。

あの日から、学校は、教育を担う場から地域の方々が生き延びるための場となったのです。いろいろな要望がありました。

アレルギーの赤ちゃん用のミルクを探してください。

老人用のおむつが欲しい。

寒くてしょうがないから、ストーブを増やしてください。

あの人がおにぎりを2個取りました。ずるいから注意してください。

私は食わなくてもいいから、子どもたちにあげてください。

生き延びるために皆、必死でした。本校は、避難所、病院、消防本部となり、全国各地からレスキュー隊や自衛隊、医療スタッフが入ってきました。避難者は多い時は1180人。大人数の避難所となり、自治会の立ち上げのお手伝いと、定例の避難所打ち合わせ会を企画しました。

並行して、児童や家族の安否の確認、転出入の対応もありました。避難所を巡り、だれがどこにいるのか、一人一人の確認をしました。避難所ごとの修了式、図書室での卒業式も、多くの方々の支援で挙行することができました。学校を再開できたのは4月20日のことでした。

家族を亡くした者2人、被災者7人と、多くの職員がつらい思いをしながらも心を一つに対応してくれ、心から感謝しています。

あれから3年がたちました。児童数が4月には約120人減少となります。

今、子どもたちが夢や希望に向かっていくとする心の力をつけるために、私たち職員は、地域の方々との交流を活発にしながら、伝統芸能「虎舞」の継承や学力向上、心のサポートに取り組んでいます。校庭にある仮設団地の方々からは、校庭整地や虎舞の衣装制作と、学校に力を貸していただいております。運動会にはお祝いの大きなメッセージが校庭フェンスに飾られ、子どもたちはとても喜んでおります。飛び入りで踊りも踊っていただき、共に生きていることへの感謝でいっぱいです。

諸先輩の築かれた学校の再生は難しいのですが、「ピンチをチャンスに変える！」という考え方のもと、明るく心の通い合う学校づくりをめざして、質の高い職員集団と共に見えないゴールに向かっていくと思っています。

最近、なかなか進まない復興や厳しい現実を前に、町民の方々の心が少し疲弊しているのを感じます。保護者が落ち込んでいると、子どもたちには、すぐに変化が見えてきます。どの子

にも、学校にいるときは明るく元気に過ごさせたいと思っています。また、「人間関係力」をつけ、集団の質を高めることが大切です。

私どもができること、それは学校で自己肯定感を味わう機会をたくさん作ることです。未来ある子どもたちが心を一つにして山田町の復興の力になったら、どんなに素晴らしいでしょう。

今後の課題として、地域防災のあり方があります。学校が避難所としてある限り、防災組織に入れていただき、いざというときに、協力し合って共に困難を乗り越えることができればと強く願っております。

夢であってほしかった

〔山田〕

22

阿部トシ子（85歳）

いまだかつて経験したことのない、天井が落ちてくるかと思うほどの揺れ。私はとっさにテーブルにしがみつき、押さえた。あー、あー、大変だー、大変だーと大声を上げながらストーブの火を消し、仏前の花瓶の水がこぼれないように押さえた。もう生きた心地がしなかった。少し揺れが収まってから表に飛び出し、路上にしゃがみこんだ。人通りもないが、恐怖のあまりみんな家の中にいるのだろうか。

再び家に入って、手提げ袋を持ち、襟巻を首に巻き、隣家の太田幸商店ゆきに行く自動ドアが開いていた。私は普段から「お姉さん」と呼んで慕っている奥さんに向かって「津波が来るから逃げて」と叫んだ。奥さんは2階から手提げ袋と上っ張りを持って降りてきた。しかし「父さん（夫）は逃げないと言っている」と、再び2階に上ってしまった。あの時が今生の別れになるうとは。今になって考えると、声を掛けに行ったことがせめてもの供養になるのかもしれない。残念な思いと、無理にでも引っ張ってくればよかったという後悔の念が交錯して、痛恨の極みである。

太田幸商店から戻ったら鳥かごが落ち、レモンカナリヤ1羽が出口の所にうずくまり、私を見上げていた。主人に「どうしよう」と聞くと、「そのままにしておけ」と言う。日頃かわいがっていただけに不憫だったであろうが、何とも致し方ない。まさか大津波が襲来してくるとは思わないし、家に戻ってこれないわけではないと考えたので、貴重品にも手を付けず、着のみのまま手提げ袋一つを持っただけで表に出た。問瀬商店のご夫婦と一緒に、御蔵山おくぐらやまの高台目ざして、一目散に逃げた。既に宮古信用金庫の職員の方全員が避難していた。すると沖の方から、黒い波がまるで竜のような勢いで防波堤を越えて来た。太田幸商店さんと関嘉さんの家屋が並んで流れてきた。そして、川最さんの家屋にぶつかり、バリバリと音を立てた。あつという間の出来事だった。わが家は視野に入らず、見るができなかった。ぼうぜん自失というか、ああ、夢であってくれと思った。

どんどん流れてくる板を伝って渡ろうにも足がすくんでしまい、男の人におぶわれて役場にたどり着いた。その夜は公民館に身を寄せ、停電の中、温め合って一夜を過ごした。前日の10日、不吉な予感がしたのか、机の引き出しを全部整理した。アメリカ在住の友人から来た48通の手紙を年月日ごとにまとめ、クリップに止めてそのまま机上に置いた。いったん逃げたのに、家に物を取りに戻って波にさらわれた人たちが多くあると聞く。一瞬のうちに波にさらわれ、どんなにものがき苦しんだであろうか。

私も貴重品などを取りに蔵に入っていたら、もう、この世にいなかったであろう。命あつての物種、余生を一日一日大切に暮らしてゆくよりほかない。800人余の尊い命が失われている。私事ながら姉は96歳で津波により生涯を閉じた。普段、100歳まで生きたいと言っていた。

犠牲者のご冥福を祈る。合掌

3月11日以降の日記より

〔山田〕

23

梅木なか（91歳）

避難所山田高校講堂において2年生山崎宥美より渡されたノートブックに記す

3月11日 6時起床 曇り午後雪

昨日届いた書道研究一東誌4月号表紙の左下に塾生9人の名と自分の雅号を書き入れた。祐佳、知佳、大成、誠之輔、翔子、芽吹、真優、宥美、美優、佳月、次に半折を横にして、4月号に発表された段級位を学年別に表記して壁に画びょうで止めた。

これで明日土曜日の稽古の準備は完了、ほっとして日の暮れるまでは針仕事、木綿紬の上っ張りの脇の擦り切れたところに当て布をして繕うと決めて8畳間の真ん中に据えてある文机に向かつて腰掛けていた。

2時46分、突如地震、グラグラッ、グラグラッ、すごい揺れ。書棚からバラバラと本が落ちる。集めて元に戻すと、また大きく揺れて何もかも落ちる、かつてこんな大きな地震に遭ったことがない。恐ろしくて立っていられず、とっさに机の下に潜り込んだ。あまりに激しい揺れに身は竦み、心は脅えた。この時、この家はつぶれるに違いない、自分の命はこれが最期、この家と共に終わるのだと思い、眼を瞑った。とその時、玄関から大きな声で「津波が来る。早く逃げろ」と叫びながら入って来た人、民生委員白土盛さんだった。私は「ハイ」と返事をするなり隅にある机の抽斗から預金通帳と印鑑の入った小さい手提げ袋をつかんで、盛さんの後について外に出た。

盛さんは国道を横断したところで左折した。私は高台に向かった。山田線の踏み切りを越え、

左手の急な坂道を上って行く。途中、人っこの一人に出会うことなく高台に着いて驚いた。大勢の人が集まっていて、顔を見合せても誰ひとり声を発しない。余震は続く。皆で海の方を見る。津波は突堤を越え、防潮堤を越え襲って来た。津波は、巨龍が牙を剥いて海の底から立ち上って来るように見えた。この高台の下に建ち並んでいた家々が将棋倒しに押し流されるのが見えた。

海に眼を向けると、突堤につながれていた漁船はほとんど転覆して、船の底の真っ赤な色がかぶかと浮かんでいるように見えたが、引き波にのまれ見えなくなり、突堤の海底が見えた。

雪がもそもそと降って来た。この高台の住人清水克子先生のお宅は近い。先生は毛布を持ち出し、私の肩に着せ掛けてくださった。また、知らない女の人が頭にかぶるようにとスカーフを下さった。やがて清水先生の御主人の車に乗せていただき、町指定の避難所、中学校へ向かった。

中学校は既に避難の人でいっぱい。入り口に大勢の人と立っていたら、火事だと叫ぶ人の声に北の方を見ると真っ黒い煙が上がっている。長崎か八幡町か？ 余震は続く。火災はあちこちから発生した様子。中学校も危ないと言う声が聞こえた。間もなく大きなバスが2台見えた。私は真っ先に乗せてもらい山田高校へと避難した。校庭には雪が積もっていた。グラウンドには避難してきた人たちの車が沢山並んで見えた。山高の大講堂は広く立派な建物で、避難の人が大勢詰めていた。

美優と宥美は高校2年生。ボランティアとばかり活発に働いていた。講堂の中、雑然と人の混み合った所をA班、B班、C班、D班と区分け、縦横に3本ずつ通路が定められ、厚い毛布が貸し出された。やがて、山崎宥美が避難者の名簿作りのため回ってきた。宥美が何も言わずにそっと私の前に差し出したものは青い色の表紙のノートブックとボールペンだった。私はこの心遣いにさして礼も言わずに受け取っていた。

講堂のステージの右端にポット三つが置かれ、水、白湯、お茶を自由に飲むように設けられ、湯飲み茶碗使用後は洗って元に戻しておくこと、と張り紙がしてあった。

3月14日 月曜

いち早く救護にいられた四国徳島市日赤医療救急班より下剤と安定剤デパス3日分頂く。お食事は昨日より2回。ここ山高だけでも2千人を超すと聞く。ヘリコプターで運ばれてくるおにぎり。どこの方々が炊き出しをしてくださっているのだろうか。

3月15日 火曜 曇り夕方から雪

徳島の救急班から、また薬を頂く。効き目が見えない。

3月16日 水曜 雪夜雨

午前中にバスで南小学校まで被災の跡地を巡って見る。国道も県道も自衛隊の尽力でがれきが片付けられ、車が通れるようになったことに感動。

3月21日朝9時

ステージからマイクを通して私の名が呼ばれた。横浜から次女の薫と、伴侶近藤正雄が慰問の袋を両手に提げ、ニコニコして立っていた。夜通しバスとタクシーを乗り継いで来たという。

短歌 十八首

早く逃げろ

「津波来る早く逃げろ」と急かせたる民生委員盛さん亡く
プラスみなマイナスもみなゼロとなり唯ひとつだけ残りし命
登り来て避難所めざす高台に仕事着 制服の無言の人ら
高台ゆ無声映像見る如し防潮堤越え津波襲い来
海底ゆもり上り来る大津波 堤防壊し家並を吞む
突堤に繋がれし漁船転覆す赤き船底見る間に沈む
ガスボンベかストーブか爆発延焼す町は火の海消す術空し
高台も火の手迫れば住人の車に乗せられ中学校へ
中学校も火の手近しと逃れゆく山田高校雪の校庭
足冷えて二夜眠れず人の輪にそつと足入れて暖をとりたり
避難所の山田高校講堂に数知れぬ人と仮寝のつづく
大津波に浦の浜道海と化し田の浜・大浦 孤島となるも
わが家は跡形もなし国道を線路を越えていづち行きけん

救われて県外避難の眼裏に津波に吞まれし人びと浮かぶ
老い我は命助かり遠く来て相模台地に桜見送る
断捨離とう言の葉 津波に吞まれたり何故 我は生かされている
頑なに吾を支え来しは何ならん 津波に家無き土を見詰むる
鉢花の久留米つつじをあがなえり「老いの目覚め」と名札付きたる

生きてただけでも幸せ

〔山田〕

24

関谷担い手仮設団地住民自治会長 川端信作（76歳）

あの日午前9時半、県立山田病院眼科で緑内障予防の診察を受けた。11時半ごろ、愛車を運転して帰った。駐車場に車を入れないで自宅前に路上駐車した。

昼食後、2階へ上がりパソコンで仕事をした。妻は銀行へ行っていた。午後2時46分、突如大地震に見舞われた。いつもの揺れと違う異常さ。周囲の落下物に恐れおのきながらも、データを保存したい気持ちから思わずパソコン本体を抱きしめていた。3分経過しても揺れが収まらないので、危険を察知して大事なパソコンを放り出し、壁に頭をぶつけ、よろけながら階段を下りた。玄関の戸を開けたとたん、妻がタイミングよく銀行から帰ってきた。

「ただ事ではないぞ、津波が来るぞ。早く車に乗れ」。妻は「冷蔵庫の扉が開いたから、閉めに」と言い、家の中に入った。「何も持たなくていいから、早く乗れ！」

愛車に乗りエンジンをかけ、妻を待ちながら、カーナビのテレビを観た。まだ地震が続いていた。午後3時ごろだった。釜石魚市場が映しだされ、大きな渦を巻いて漁船がぐるりと回り、市場の建物に衝突して跳ね返されているのを見た。

「これはすごい。大津波だ！ 大変だ！」。まだ地震が続く。3メートルほどある庭木が道路側に傾いた。「地震がまだ収まらないうちに津波に襲われている？ これは本当か？」。今までは地震が収まって30分以上経過してから、津波が襲来していた。これは過去にない想像を絶する異常な現象だと思った。

「これは大変だ、早く車に乗れ」。側溝のふたの隙間から、水がプシュ、プシュと音を立てて順番に噴き出した。すぐ傍らの第7分団消防屯所前の十字路に、津波ががれきの山を押しながら襲来してきた。分団員が「津波が来た。逃げる、逃げる！」と叫び、走り出した。私も妻に向かって「何をしている、早く来い！ 車に乗れ、早く逃げろ」と声を荒げた。

津波が車に到達しそうで、思わず発進した。路上駐車していたのがよかった。曲がり角を左折した時、われに返り、妻が助手席にいないのに気付いた。「これは一大事！」。後ろ髪を引かれる思いだった。妻を捨てて逃げている自分が嫌になった。

やや高台の「ちびっこ公園」付近の広場に駐車し、波が引いた後、自宅の状況を見に行った。

路上はがれきの山で歩行が困難だった。自宅が見えた。路上はさらにうず高くがれきの山。数台の流された車、秋田ナンバーの乗用車ががれきの上に乗っかり、ランプが点滅していた。

妻が2階から顔を出した。「お父さん、生きていたよ」。安心した。私のたび重なる叫び声を聞いて、妻が階段を降りて玄関を出たとたん、側溝のふたから水が噴き出し、すぐに津波が押し寄せてきたという。妻はひざまで海水に浸かり、びつくりして2階に駆け上がった。津波が玄関の戸を押し破り、がれきが一気に侵入してきた。2階は戸棚の中身が落ちて、足の踏み場もないほど散乱した。その上をはって窓にたどりついたという。

向かいのA子さん、B子さんも2階から顔を出していた。私は、妻と隣人の無事に安堵した。自宅は流されなかったが、倉庫のシャッターがいびつになり、1階は1・5メートルほど浸水した。

向かい隣のC夫人が「じいさん（夫のCさん、89歳）ががれきの隙間にいた男の子を見つけて助け出し、連れて来ました」と言う。1年生くらいの男の子だった。ずぶ濡れになってガクガク震えていた。寒さもあつたが、よっぽど恐かったのだろう。CさんもC夫人もずぶ濡れになっていた。C夫人は浴室の柱につかまり、胸まで津波に浸かっていたという。

私は2階にあった衣服を手当たりしだいに探し、ずぶ濡れの3人に与えた。子供の運動靴が片方脱げていて、妻のゴム長靴を履かせた。子供の手を引き、避難所へ向かった。途中、住所を聞いた。「お家へ帰りたい」。ポツリと子供は言った。「ほら、ここはもう津波で壊されたがれきの

山だ。君の家も流されてないんだよ」。子供は黙り込んだ。

避難所の一つ、山田南小の体育館へ行った。千人は入っているようだった。ぼうぜんとした表情の避難民でいっぱいだった。子供の親族を探した。大声で呼べども叫べども、反応がなかった。隣接する避難所のさくら幼稚園へ行った。雪のちらつく園庭でたき火をしていた。ここも避難民がいっぱいで、それぞれが地獄のどん底のおぞましい体験を語り合った。

子供を知る人を探した。山田南小学校の先生がいた。「D君!」。先生は私に会釈して、D君を連れて行った。先生に預けてほっとした。

私の愛車は、山田南小校庭に置いた。隣のさくら幼稚園の園庭で、たき火に当たりながら様々な体験談を聞いた。

私の遠縁にあたるEさんは、私の家の近所の長崎地区で車を運転中に津波に巻き込まれた。脱出のためドアを開けようとしたが、水圧で開かない。栄養ドリンクの瓶を握り締め、渾身の力を振り絞り、窓ガラスをたたき割って脱出した。街路樹につかまると、近くで助けを呼ぶ声を聞いた。高齢の女性だった。水が引いた後に助け上げて自宅まで送り届けたという。彼のこぶしは、ガラスをたたき割った時にできたあざで黒ずんでいた。

長崎1丁目の方から大火災が発生した。北の方、八幡町からも火の手が上がった。私の目の前の第7分団消防屯所は、1階が浸水、ポンプ搭載の消防車は無事で防災活動に出動中だった。

町内被災地区の消防車は壊滅。被災を免れた数少ない分団の消防車が出動したが、町内はがれ

きの山で消火活動がままならない。しかも国道45号線が分断され、不通だった。

近隣の消防車が迂回路の農道山道を利用して（豊間根く関口く白石く猿神く赤松く飯岡を経由）到着。がれきの山が道路をふさぎ、消防車が入れず、周辺から放水していた。自衛隊のヘリコプターによる消火活動も行われた。火勢は衰えず、長崎1丁目の北西角まで燃え移ってきた。私の家の約100メートル前まで接近した。かろうじて被災を免れた自宅の2階にあるパソコンなどの貴重品を車に積み込んだ。その夜は雪のちらつく中、山田南小校庭で車中泊した。

隣の消防車も応援に駆け付け、夜を徹して消火活動に当たった。3日後に鎮火したが、飯岡地区の山際、4丁目・2丁目だけが難を逃れた。田の浜、織笠も火災が発生した。

北海道から出動したある自衛官は、「阪神・淡路大震災にも出動したが、これはあの時よりも、もっとひどい状況だ」と話していた。想定外の大地震と大津波、そして大火災の発生、がれきの山。正に地獄の中にいるようであった。

翌早朝、車中泊した避難民が幼稚園園庭の焚火に集まってきた。私に声を掛ける人がいた。親しくしている近所の青年だった。第7分団員として消防活動の任務に就き、境田地区の防波堤水門を閉めに行ったという。水門を締め切らないうちに、堤防の倍以上もある黒ずんだ大波が押し寄せてきた。頭が真っ白になった。何が何だか分からないうちに、トタン屋根の角が衣服の右肩に引っかかっていた。周りのがれきが渦巻いていた。とっさに水中に潜り、夢中で泳いだ。気が付くと波打ち際に打ち上げられていたという。この活動で多数の殉職者が出たという。正に九死

に一生を得た奇跡である。

私の家は1階が浸水し2階の家具類が倒壊したが、片付ければ何とか住めそうだった。避難所での生活は、当初は隅っこで小さくなっていたが、夫婦共々いつの間にか避難所運営スタッフの手伝いをしていた。その支え手の一人として、物心両面で必ず復興しようとお互いを励まし合いながら暮らした。良いこともあれば、人の心の荒んだ一面に触れ、つらい思いもした。避難所暮らしの合間に自宅の後片付けや清掃をし、多忙な毎日を過ごした。5月になると、車で10分の所にある私の山小屋で仮住まいを始めたが、親戚の大工の見立てによると、自宅は地震と津波の液状化による土台のゆがみで、修復は新築と同じ工事費となるという。6月22日、仕方なく全面取り壊しを決定した。妻の悲しみと落胆ぶりが、今でも目に焼き付いている。

私の親戚では、亡くなった人が8人もおり、近しい友人、知人を数えると20人を超えた。ある葬儀で出会った大槌町の知り合いは、「私のところは40人に及ぶ」と言っていた。

私ども夫婦は、奇跡的に助かった。生きていただけでも幸せである。無念の思いで亡くなられた犠牲者の皆様の分まで、生き抜くことが大切だと思う。多くの犠牲者方々のご冥福をお祈りする。

震災以来、全国そして世界各国の皆様方の、心温まる物心両面にわたる支援と激励に、心から感謝し御礼を申し上げる。

平成23年11月13日、私の住んでいる関谷担い手仮設団地の住民80世帯は、自治会を設立した。

ささやかではあるが、会長として活動を盛り上げ、一日でも早い復興を果たすこそが、支援してくださる各位へのご恩返しではないかと思っている。

生かされた命をしっかり生きる

〔山田〕

25

乳製品販売業 貫洞寛喜^{ひろのぶ} (59歳)

大震災当日のことを思うと、いろいろなラッキーなことが重なっていたように思います。一つは、私が自宅にいたことで母も次男も早めに無事避難できたことです。長く大きな地震で、家が倒壊すると感じてすぐに2人を外に避難させました。家も電柱も激しい揺れで、これは今までの地震とは全く違うと感じました。

大津波警報が出たので避難するため家の中に入りましたが、母は仏様のものやら鍋金類が散乱しているのを見て片付けをし始めたのです。「そんなのはいいから早く次男と車で逃げろ！」と言い、2人を逃がしてから、机の下に落ちた書類を机に上げて、いつも妻が用意してある非常用リュックと寝袋、そして水1ケースを車に積んで、避難場所に向かいました。まだその時は、ほとんど車の通行もなくスムーズに避難場所に行って、近所の人と話をしている余裕がありました。何か取りに戻ろうかと思っていた矢先、海の方から砂煙のようなものが見え、何だろうなと

思っている時に「津波だ！」という声が聞こえてきました。

最初は近くには行けませんでしたでしたが、家の屋根や残骸^{ざんがい}、そして車までが流されてくるのを見て、これが津波なのかと実感しました。しかし、自分の家が流されたかまでは想像できませんでした。みんな、ただぼうぜんとしていたように思います。

そのうち、流された家から火事が発生し、大音響と共に次々延焼していきました。その夜は、山田南小学校の校庭に車を止めて一晩過ごしましたが、妻と娘の安否が分かりません。心配だし、火事を目の当たりにして、とても眠れる状況ではありませんでした。

その日は、夕方から雪がちらついておりましたが、深夜には雪もやみ、きれいな満天の星空でした。火事は相変わらず大音響を上げながら、町内を燃え尽くす勢いでした。まるで地獄のような光景だと思いました。津波の被害を受けた所で発生していて、浸水したものの流されなかった家もかなり焼けてしまいました。

明るくなって近くの高台から見ると、町内のほとんどの家がなくなっているのが分かりました。もちろん自分の家も無いことが確認できました。昼ごろにはいろいろ情報が入ってきました。妻が牛乳の配達で行っていた大槌町も、娘が自動車学校に行っていた^{うのすまい}鶴住居町も津波と火事で何もなくなくなったと聞き、不安が増しました。しかし、道路が寸断されていてどうすることもできませんでした。

その日から知り合いのお宅に3人でご厄介になって、温かい布団に入ることができましたが、

あまり眠れませんでした。3日目の朝に妻と娘を探しに行こうとしたところ、高架の三陸自動車道から降りてくる同級生に会いました。その同級生は「大槌町で被害に遭って避難所から歩いて帰って来たが、その避難名簿に奥さんの名前があった。車でも行けそうだ」と教えてくれました。妻の無事を知って本当にうれしかったです。さっそく息子と車で迎えに行きましたが、妻の顔を見た時は涙が出てきました。

妻は逃げ場所が分からない不案内な街中を牛乳の配達中で、津波があとう分早く来ていれば、助からない可能性が大でした。運よく山際のお宅の所で「山に逃げろ！」と言われ、無事助かったそうです。車は流されてしまいました。そのまま隣の鶴住居町に、娘を探しに行こうとしましたが大規模な山火事が発生していて引き返さざるを得ませんでした。

その日の夕方、避難所の山田南小学校に行ったところ、私が黒板に張った安否情報のメモの脇に「明日香（娘）は、体育館にいます」と書いてあったので、走って体育館に行きました。

体育館の入り口付近で5時間ほど待っていたそうです。本当にうれしい1日でした。娘は、自動車学校に着いて何分もしないうちに地震に遭い、先生の指示で200メートル先の高台に避難したそうです。そこで堤防を越える津波を見て、その日は高台の老人ホームで夜を明かし、途中の避難所で、同級生の数人と一緒にもう1泊して歩いて帰って来たそうです。後で知った情報だと、娘が逃げた高台に避難した人は全員助かりましたが、別の避難所に逃げた方は半分以上が流されて助からなかったそうです。

その日は、ご厄介になっている知り合いのお宅で、ろうそくの明かりで家族の無事を祝って乾杯しました。その夜は娘と妻にはさまれて家族のぬくもりと幸せを感じて床に就きました。

地震から5日目の15日には、弟が仙台から車でガソリンやら物資を持ってきてくれ、帰りには携帯の電波が通じた所で、長男や親戚の方、取引先の方に無事であることを連絡してもらいました。これを機に、長男をはじめ親戚も安心したようです。

これからは、生かされた分、残りの人生をしつかり生きていこうと思います。

心の復興めざし慰問に励む

〔山田〕

26

新保 公（60歳）

あの大震災の悲劇は絶対に風化させてはならないし、後世に伝えていかなければなりません。それが生かされた私たちの責務です。あの時、私は家内と2人で家の中にいました。私の家はJR陸中山田駅の、ちょうど後ろの方にありました。海岸から直線距離で五、六百メートルはあるので、まさかここまで来るわけがないと思っていました、揺れが収まってから家内と一緒に表で、崩れたブロックやタイヤを片付けていました。防災行政無線は「大きな津波が来るのが予想されますので高台へ避難してください」と呼び掛けていたのですが、全く無視してすっかり油

断をしていました。

片付けが一段落して家に入りかけたその時、向かいのアパートの住人が「津波が来たー！」と叫ぶのを聞き、脇目も振らずに家内に声を掛けながら一気に2階に駆け上がりました。上がった途端、どこかの知らない家が目の前に迫っていました。表を見ると、何と家も車もすごい勢いで窓の外を流されていきます。いつ家も流されるのかと、本当に焦りました。もしもあのまま茶の間にいたら、足の親指に支障があった家内と一緒に走って逃げていたら、と考えるとぞっとします。津波が引くと、1階は天井までがれきで埋め尽くされていました。間もなく家の近辺から火災が発生して、ベランダから家の屋根やがれき伝いに避難所の山田南小学校に逃げました。その後、3日間続いた火災で町は焼失し、私は現在、織笠の仮設住宅で暮らしています。

当時大工だった息子は、大船渡市の綾里（りょうり）に通っていました。全く連絡が取れないため心配になり、被災から3日目に綾里まで歩いて行く決心をしました。取りあえず私の実家がある釜石まで行くつもりで、朝6時ごろ出発。途中で車に乗せてもらい、6時間ほどで釜石に着くことができました。翌日、自転車借りて綾里まで行こうとしましたが、釜石駅近くの五の橋で、「川の底が見えるぐらい水が引いたからまた大きな津波が来る」と消防車が何台も出る騒ぎがあり、綾里行きを諦めて翌日、山田へ戻りました。

山田に戻って2日目、いつもの軽トラに乗ってひょっこり息子が帰って来たではありませんか。本当に信じられず、言葉も出ませんでした。その時は本当に神様に感謝しました。翌日、今

度は盛岡にいた娘が迎えに来て、家族3人、娘の所でお世話になることにしました。娘の勧めに従い、盛岡の日赤病院で夫婦で受診したところ、家内の血糖値が500以上あったので、びっくりした先生が「このままじゃ帰せない」と言い、そのまま入院しました。しばらくして、内陸のホテルなどで避難者の受け入れが決まり、雫石の長栄館に山田町からの100人ほどと一緒に、私も息子と2人でお世話になることにしました。

長栄館は本当にありがたい所でした。温泉には入れるし、部屋は家族単位で与えられたし、幸せを感じました。しかし、生活にもだんだん慣れて時がたつてくると、皆が顔を合わせるのには日に3度の食事の時間だけ。食事が終われば楽しみもやる事もないし、皆それぞれ散らばっていく。人間、何にもすることがないと余計な事ばかり考えてしまうものです。

そんな時に、私が民謡をうたうことを知っていた幾人かの方から「あんたの唄を聞かせて」という声が時々ありました。そうか、やっぱり、ただじっとしては駄目なんだなあ、みんなが好きな民謡を聞いてもらうのが一番いいかもしれないなあと思ひ、盛岡在住の唄い手さん方に慰問に来ていただくことにしました。その時に私も一緒にうたったのですが、やっぱり皆さんの喜んでる顔を見ると、民謡をやっていた良かったと思ひました。街の復興も大事だけれども、人間の心の復興が一番先に大事なんだと気付いたわけです。その事をきっかけに、何となく皆さんが打ち解けやすくなったように思ひました。まさに「芸は身を助ける」です。

それまで入院していた家内が、5月の末ごろに退院してきました。息子は既に山田に戻ってい

て、山田高校の避難所で暮らしながら、お世話になった方の身内の遗体探しなどを手伝っていました。今度は家内と2人、長栄館での暮らしが始まりました。6月20日、岩手県民謡協会のある方から声を掛けられ、私は「クボタ民謡お国めぐり」という民謡番組の収録中でした。その時、長栄館と一緒に生活していた山田町の佐々木さんから電話があり、妻が転倒して救急車で病院に運ばれたと知らせしてくれました。北上での収録が終わり、入院先の日赤病院に駆け付けたところ、転んで頭を強く打ち、脳挫傷とクモ膜下出血が起きているとの先生の説明でした。私は神様に助けをお願いするしかありませんでした。

次の日の検査では、「出血が収まっているから大丈夫。ただ、しばらく入院することになります」と言われ、取りあえず一安心しました。お陰様で何とか回復し、7月にリハビリ専門の病院へ転院、10月初めに退院できました。私は6月半ばに仕事先が決まり、山田に戻っていました。が、そのころは息子が盛岡に住まいを構えて仕事をしていました。しばらく通院もあるので息子に面倒を見てもらいましたが、11月になると家内の希望で山田の仮設住宅で私と一緒に暮らすことになりました。

ところが翌年の2月ごろから体調がすぐれず、同時に精神的にも大分弱くなりました。本人の意思もあり金石の病院へ入院することになりましたが、それからわずか2週間たつたたないかの5月3日、容体が急変し、亡くなりました。突然で悲しい事ではありましたが、亡くなる前の人生は、夫婦水いらずの生活で、とても幸せな時間を共有できたと思っています。

何よりも私を救ってくれたのは、物心の付いたところから信仰している宗教です。教会で常々教えられている、「どんなことが起こっても必ず良くなっていく」というたった一つの言葉でいつでも前向きになれるのです。もう一つ、長年趣味として続けてきた民謡があったからうまく気持ちの切り替えができたのだと思います。

現在はアルバイトをしながら、休みの日には仲間と共に仮設団地で慰問活動を行っています。民謡によって皆さんに心の復興をもたらし、自分たちも元気になれる。本当に「芸は身を助ける」ということを実感させられています。

この大震災以来、日本全国、世界の国々からの多くのご支援、ご協力を頂いているお陰で私たちはこんなにも元気を取り戻すことができました。誠に、ありがとうございます。

『やぶつばき』と佐藤豊子さん追悼

〔山田〕

27

福士 博（69歳）

震災命日の3月11日がめぐって来ると思い出される人がいる。小さな歌文集『やぶつばき』を遺し、津波で逝った歌人の佐藤豊子さんである。境田町に住み、カキ、ホタテの養殖を夫を助けて営んでいた。

出身は三陸町綾里である。『ふるさとケセン』という刊行物に寄稿したエッセー「ふる里は心の宝物」によれば、実家は人里離れた山奥にあったが、海は遠くなく、波の音を聞きながら育ったという。両親は農業と漁業で生計を立てた。

歌歴は平成8年山田短歌会入会に始まる。57歳の晩学である。故浜村半蔵氏に師事した。きびしく、忙しい浜の仕事に勤^{いそ}みつつも、老後を心豊かに、と考えたのだった。

花を愛し、自宅の1坪ほどの庭に山野草を植えて楽しんだ。春蘭、雪割草、片栗、一輪草、延齡草などが日々の暮らしに潤いを与えてくれることを小品「春を待つ庭」に記している。

岩手日報の「花時計」欄に掲載された随筆に「津波に消えた花壇」がある。漁協婦人部の花いっぱい運動に共感して、佐藤さんは海岸の空き地に7年もの歳月をかけて花壇を作った。海岸を往来する人々の憩いの場はしかし、平成6年10月4日の北海道東方沖地震の津波で流されてしまった。山田湾のカキ、ホタテの被害は6億7百万円余りにのぼった。

七年の歳月かけし花畑も波にのまれてあとかたもなし
一輪のナデシコにさえ命ありいとし花よ波の彼方に

無念の思いを歌に詠み、文に綴^{つづ}ったところ二戸市の主婦の方から何十種もの花の苗が送られてきた。その苗をもとに佐藤さんは花壇を復活させた。そして、よみがえった花壇への感銘をまと

め、県の「余暇に親しみ余暇に学ぶ」作文コンクールに応募し、県知事賞の栄に浴す。その花壇も3・11の津波で、佐藤さんと共にあえなく没した。

『やぶつばき』の歌の特色は漁家諷詠にある。次に引く歌はそれが顕著である。

干潮の岩場に下りてまつも採る立春の波指につめたし
海水を殻いっぱい含みたるオレンジ色の旬のホヤ剥く
殻閉ざし北の海より運ばれし帆立の稚貝は水槽に飛ぶ
力込め殻付きの牡蠣^{かき}砕く度化粧せし顔に泥の跳ね飛ぶ
幾度か歌に詠まれし磯島のひじき刈る手に陽射春めく

震災前の漁家の生活の風景がいきいきと詠まれている。題材は、まつも、ホヤ、ホタテ、カキ、ひじきである。海のみぐみに対する感謝の心が素朴な言葉遣いの中にこめられている。歌の道に志し、浜の暮らしを写生的に詠うようになって、水産生物への愛情が佐藤さんは一段と増したようである。書こうと身構えたとき、精神の集中は高まり、対象の中へ人は深く入って行くことができる。

しかし、漁家の朝は早く、労働はきつい。毎日生きること追われる中で、作歌に励むことがいかに困難だったか、歌は示している。

牡蠣殻の泥にまみれて剥きし夜は歌詠む気力失せて眠りぬ
書くことも読みたき本も数あれど浜の仕事に日々を追われし

歌文集の書名には、ふるさとへの著者の深き想いがある。三陸町綾里の実家には、家を囲むように樫の太木が何十本もあり、寒中でも花が咲き、実をたくさんつけた。母堂は油屋で絞り、バスや列車を乗り継ぎ山田まで持って来てくれたという。

今、綾里には誰もいない。山里に樫だけが咲いているだろう。思い出を心の奥に大切にしておきたい、と生前語っていた。御蔵山^{おくくらやま}の下、びはんスーパールの近くにピアノ教師故木下登代子さんの家があった。津波で家は流され、樫のみ残った。春、わずかに面影をとどめる玄関脇の樫に花が咲く。その光景が佐藤さんの望郷の思いに重なる。

「ふる里は心の宝物」に印象に残る一節がある。旧正月5日、綾里集落における権現様の悪魔払いの行事を描いたくだりである。

その日、早朝母や姉がごちそうを作る。赤飯、煮しめ、うどん等大きな鍋が並ぶ。部落の若い衆が権現様の頭を担いで峠を越えて来る。子供たちは待ち切れず迎えに行く。太鼓の音がすると、峠の上から家に向かい「ゴンゲンサマが来たよー」と叫ぶ。急いでお膳の仕度をする。若い衆は台所から座敷と悪魔を払い、家族の頭をバクバク挟んで終わる。かくも胸おどる行事によ

り、人はふるさとへの愛着を強くする。

『やぶつばき』出版後佐藤さんは、何年後かに2冊目の歌集を編みたいと語っていた。志半ばに旅立った生涯が惜しまれてならない。

社屋3階に上って助かる

〔山田〕

28

前川良子（59歳）

まだ寒かったあの日、私は、山田湾が目前に広がる勤務先の水産加工会社の2階事務室でパソコンの前に座り、いつものように事務処理作業を進めていました。

事務室の窓からは山田湾の絶景が一望でき、遠方から初めて来社されるお客様は、その景色に感動してしばし窓から眺め続ける――。それが日常でした。その日も東京から商談で来たお客様がいました。2時ごろに商談が終わり、盛岡行きの急行バスで帰るお客様のお見送りをして、事務所のみんなは何となく一息ついたような雰囲気だった記憶があります。

突然大きな揺れを感じたのは、その少し後のことです。今までに経験したことがないような激しい揺れに気が動転して、どうしたらよいか考えも浮かばず、取りあえず近くの接客カウンターにしがみつき、揺れが収まるのを待ちました。

揺れはなかなか収まりません。頭の中は何も考えることができず、真っ白の状態でした。やっと揺れが収まって辺りを見渡すと、色々な物が散乱して大変な状況でした。間もなく防災無線の放送が聞こえて、津波警報が出たことが分かりました。

海のすぐそばの会社であり、社内では折に触れて津波の時の対策は話していました。それなのに、いざという肝心のあの時はなぜか、すぐに避難しようという考えが全く浮かばなかったのです。

事務所員の責任として、散乱した物を全員で少し掃除してパソコンの電源を切ったり、書類を整理したりと、業務終了の準備をしました。

そのうちに家や家族が心配で、誰からともなく避難しようということになりました。ところで、事務所には高齢で少し足の弱い人がいました。この人を守りながら、ゆっくり山田町役場へ避難しようということになり、1階の玄関を出て会社の脇を国道の方へ向かいました。しかし、その時は既に排水溝から水が噴き出し、道路は冠水し始めていました。

すると、近くにいた誰かが「役場まで避難しては間に合わないから、会社の高い所へ上がろう」と叫んだのです。その声に従い、すぐに会社の中へ逃げ込みました。ところが、私は当時どれほど危険な状況かを考えもせず、いったん2階の事務室の窓へ海の様子を見に近づいてしまったのです。それと同時に、押し寄せた津波が市場の護岸を越え、さらに会社の前の防波堤を乗り越え、滝のように流れ落ちるのを目撃しました。

ぼうぜんとしていた私に、先に3階へ避難していた人たちが「早く3階へ逃げて！」と叫ぶのが聞こえてわれに帰り、慌てて3階の部屋へ逃げ込む途中に轟音が響き渡り、建物が大きく揺れました。会社の建物の1階から2階の一部分を津波が破壊して、通り抜けた音でした。慌てて駆け込んだ3階の部屋で、町内を見渡せる窓から津波が町中に流れ込む様子が見えました。

やがて引き波に変わった時、津波に流されていく人を目撃しましたが、どうすることもできませんでした。津波はどの辺りまで行ったのだろうか？ さっきの人はどうなったのだろうか？ 助かっていればいいけれど。そんなことを思っていました。

家族は無事に避難しただろうか？ 地震の直前に帰ったお客様は無事だろうか？ バスの出発時刻から推測すれば宮古は過ぎただろう。それならきつと大丈夫。震えながら頭の中に色々な事が浮かび、しばらく放心状態でした。津波は収まってきたようでしたが、辺りは薄暗くなり、建物は下半分が破壊され、鉄骨がむき出しで階段もなく、下に降りることが困難でした。3階に避難した全員でその晩はとどまり、あくる日、明るくなってから脱出しようということになりました。

しばらくすると、線路の向こう側2カ所で火の手が上がったのが見えました。火はどんどん大きくなり、爆発音が聞こえて火柱が上がリ、とても現実の事とは思えませんでした。夜半、自分たちのいる建物に火の粉がだんだん飛んで来るようになりました。ここにも延焼の恐れがあると、暗闇の中、リーダーの男性の判断で再び避難することになりました。

懐中電灯を頼りに、男性たちの手助けでむき出しになった鉄骨にすがりつき、時間をかけて何とか全員が無事に3階から下へ降りることができました。降りたといってもがれきの山です。歩ける場所などなく、手探り足探りではうように、境田から山田中学校を目指して一列になって進みました。国道もがれきの山でしたが、織笠との境界の頂上付近で、ここから町民グラウンドへ上れる場所があると言う男性を先頭に、やつとの思いで避難することができました。

もし最初の避難の時、引き返さずに避難を強行していたら、きつと途中で津波に流されていたでしょう。足の弱い人がいたことが、みんなの命を結果的に助けたのだと、避難所で話し合いました。

父と兄を追想して

〔山田〕

29

牛乳販売店経営 三田地智之（40歳）

東日本大震災では、お世話になっていた方々が、多数犠牲になりました。皆さんのことを忘れることはありません。あらためて心よりご冥福をお祈り申し上げます。

あの日のことを振り返ってみたいと思います。私は日中の牛乳配達最中でした。担当している豊間根地区を終えて、田名部^{たなぶ}から関口・関谷方面に続く道の途中に車を止めて、時間調整の意

味もあり、少し休憩をしておりました。すると、大きく長い時間の地震の揺れを感じました。目の前の杉の木々が左右に大きく振れて、地面が割れてしまうのではないかという不安の中、自宅で留守番をしている父に連絡を取りましたが、既に携帯電話はつながりませんでした。その場を離れ、車を走らせながら、これからどうすべきか非常に迷いました。いったん境田町の自宅に帰って、また仕事のために関口・関谷まで戻ってくるのも面倒な気がしましたので、配達を一通り終えてしまおうと考えました。

今思うと、この判断が正しかったのかどうか確信が持てません。仕事を中断して一目散に自宅に戻ったならば、自宅兼事務所と一緒に津波に流される直前の父に一声かけることができて、高台に逃げ切ることができたのではないか。否、戻る途中に、自分自身も車ごと津波にのみ込まれてしまったかもしれない。父には申し訳ないが妥当な判断だったのではないか。当時を振り返るたびに、永遠の謎である二つの可能性の狭間でため息をついております。

震災直後はお客様の安否確認が仕事になりました。父が見つからない状況の中で、自宅跡地周辺のがれき撤去の作業の傍ら、豊間根に設けられた遺体安置所に向いて、身元不明者に関するリストの中から父を探し出す作業を、兄と交代で進めておりました。

ある日、遺体安置所に張り出された不明者の写真を確認していたところ、顔がすっかり黒焦げになった写真を発見しました。輪郭が父に似ている気はしましたが、確信は持てず、いったん帰ってがれき撤去をしている兄に伝え、確認してもらうことにしました。数十分後、兄から連絡

を受けました。「あの写真は、やっぱりお父ちゃんだった……」。私が発見した人物こそ、父の最期の姿でした。震災から約1カ月後の出来事でした。

「お母ちゃんが3年前に亡くなって、今度はお父ちゃん。まさかこんなに早く親がいなくなるとは思わなかったがな……」

数日経って、がれき撤去の作業の手を休めて、荒れ果てた町を見渡しながらつぶやいた兄の言葉が今でも忘れられません。その兄自身も、震災の翌年に復興への道半ばにして、急逝してしまいました。45歳でした。

震災後の食料や水が不足していた時期、兄は宅配商品として使用できなくなった牛乳等をかき集めて、メーカー側から支援していただいたものと一緒に、あちこちの避難所に救援物資として届ける作業をしばらくの間、続けておりました。私は身の回りのことで精いっぱいでしたが、兄は自分たちの生活のほか事業の再建に向けて、あちこちの取引先や従業員、客への対応に追われ、大変だったと思います。

それから約1年半後に急逝した際、まるで「目に見えない津波の第3波」に兄が時間差で襲われてしまったような感覚が自分にはありました。兄とは普段けんかばかりで会話の数も少なかったのですが、不在はいまだに信じられないのです。「兄貴こそが店の復興の立役者であり、兄貴を慕う人達のためにもずっと生きるべきだった」と兄が自ら仮設に設置した、小さな仏壇の遺影に向かって兄に対して嘆きたくなるときもあります。

現在、私はその仮設住宅に住んでおります。当初私自身は震災後の状況に不安を感じ、地元を離れ東京で仕事に就いていました。外側から家業に協力できる人間になろうという目標を立てて、勉強しておりました。しかし、事態は急展開し、急きょ山田に帰省して、家業を継承しております。兄の了解を得て上京していたとはいえ、兄に負担をかけてしまったことは事実であり責任を感じております。

「絆」「つながり」。震災以降、この言葉が浸透しました。両親の現役時代からずっとお世話になっているお客様との濃密な関係を思うと、事業の基盤として大切にしなければならぬ言葉だと思ふのです。

まだ震災からのダメージを完全に克服できてはおりません。両親や兄が長い年月築き上げてきたお客様との縁を無駄にせず、献身的な従業員の皆さん、温かく見守ってくれた取引先の方々、そして何より自分たちの事業や生活をずっと支えていただいているお客様方からの励ましの言葉や日頃の多大なるご愛顧に対する感謝の気持ちを決して忘れることなく、いつかご恩返しをさせていただきますことを目標にして、これからも肅々と生きてまいりたいと思います。

お金で買えぬ宝物を得た

〔山田〕

30

湊 三代子（75歳）

あの日は家にいてうたた寝をした瞬間、轟音と共に激しい震動が長々と続いた。棚から落ちる食器類や鍋などに何一つ行動できず、瞬時に耳をふさぎ、うずくまってしまった。

役場から津波情報が流れた。その物騒さの中で、鮭の稚魚に餌やりに行った主人のことが脳裏をよぎった。関口川の下流近くの孵化場は極めて危険な場所だ。

足がガクガクし、おぼつかない足取りで避難所へ向かった。北浜自治会の避難訓練はモデル地区に指定されるほど随時行われていたが、津波は想像を絶する規模で襲って来た。

指定避難場所に着かないうちに、波はがれきと共に押し寄せて来た。途中、50代ぐらいの女性が全身に水を浴び、裸足でうめきながら流浪していた。お父様が家の中から波にさらわれたことを後で知り、深い悲しみが伝わってきた。

津波は合わせて800人余りの尊い命を一瞬にして奪ってしまった。家屋の全壊、半壊は世帯数の半数に及んだ。わが家も築後4年半しかたっていない。そこから避難するには、途中で大きな側溝を横切らなくてはならない。あの時、何分か遅れていたら水流に逆らえず、命尽きていたかもしれない。紙一重だった。登り着いたら八幡神社の境内だった。みぞれ交じりの冷たい空

気の中で夕方を迎えた。役場から1枚を2人で使ってくださいと、毛布が配られた。避難者の中には赤ちゃんや老人もいた。数が少ないのに気付き、私は遠慮した。

周りは薄暗くなり、保健センターへ入ってくださいとの指示で中へ入った。町内は停電していた。火災も発生した。ガラスが一面に張られた1階の窓際に立ち、火事現場を見ていた。燃え広がる大きな炎におびえ、どうすることもできなかった。間もなく窓際と電灯の下から離れてくださいと言われた。それも束の間、今度は公民館へ移るように指示された。保健センターには次々と遺体が運ばれて、ブルーのシートで覆われていた。私はシートの中が気になり、移動をためらって後ずさった。九死に一生の、わずかな一を信じていたはずなのに、このシートの中に主人がいるかもしれないと思うと全身がざわめいた。

遅れて名前を記して公民館の中へ入ったが、今度は自衛隊の車で豊間根中学校へ移った。役場の人が10人ぐらいでグループを作り、班長を選ぶようにと言う。グループにおにぎりを配る役目である。

私の傍らに主人がいないのに気付いた息子の友達が「父さんは？」と聞く。「孵化場から帰らないから死んだかもしれない」と答える。彼は翌12日、山田に行って主人を捜し当て、夜に豊間根中へ連れて来てくれた。その時、名前を書かずに入ったらしい。盛岡近郊の親戚たちは各避難所を探して「オンサン（おじさん）の名前がなくて（なくて）ドデンすたー（動転した）」。入院してでも生きればええどもったじゃー（入院していても生きていればいいと思った）。こんな

訛りに目頭が熱くなった。

13日の朝、与えられたおにぎりを食べていたら、今度は娘の友達がにおにぎりを携えて来て私たちの生存を涙して喜んでくれた。前後して宮古の義姪がお風呂を使わせるために迎えに来てくれた。震災直後はぜいたくなことだった。その晩、食卓狭しと並べられたごちそうは特別おいしく、明日への活力となった。

翌日、姪に宮古の姉の家へ送ってもらった。姉は私たちの安否確認のため、タクシーに米を積んで泣きながら私の友達の家々を訪ね回ったが、分からず、帰ったばかりだった。「お世話になってもいいか」と尋ねると、義兄は無事を喜び、快く受け入れてくれた。姉の家に身を寄せていることを知った親戚や友達から、お見舞いの金品や食料がたくさん届いた。いい友達に恵まれたことと、神様が残してくれた命に感謝した。

姉の家の温かい空気に包まれた安堵感から後回しになっていたが、主人に「帰れなかった11日はどこにいたの」と聞いてみた。しかし、口をつぐんだままだった。がれきをかき分けて私を捜していたと、その場を通りかかったという人から後で聞いた。些細な事で常に口げんかの多い夫婦なのに、そんな一面も持ち合わせていたんだと知ることができた。

震災で生活する術は失ったが、それより得た物も大きい。絆、感謝、忍耐、節約は、お金では買えない宝物だと思う。このことを今後の生活の糧にしたい。

葉漬けの老人2人だけど、支え合いながら摂生して天寿を全うしたいと思っている。

さだめなき浮き世の流れに友もまた誘われて行く今ぞ悲しき

生き地獄と化した故郷

〔山田〕

31

不動産賃貸業 本宿一夫（71歳）

私は山田町境田に生を受けました。両親は短命で、高卒後に家業（小売業）を引き継ぎました。家業のかたわら、若い時に約10年間運送業にも従事し、東北・関東に山田港名産の冷凍イカ刺身を搬送したものです。利益を得て、念願の家を27歳で新築しました。その間、町内4カ所にアパートを所有し経営者になりました。津波体験について言うと、昭和35年のチリ地震津波、43年の十勝沖地震津波に遭遇しました。この2度の津波は大した被害もなく、津波とはこの程度のものと思い、時代と共に立派な堤防ができたことにより、備えは万全だと沿岸に住む人々に安心感が生まれ、現代の繁栄を享受していました。

油断大敵、巨大地震の前兆か、平成23年3月9日、津波注意報が出る地震がありました、大きな被害が出ずに済みました。その2日後、マグニチュード9・0という巨大地震が発生し、約30分後に太平洋岸に大津波が襲来したのです。

あの日、私は少し遅い昼食を終え、わが家のこたつでうたた寝をしていました。突如襲った轟音、寝ていた枕を蹴飛ばされた感じで飛び起きました。ゴーゴー、ゴーゴー。強烈な地震で立っていることができず、サイドボードの角にしがみついていました。一度は止まりかけましたが、また、ガタガタ、ゴーゴーと3分間くらい続いてやっと収まり、物は落ちるやら、ひどいありさま。でも天井は落ちませんでした。大変だ！これはただごとではない！今度こそ、とてつもない大津波が来る！今までのような半端な物でない！動物的な直感があり、表に飛び出して犬小屋と国道を見ました。不思議な事にこの家も倒壊せずにそのまま立っています。

海岸の防潮堤に走って行き、あの大型門扉に飛びついて閉めようとしたが、いかんせん1人の力で動く物ではありません。消防団が来て閉めるだろうと急いで家に戻りました。金庫のドアを開け、最小限度のお金を生き延びるためにとかばんに入れ、防寒衣、厚い靴下、長靴、皮手袋などで身を固め、物事が長期戦になる、だから備えだけはしっかりせねばと冷静に自分に命じました。表に出たら、「3メートルの津波が予想される」と2度ほど町の放送がありました。「大した事ないのか」と受け取ったのは自分だけではないでしょう。私の直感では10メートル強の津波が来る、だから逃げるべきだと思ったのです。犬も連れて行こうと犬小屋を見たが犬はいまませんでした。いつもこの時間帯は向かいの姉が散歩に連れて行くから、犬は姉と共にどこかで難を逃れて生き延びているだろうと判断しました。

国道の車の流れを見て、新車で一目散に指定避難所の高台の「三田地団地」を目指しました。

最初はそこに車を置きましたが、もう少し高いさらに安全な場所へ移動。結果、私の取った行動は全て水と火の難から逃れていました。そうこうしているうちに三々五々人々が集まってきました。30人ぐらいが一緒に顔を見合わせ、「津波は来るのだろうか」と不安に駆られていました。

約30分経過、海に異変が生じました。魚市場前の灯台のある船だまり近辺の海水が引き出したのです。引き潮だ、どこまで引くのだろう――。幼い時に古老たちから聞いた言い伝え「津波が来るときは大島近くまで潮が引き、それから大きな口を開けて襲ってくるものだ」が正しいかどうか見ておこうと思いました。ところが、灯台の根元が見えた程度で引きは止まり、はるか沖の方から一直線の白い渦巻きの束が見え、大浦方面に襲いかかって大島の辺りを越えました。大きな、大きな白い麻縄のようで、浦の浜方面が太く、大沢方面は細く、野球のバットをスイングしたような感じで、ものの3〜5秒で織笠、細浦に襲いかかりました。バリバリと細浦を壊す音が聞こえ、1〜2秒で山田郵便局の所の6メートルの防潮堤を軽々と越えました。営々と築かれたわが山田の町並み、境田地区、川向地区を押し流してしまいました。わが家はどなただろうと、見え隠れする自宅の方向にばかり目が行き、ただそれだけの数十分でした。

強大なエネルギーの大津波。止めどなく大洋から押しつけて来る海水が黒っぽい波となり、部分的に破壊された防潮堤からどっと町に流入しました。この強大な第2波で山田町は壊滅しました。高台から見た惨状。現実か、夢か、幻か、ただあ然とするのみでした。誰かが「これで山田も終わったあ」と言い、肩を落しました。私も同感でした。後日の報道では千年に一度の大津波

※大島や各地区の位置関係は273ページの地図も参照

だったということです。気を取り直して近辺を見回っていると、誰かの声で「人がいる、助けてほしい」と。誰かれ構わず4人を助けました。

打ち続く余震で、電柱が倒れるのかと思うほどでした。やがて旧山田病院近くと中央町付近から火の手が上がリ、手の付けようがないままわが家、第4アパートと思われる所のガスボンベに火が回り、空中高く舞い上がる様はまるで地獄の始まりと見え、三日三晩燃え尽くし、廃墟の町と化したのです。この年で、想定外の大津波に襲われても逃げ切り、大火災も見、正にこの世で生き地獄を体験しました。終生忘れ得ぬ出来事。東日本大震災の犠牲者は2万人強、山田町だけでも800余人、その中には私の姉夫婦も含まれています。津波は沿岸に住む者の宿命とはいえ、二度とこのような大災害にならない町づくり、復興に官民挙げて立ち上がり、前進することを願って体験記を終わります。

結びに犠牲になられた方々に哀悼の意を表し、鎮魂の言葉とさせていただきます。

1、2秒差で助かった

【山田】

32

山根和子（70歳）

2度目の大きな揺れが収まった時、これは異常だと思ったが、夫婦で割れたコップを集めてい

た。私たちは旧山田病院の前で民宿を営み、自衛隊（航空自衛隊三沢基地山田分屯基地）に1部屋と駐車場を貸して仕事をしていた。あの日は隊の若者3人のお客様がいた。当直さん、ドライバーさん、その他数人が自衛隊の青バス（人員輸送車）の所に集まり、怖かったねと話していた。自衛隊から「官舎に行け」と無線が入ったのを耳にした。3人の若者たちの乗ったバスが出る時、官舎に行っている旨の伝言を〇〇君に頼まれ、夫婦して外にいた。伝言もして、ホッとして車に乗り、ラジオのスイッチを入れた。「釜石に津波」というニュースが聞こえた。その時、クリーニング店の若旦那さんが後ろを振り返りながら小走りに目の前を通った。

夫の後ろをついて海の方を見に行く。周囲はしんとしている。この静寂は何なんだろうと思う。その時、夫の口から「えっ、あれ何？ えっ、津波？」と小声のつぶやきを聞く。見ると、近藤先生（医師）の自宅の前を、2階くらいの高さの波が大きな壁を作り、がれきと共にゆっくり迫って来た。夫は私の手を取って走った。私が携帯電話を玄関の方に投げると、振り向きざまに目に飛び込んできたのは、御蔵山^{おくくらやま}の方向からすごい速さで流れてくる、大きく、真っ白い津波だった。走っていたら、後ろで「ドカン」。すごい音だった。海からの波と、御蔵山方向からの波が、農協の所でぶつかったなと思った。でも逃げた。途中、私が転んだので、夫は戻り、手を取った。阿部クリーニング店の前辺りで、電柱がボタン、ボタンと倒れるのを夫は目にしたという。

走っても、走っても、旧山田病院に着かない。もうちょっとだと思ったら、足元に波が来た。

その波を踏みつけながら、手を引かれるまま懸命に逃げる。気が付いたら八幡宮にいた。ホッとして、助かったんだと思う。大勢の人たちと一緒にうれしかった。

余震が続き、また揺れた。夫は町並みを見に行った。「理容バロンさんの所でがれきが止まっていたたぞ。助かったのは1秒、2秒の差だぞ」と言う。本当にそうだと思う。波と波がぶつかり、波の方向が変わったことも影響したのだと自分なりに思っている。火災の煙も見え、早く消してと願っていた。

夕方寒くなり、中央コミュニティセンターに入れてもらう。着の身着のままでも、ホッとして暖かく感じたが、だんだん寒くなってきた。そのうちストーブに火が入り、ありがたかった。何がどうなっているのかを考えていた。暗くなるのに電気もつかない。外の火災で部屋が時々明るくなり、避難してきた人たちの顔が見えたり見えなくなったりする。そのうち、ドーン、バーンと花火大会のときよりすごい音がする。おにぎりを頂き、口にする。あの状況の中、食べさせてくれた人たちに感謝している。

ホッとする間もなく役場に火が迫る。豊間根に行くよう指示された。いとこが山越えし盛岡から来てくれていて、高台に車を置いている。そこまで歩いて近所の方と豊間根中学校へ移動する。毛布を頂き、運動用のマットの上に座り、早く朝が来ればいいねと、誰彼ともなく話す。朝、明るくなり見えてきたのは、暗幕にくるまっている人たち。暗幕を外していたのは目に入っていたのに、忘れていた。いつの間にか、こんなに大勢集まっていたんだ。少し冷静になって、

いろいろ考える。逃げることを忘れた私たち夫婦……。くやしい。車に乗ってなぜラジオのスイッチを入れたのか。そのまま逃げれば波に追われることはなかったのに、と反省。

海は大好き。でも今は少し怖い。「あの時、どうして大暴れしたの？」と海を見て問い掛ける。避難所、仮設住宅、皆様のおかげで生きている。全てに感謝。ありがとうと言いたい。

信頼される地域警察官に

〔山田〕

33

宮古警察署、巡査 熊谷啓延（ひろのぶ）（25歳）

山田町内では仮設の商店街が建設されるなど、復興に向けた活動が続いています。しかし、町内は瓦礫（がれき）こそ片付いたものの、震災の影響が今も色濃く残っています。当時を振り返り感じることがあります。それは非常時こそ、警察官は最も頼りにされる存在だということです。

震災発生当日、山田町は津波と火災により壊滅的な状態となりました。

交番所員も被災し、救助資機材が流出した状況下での活動を強いられました。住民は皆自分の事で精いっぱい状況であり、他人を助ける余裕がある人はいませんでした。そんな中、警察官は住民が頼りにできる数少ない存在でした。要望は多岐にわたり、救助活動や負傷者の応急手当て、避難所警戒等、あらゆる活動が求められました。

そのような活動の中、倒壊家屋から女性を救助したことがありました。女性は津波で倒壊した家屋内に閉じ込められ、身動きも取れず、ずっと助けを求めています。その声を聞いた私たちは直ちに救助しようとしたが、それには相当な機材と人員が必要な状況でした。

そこで、「翌日には必ず助けに来る」旨を女性に告げ、その場を離れました。しかし日が暮れると、町内の火災が予想より勢いを増し、閉じ込められている家屋への延焼が確実な状況となりました。私たちは女性を救出するため役場からのこぎりを借り、再度現場へ向かいました。家屋の柱を切断し中へ入る必要がありましたが、延焼する前に救出できるかは分からない状況でした。2人で数十分間柱を切断していると、火災が付近に迫り、自分たちも危険な状況となりました。退避しなければならぬとの思いが強くなりましたが、私たち警察官の助けを求める女性をそのままにはできませんでした。

作業を続け、ようやく進入できる隙間を確保し、なんとか救出することができました。今回救出が成功したのは、女性が最後まで私たち警察官を信頼してくれたからだと思います。信頼があったからこそ、それに応えようと自分たちも諦めなかったのだと思います。

自分はこの経験を通じ、あらためて住民との信頼関係が大切であると感じました。女性は顔も分からない自分たちを、警察官というだけで最後まで信頼し耐え抜いてくれました。地域住民との信頼関係は、日々の地道な活動でのみ構築することができると思います。

地域警察官は、最も地域に密着し活動できる警察官です。地道な活動を続け、地域住民から信

頼まれる警察官になることこそが大切であると、震災を通じて強く感じています。

「使命 証言・岩手県警察の3・11」

一人でも多く救助する

〔山田〕

34

宮古警察署、巡査長 鈴木隆晃（26歳）

署内異動の内示を受け、山田交番裏の官舎で引越し作業中だった。平成23年3月11日午後2時46分、ゴゴゴツという音とともに大きな地震が発生した。

これまで経験したことのない縦揺れや、官舎がきしむ音に「ただごとではない」と思い、すぐに山田交番に向かった。

棚から書類が落ち、床には割れた食器が散乱、室内は消灯していた。私が1年間勤務し、慣れ親しんだ普段の交番の姿はなかった。

このとき既に交番前の信号機は滅灯し、一体どれだけの被害が生じるのだろうか、不安に駆られた。これが私の東日本大震災の始まりであった。

他の交番勤務員も参集したことから、山田町役場での情報収集、防潮堤からの潮位確認とパトカーによる避難誘導、交番内における情報集約の4班に任務分担し、私は先輩とともにパトカー

による避難誘導にあたることとなった。

町内の防災無線では「大津波警報発令」を知らせる広報が流れたため、私たちは急いで巡回連絡簿などを1階から2階に上げた後、各自の任務に従事した。私は私服の上に事故処理コートを羽織り、活動帽をかぶってパトカーに乗り、交番から国道45号沿線を重点に「大津波警報が発令されました。急いで高台に避難してください」と広報を実施した。

しかし前々日の地震の影響からか防潮堤上にとどまり、海の様子を眺める人や写真撮影するなど避難する素振りを見せない人もいた。私は「何とか避難してくれ」との思いを込め、拡声器を通じて精いっぱい叫び続けた。「道の駅やまだ」まで広報を実施し町内に向かって反転したところ、織笠大橋南側にいた住民が「津波が来た」と叫びながら、慌てて国道を走り上がってきた。

詳細までうかがい知ることができなかったが、その危機的状況に「一般車両を町内へ入れるわけにはいかない」と思い、私たちはその場にパトカーを止め交通規制を行った。

停止を求めた運転手は一樣に家族の安否を危惧し、「町内に家があるんです」「町内の様子はどうなっているんですか」といった悲痛な思いを口にした。私は何も答えることができず、ただだ「津波で通れません」としか言えなかった。

無線で現状報告をしようにも、沿岸各署からの「津波到達」を知らせる無線がひっきりなしに鳴り響き、無線を送ることさえできなかった。

辺りを見回すと、多くの避難者が集まり始め、「うわーっ、津波が来た」などの叫び声が聞こ

えた。海の様子を確認すると、南北からの津波が船越半島を襲っていた。南からの津波は瞬く間に船越公園をのみ込み、北からの津波は防潮堤をあっという間に越え、私の眼前で北と南からの津波がぶつかりあった。

きれいな山田の海は今や、不気味なほど漆黒の波に変貌し、家屋が倒壊する音、木材がぶつかり合う音が鳴り響いた。半島を襲った津波は、みるみるうちにその勢力を増し、向こう岸に見えていた老人ホーム（シーサイドカרו）に達するや、ついには建物のすべてを覆い隠してしまった。いったん波が引くと、老人ホームの屋根には数台の車が突き刺さり、建物は大きく損壊。老人ホーム入所者や職員の生存は絶望的に思われた。

その時だった。流出した一般住宅の屋根から「助けて」と救助を求める必死の叫び声が聞こえてきた。私はとっさに「何とかして助けなければ」と思い、パトカーに積載していたトラロープを手にしたが、相勤の先輩は火の手が上がる他の現場に向かっていたため、その場にいる警察官は私1人であった。不安を覚える一方、自分は困っている人を助けたいがために警察官になったという初心が頭をよぎり、「絶対にこの人を助ける」という思いが込み上げた。私はロープを手にし、付近に応援を求めると、一般の男性2人が私のもとに駆け寄り「俺たちも協力します」と言ってくれた。

住民とともに急な崖を駆け下り、声の方向に向かった。そこには流される家の屋根に必死にしがみつく高齢女性の姿があり、今にも津波にのみ込まれそうだった。皆で「今、助けるからな」

と励ましの声を掛けるとともに、自分自身にも言い聞かせ、気持ちを鼓舞した。女性にトラロープを投げ届け、腰に巻きつけてもらうように指示した。固く結ばれたことを確認しロープを引っ張ったが波の流れが妨げとなつて、女性を引き寄せるのは困難を極めた。それでも声を掛け合い、力を合わせて救出に成功した。

女性は恐怖で青ざめ、体力は著しく低下し一步も動けない状況だった。安全な場所に移すため急斜面を登ることにしたが、衰弱は激しい。住民と再度協力しながら何とか急斜面を登り切り、避難させることができた。

「もう安心ですよ」と声を掛けると、その女性は疲れきった表情の中にも安堵した様子で「ありがとう。怖かった。生きているんですね」などと何度も感謝の言葉を口にした。

女性の目に浮かぶ涙と感謝の言葉に触れ、それまでの疲れが一気に吹き飛ぶと同時に、私は女性を住民に引き継ぎ相勤者が先行した現場に向かった。救助現場から数百メートル進むと、道路が冠水しており、それ以上の進行を阻んだ。相勤者も冠水で足を止められており、私たちは「一人でも多く救助する」という思いで山田町内に戻ろうと、迂回路となる自動車専用道路（山田道路）南口から北進した。

走行する車両内から町内を見下ろすと、JR山田線の線路は流され、家屋は倒壊し、至る所で火災が発生していた。立ち上る高さ約20メートルの火の手と黒煙。戦争映画でも見ているかのような惨状だった。

さらに進むと、自動車専用道路北口付近にある県立山田病院の1階は水没し、病院の屋上には助けを求める人たちが多数取り残されていた。今すぐ救助できる状況ではなく、役場を通じて救助へりを要請するしかなかった。

日没が近づく中で、取り残された方の不安な気持ちを少しでも解消したいという思いから、パトカーの回転灯を点灯し拡声器で声を掛けた。

私たちは、船越地区の避難者の人数を把握するため、再び自動車専用道路から火災で真っ赤に燃えている町内を見ながら船越地区に戻り、船越駐在所勤務員と合流した。避難所となった消防分団屯所や船越公民館では、薄暗い中で大勢の住民が肩を寄せ合いながら座っていた。私たちは避難者一人一人に声を掛け、安否を確認し、次の避難所に向かった。途中、津波の直撃した田の浜地区の船越湾漁協が遠目に爆発したように見え、何も出来ない自分が悔しかった。

震災2日目は、消防分団員と協力し、船越小学校の児童全員の避難誘導に従事した。児童たちは笑顔を振りまいていたが、「中には家族を亡くした児童もいるだろう」と思うと胸が張り裂けそうになった。

地震発生から3日目、荒廃と化した山田町内に戻ってきた。

燃え尽きた町並み、舞い上がる粉じん、焼け焦げた臭いに言葉が出なかった。

交番機能を移設した役場で、交番勤務員全員の無事が確認できた。防潮堤に行った同僚は避難者と共に波にのまれたが奇跡的に助かった。交番に残っていた先輩は津波を確認し、避難する際

に後方から津波が押し寄せ命からがら避難した。そうした話を聞き、あらためて津波の怖さに体が震えた。

受け持ちの飯岡、長崎地区は半分が焼失した。倒壊した家の中を、遺族が思い出の写真を一枚でも見つけたいと泣きながら探している姿には涙が止まらなかった。

震災から月日が流れ、国道45号は整備され、街中のがれきは片付き、山田町内にはプレハブの飲食店が建ち並んだ。一見すると復興したようにも思われるが、「また津波がきたら、どうしよう」「今後はどうやって生活していけば良いのだろう」などの被災した方々の言葉に象徴されるように、心の復興はまだ道半ばである。

東日本大震災警備に従事した警察官の一人として、この経験を後世に伝えていくことが、私に課せられた使命の一つであるとの気持ちに胸に、これからの警察官人生を歩んでいきたい。

「使命 証言・岩手県警察の3・11」

多くの「死」を乗り越えて

「山田」

35

宮古警察署、巡査長 吉田朋史^{ともふみ}（26歳）

当日、私は山田町内の自宅で引越しの準備を進めていました。念願の交通機動隊に内示を受

け、異動に向けて心を弾ませている最中、未曾有の大震災が発生したのでした。

今まで経験したことのない大きく長い揺れは、非常事態であることを十分に物語っていました。直ちに制服に着替え交番へ向かうと、外では町の防災無線のサイレンが鳴り、「地震による大きな津波に警戒せよ」という広報が流れていました。

私に与えられた任務は山田湾の防潮堤で潮位変動の観測と報告、周辺住民の避難誘導でした。その際、上司から「いいか、何があっても海側には降りていくな。津波が来る前にすぐに逃げろよ」と強い口調で言われました。

隊内系無線を持って交番から飛び出すと、避難する住民の流れに逆らうように防潮堤の方へと走りました。防潮堤の上へ登り、山田湾を見渡すと、潮位が次第に引いていくのが分かりました。「岸壁際の海底が見えるくらい、潮位が引いています」。そう報告すると同時に、「本当に津波が来るんだ」と感じました。

私はすぐ「津波が来ます！ 逃げてください！」と海側に向かって叫びました。海側にはまだ数名の漁業関係者が作業をしたり、海を眺めたりしていました。

何度も叫んでも避難しない人もいました。そうしているうちに、それまで引いていた潮位が次第に上昇してくるのが分かり、私には焦りが生じてきました。

「近くまで行つて誘導するしかない」と思い、上司の言葉に逆らい海側へ降りる階段を下り、一人一人に避難を呼びかけました。素直に従ってくれる人ばかりではありませんでしたが、強く

説得して避難させていきました。

そして、岸壁の端で作業をしていた最後の1人の漁師に避難を呼びかけた時、潮位は岸壁を上回ろうとしていました。私は強引にその人の手を引っ張り、防潮堤の方へと走りました。防潮堤まで約30メートルというところでした。鈍い「ガン」という音が立て続けに鳴ったかと思うと、ついに潮位は岸壁の高さを越えて来ました。波が越えて来たことで岸壁に係留していた船同士がぶつかり合つて音が鳴っているのです。その波に追われるように私たちは防潮堤へと駆け上がりました。

息を切らしながら、防潮堤の上から海側を見ると、波は既に平屋の作業小屋をのみ込み、小屋を覆うトタンの壁がきしむ音が響き渡っていました。

「このままでは防潮堤も越えてくるかもしれない」と不安が頭をよぎりました。直ちに防潮堤の上にいた人たちに対し、高台に避難するように呼びかけました。私も最後に残った漁師の手を引っ張ったまま、防潮堤を陸側に降り、高台を目指して再び走り始めました。後方の防潮堤からは地鳴りのような音が聞こえ、それが急に大きくなった時でした。ついに波は防潮堤を越え、陸側へとあふれ出してきました。それはあつという間に私たちをのみ込みました。背後からの圧力を感じた瞬間、体の自由を奪われ、つないでいた漁師の手も離れてしまい、別々に流されていきました。

「死んだな……」、そう思いました。その後、一瞬記憶がなくなりました。

次に気がついたとき、私は勾配の急な坂道の途中に倒れていました。運の良いことに、私は家屋の間を縫うように一直線に坂道まで流され、全身までのみ込まれず、たいしたけがも負っていませんでした。

さきほどまで一緒にいた漁師の安否が気になりましたが、その確認ができる状況ではありませんでした。

防潮堤を越えた波は見慣れた町並みを流し、陸の上では船が走り、転覆を繰り返す。想像を絶する光景でした。

第2波、第3波が来てもおかしくない状況でした。私は周りにいた住民に対し、坂の頂上にある善慶寺まで避難するよう呼びかけました。足の不自由な高齢者を背負うなどしてほとんどの人の避難を済ませたはずでしたが、2、3人の人が波のすぐそばまで戻っていくのでした。すぐに追って話を聞くと、その人たちの家族が第1波襲来の際、家屋内に取り残され、安否が気になり戻ってきたとのことでした。

その家屋は1階部分がのみ込まれた状態で、取り残された家族はその1階にいたはずだと言うのでした。「救助は任せて、あなたたちは寺まで避難してください。家の中には決して入って来ないでください」。そう言い残し、ガラスが破れた窓から家屋内に入っていました。

家屋内は家具や畳などがひっくり返り、泥や瓦礫^{がれき}でいっぱいになっていました。私が呼びかけると奥の方からうめき声が聞こえてきました。無我夢中で家具や畳をどかしていくと、泥で真っ

黒になった男性が家具の下敷きになっていました。全身にけがを負っているのか動くことができません、まともに受け答えもできない状態でした。私はその男性を畳の上に引き上げ、その畳を瓦礫の上を滑らせるように押していき、家屋の外まで搬出。その後は一般の人の応援をもらい寺まで運びました。

ほっとすると同時に他の地域の状況が気になりました。私は津波の襲来を受けていない山側をまわって山田町役場へと向かいました。役場にたどり着き町を見渡すと、あつたはずの建物がなくなり、数カ所で火災が同時に発生していました。瓦礫が道路をふさぎ、消防も現場まで行くことができないのは明らかでした。山田交番も津波の襲来を受けたため、役場を拠点とすることになりました。

役場では要救助者の情報収集にあたり、現場で要救助者を救助、役場まで搬送という流れを繰り返しました。足が不自由な高齢者、津波の襲来を受けた負傷者、火災炎上中の家屋内に閉じ込められた人など、さまざまな人の救助活動に当たりました。

ろくな装備ありませんでしたが、同僚と励まし合いながら決して諦めることなく救助を続けました。ようやく救助要請が無くなったのは日付が変わった頃でした。味わったことのない疲労感に襲われ、役場の椅子に横たわりながら仮眠をとりました。

翌朝、町を見渡すとそこには見慣れた町並みはもうありません。火はまだくずぶり続け、至る所から黒煙が上がった町は、空襲を受けた後のようでした。明るくなったことで新たな要救助者

が見つかり、救助活動に当たりました。

その日の午後、役場にご遺体が収容されたので確認をしてほしいとの役場職員から知らせを受けました。今回の震災でご遺体に対面したのはそれが初めてでした。

そのご遺体というのは、4階建てのビルの屋上まで避難したが、迫り来る火の手から逃げることでできず亡くなった若い母親でした。私は対面したとき、言葉を失いました。そのご遺体は火災により損傷がひどく、判別ができないほどであったにもかかわらず、確実にその両手で1、2歳になる我が子を抱いたままで亡くなっていたのでした。

その方の恐怖や無念さを思うと、助けられなかったことの悔しさや自分に対する無力感が大きくなり、私はただその場に立ち尽くし泣くことしかできませんでした。

その後は救助活動とご遺体の捜索活動に従事しました。他県から派遣された自衛隊の捜索部隊に山田交番から1人ずつ随行し、地理案内をしながら捜索活動を行いました。私は航空自衛隊の部隊に随行することとなり、約1カ月間、その体制が続きました。

捜索活動は常に危険が伴い、体力的にも精神的にも過酷なものでした。朝から夕方まで瓦礫の中を歩き続け、崩れてもおかしくない半倒壊の家屋やガス漏れしている家屋からご遺体を搬出することもありました。高齢の方もいれば幼い子どももあり、遺族が対面する場面に立ち会うたび、かける言葉もなく、ただご遺体に向かって手を合わせることでできませんでした。捜索から帰って来ると立つ気力もなく、翌日の捜索に備えることで精いっぱいでした。

そのうちに、自分自身が津波の襲来を受けた場所の捜索を行うことができました。自衛隊員からご遺体発見の報告を受け、確認すると見覚えのある男性が横たわっていました。その背格好や着衣から、私が手を引っ張って津波からともに逃げていた漁師だとすぐに分かりました。「どうしてあのとき……」と思うと、悔しさと自分だけ助かってしまった申し訳ない気持ちになり、あの時の手の感触がよみがえりました。

また次の日、同じ場所ですべて捜索活動をしていると、私が流れ着いた場所で救助した男性の家族に会うことができました。私は「その後の容体はどうですか？」と尋ねました。その家族は私を見るなり明るい表情になったので、私は「元氣になりました」という回答が返ってくるものと期待していました。しかし、その家族の口から出た言葉は「あの後、息子は容体が悪くなり、その日の夜に亡くなりました」というものでした。

私は愕然とし全身から力が抜け、その場に膝から崩れ落ちました。どうしようもない脱力感に包まれました。しかし、さらに男性の家族はこのように続けました。「でも、あの時助けてもらったおかげで、息子と最後に言葉を交わすことができました。本当にありがとう」。私はその言葉に本当に救われました。

3月11日以降、多くの「死」を目の当たりにし、そのたびに無力感を感じ、私は心底沈んでいました。しかし、男性の家族が私にかけた言葉は、たとえ結果が報われなくても、あの時の行動が無駄ではなかったと私に教えてくれました。

大沢

[Osawa]

2

chapter 2

漁港に面した市街地はほぼ壊滅した
(3月13日午前10時1分撮影)



その後も捜索活動の中で、ランドセルを背負ったまま亡くなった小学生、手をつないだまま亡くなった老夫婦、亡くなった我が子の泥を泣きながらめぐり母親などと出会い、悲しみが絶えることはありませんでした。それでも前向きに「一人でも多く、一日でも早く、家族のもとへご遺体をお返しする」という使命感で、あきらめず捜索活動を続けていきました。

6月の異動までの約3カ月間、無我夢中で走り続けました。我が身も津波に流され、家財のすべてを火災で失いました。それでも被災地での職務を全うできたのは、やはり警察官としての「誇りと使命感」があったからだと思います。

『被災者』である前に『警察官』である」という警察官としての「誇り」が私を弱気にさせませんでした。

また、「使命感」に裏打ちされた行動は、たとえ結果が報われなくても、誰かを救うことにもなるということを知りました。

この未曾有の大震災を乗り越え、経験を糧に、復興に歩み出した被災地に安全と安心を与えられるよう邁進していきたく強く思います。

「使命 証言・岩手県警察の3・11」

大沢

かつて捕鯨の基地があった大沢地区は、沿岸漁業やカキ、ホタテガイなどの養殖漁業の拠点として発展してきた。津波は山田湾の北側に面した市街地に押し寄せ、全住宅のほぼ7割に当たる530戸が被災、130人以上が犠牲になった。地区の防潮堤は東側が海拔6・6メートルの高さがあったが、西側は未完成で同4メートルと低かったため、町中に流れ込んだ津波の勢いの強かったと思われる西側でより多くの被害を出した。住民らは高台の大沢小学校などに避難、電気や水道のライフラインが断たれる中、沢の水を汲んで炊き出しをするなどして助け合った。



地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

死者・行方不明者	133 人
震災前の人口	2,231 人
全半壊家屋	504 戸
被災家屋の割合	69%

あの日、学んだこと

【大沢】 1

山田中学校1年「当時・大沢小学校4年」 白野虹歩^{にじほ}

あの日、私は小学校の4年生だった。大津波は、私の町の大切なものを一瞬にして奪っていった。

私たちは文集にのせる作文を書いていた。4年生19人。いつも通りの教室だった。午後2時46分。大きな地鳴りが聞こえた。誰かが、「地震だ」と言った。私はあわてて机の下に隠れた。長い、長い地震。揺れはどんどん大きくなる。ロッカーからランドセルが落ちた。「やっと終わった」と思い、紅白帽子をかぶり、校庭に出るため並ぼうとした。その時、また揺れが起こった。みんな、机に戻った。大きな揺れが続いた。「もう止まらないんじゃないか」と思った。怖くて、怖くて、たまらなかった。

揺れは収まった。みんなで校庭に出た。するとサイレンが鳴った。「大津波警報が発令されました」。大変なことになったと思った。みんなで校庭に座っていた。何度も、何度もサイレンが鳴っていた。白い建物が動いているのが見えた。「あれは津波なのか?」。信じられなかった。私の家は、家族は、おばあちゃんは無事なのか、不安だった。

夜は学校に泊まった。大沢小学校は避難所になった。地域の方がお米を持って来て、家庭科室

の鍋を使い、おにぎりを作ってくださいました。こげて、固くなったおにぎりを、ゆっくり食べた。毛布を持って来てくださった人もいて、4人ぐらいで1枚の毛布をかけて寝ようとした。でも余震が何度も起こり、2時間ぐらいいしか寝られなかった。

私の家と家族は無事だったが、私が10年間暮らしてきた町は、すっかり変わってしまった。学校生活も変わってしまった。19人いた私の学級は5人が転校し、14人になってしまった。家では、津波で家をなくしたおばあちゃんたちも一緒に暮らすことになった。

新学期が始まった。学校は、避難所や赤十字の活動場所、物資置き場として使われていた。また、毎日のように支援物資をもらった。夏休みが終わると、転校した人が1人もどって来た。2月にはもう1人もどって来た。

小学校最後の年、6年生を16人でスタート。「仲間と協力し合い何でも挑戦する6年生」を目標とし、最後の小学校生活を笑顔で送ることができた。震災が起きたばかりの時は、これからどうなるのか、何も分からなかったけれど、無事卒業できて本当に良かった。

東日本大震災は、多くの命や家、大切な物を奪い、大きな傷跡を残した。悲しく、つらい思い出はあるけれど、命の大切さ、感謝する心を教えてくれた。この震災を、私は絶対に忘れない。命を落とした人の分まで精いっぱい生きたい。

山田中学校1年「当時・大沢小学校4年」 富士友梨佳

私はあの日、いつも通り学校に登校した。普通にみんなと一緒に楽しく過ごしていた。私たちは、その時、4年生の文集を書いていた。ガタガタと、地鳴りと共に地面が大きく揺れ始めた。教室では「世界が終わった」と言う人もいた。私は泣いた。死ぬんだとその瞬間思った。でも、必死に頑張って避難先の校庭にいた。そうしたら、お父さんが来た。少し安心して泣いてしまった。だが、お母さんの安否が分からず不安もあった。

おじいちゃんは、屋根の上にいた。「早くお母さんに会いたい」と思っで一晩過ごした。寒くて不安がいっぱい。どんどん疲れがたまっていた。受け止められない現実。現実から逃げたくなる。でもこれは現実。現実を受け止めなければならぬことは分かっていた。

次の日、お母さんが大沢小に来て会うことができた。すごく安心した。だが、私には、もう一人大事な人がいた。おじちゃんの安否がまだ分からなかった。生きていればいいと願う反面、亡くなっているのでは……という不安もあった。でも、きつとどこかで生きている。そう信じながら一日一日を過ごしていた。

震災から5日くらいだったか、おじいちゃんに来てこう言った。「おじちゃんが見つかった。

遺体で」。その言葉を聞いた瞬間、ぞっとした。怖かった。どうしていいか分からなかった。受け止められなくて、泣いた。ずっと泣いていた。火葬や葬式には出られなかった。悲しくて、悲しくて……。生きているのが少し怖くて苦しかった。そういう時期もあった。

でも、生きられたことが運か奇跡だと思っ、亡くなった人の分まで命を無駄にせず、大事に生きていかなければならない。おじちゃんの亡くなったこと。宮城県の大川小学校の皆さんのこと。犠牲になった方のことを思うだけで胸がいっぱいになった。しっかり前を見て進んでいかなければならない。自分の気持ちが崩れ落ちそうになったこともあったけれど、自分にそう言い聞かせてやってきた。

友達が生きていて幸せ。みんなと楽しく過ごせて幸せ。この命を何よりも大切にして、いろんな事を乗り越え、「絆」という言葉を一人一人が忘れず生きていきたい。何があってもみんな協力すればどうにかなる。私が震災で学んだことである。

人は、生きていることだけで幸せ。さらにみんながいることで幸せ。震災の事は、世界中のみなさんにも忘れないでほしいし、「生きてるって幸せ」と感じてほしい。

自分の身は自分で

【大沢】 3

山田中学校2年「当時・大沢小学校5年」伊藤 徹

その日のことは、絶対に忘れられない。「ガタガタ」。大きな音と共に学校が揺れだした。大津波警報が発令され、みんなで校舎を離れた。校庭に避難した。

しばらくして、とても大きな濁流が見えた。津波だ、見に行ったらだめだ、と先生に言われた。だが、被害の状態を自分の目で見たかった。フェンス越しに大沢の町を見た。そうしたら大きな波と共に家や車などのがれきが山のほうに押し流されていくのが見えた。波が引いた後、また町を見に行った。いっぱい立っていたはずの建物がなくなっていた。その日の夜はほとんど寝られなかった。余震が続いていた。山田の方で火がついているのが見えた。大きな、大きな火だった。ラジオで被害の状況を放送していた。

次の日の朝起きて、冷たい山の水で顔を洗った。そしておにぎりを食べた。いろんな所から、支援物資の食べ物や、応援の手紙が届いた。外国からもメッセージが届いた。こんなにも僕たちの事を思ってくれている人たちがいるんだと思った。とてもうれしかった。

あの日は、絶対に忘れない、もう二度とこんなことが起きてほしくない。でも、そう思っているにも起きるだろう。昔は、こういう事があったんだよって語っていかねばならないと思う。

「地震が来たら高い所に逃げろ。自分の身は自分で守れ」。少しでも悲しむ人を少なくするため。

次の世代に伝える

【大沢】 4

山田中学校2年「当時・大沢小学校5年」古久保優希菜

あの日、私は高台にある小学校にいた。午後2時46分、ガタガタガタと強い揺れ。地震だ！素早く机の下にもぐり込んだ。揺れは長く続いた。その後、外へ避難。恐怖のあまり泣いている人もいて、みんな不安そうだった。

高台から海を見たら波が引いている……。「津波が来るぞー」と誰かの声がした。バアツと鳥がいつせいに飛び立った。しばらくしてザーザーと波の音がした。ゴーゴーと黒い波が次々と家を押し流していく。その光景を見て信じられなくて、言葉を失った。

その日は学校に泊まる。停電だし、水は出ない。夕飯はおにぎり1個。毛布も足りず寒かった。山田の中心部の空は赤く、何が起きているのだろうか？ 家族は無事なのか？ いろいろな考えと急に不安になった。余震と寒さでふるえが止まらなかった。

がれきだらけの変わり果てた町、日に日に増える犠牲者の数、あまりに衝撃が大きすぎて、こ

それが現実か？ 夢であってほしいと何度思ったことか……。

当たり前の日常が一瞬で消え去り、不安な日々の中、世界中の方々からたくさん支援をいただいた。涙が出るほどうれしかった。支えてくれる、助けてくれる人たちがいることに感謝し、勇気づけられ、前向きになれた。感謝の気持ちを強く持つことができた。

あの日から2年10カ月。当時小学5年生だった私は現在中学2年生になり、学校生活や部活で充実した毎日を送っている。当たり前の生活ができることはとても幸せなことだと思う。

多くの方々の努力によってがれきが撤去され、お店ができ、少しずつだけ町は変化している。しかし、いまだに仮設住宅で暮らしている人たち、仮設店舗で営業している人たちが大勢いる。土台だけになった町並みはあの日のまま。復興にはまだまだ時間がかかるのだろう。

テレビや新聞でも震災の事があまり報道されなくなると、世の中の人たちの記憶はどんどん薄れていくと思う。震災を経験した私たちにできることは、次の世代に津波の恐ろしさを伝えることだと思う。

山田の町が一日も早く復興し、前より安心して暮らせるよう心から願っている。

津波の悲しみと再会の喜び

【大沢】

5

山田中学校2年「当時・大沢小学校5年」箱石瑛己^{えいき}

平成23年3月11日は、私の祖父の70歳の誕生日でした。その日はお祝いでお寿司やケーキが食べられると思い、いつもより上機嫌で大沢小学校に登校しました。私はいつも通り授業を受けていましたが、午後2時46分、大きな地鳴りと共に大きな地震がやって来ました。私たちは机の下に隠れ、揺れが収まってから校庭に避難しました。

校庭には近所の人たちがたくさん避難していました。間もなく海の方から、煙と共に大きな津波が押し寄せてきました。車や家をのみ込む、大きな、大きな津波でした。それを見ていた小学生や近所の人は泣き叫んでいました。私の家は海の近くにあるので、津波に確実にのみ込まれたと分かりました。しかし、家にいたはずの祖父と祖母は避難して来た人たちの中にはいませんでした。私は祖父と祖母は助からなかったかもしれないと思いますが、みんなの前では不安なそぶりを見せず、毅然とした態度を装っていました。その日の夜は、みんなでろうそくの火で過ごしました。

次の日の朝、大沢の町は、無惨な姿になっていました。やっぱり祖父と祖母はいませんでした。ほとんどあきらめていた時、祖父と祖母と父が私をさがして小学校に来ました。私は祖父に

思わず「死んだと思ったじゃないか」と言いました。無事でいてくれて、とてもうれしかったです。地震があった日、山田で働いていた父が家に戻り、避難しようとした時に津波が来て祖父祖母は家の屋上に逃げたそうです。幸いにも家が鉄骨で造られていたので、家は流されず助かったそうです。3人はその場で一晚を過ごし、明るくなってから私をさがしに来てくれたということでした。

兄は中学校にいて、母は宮古の職場で避難し、無事でした。姉は盛岡にいましたし、家族全員無事で、本当に、本当に良かったです。

今は家を直し、家族全員で暮らしています。今でも津波が来た時の悲しみ、父、祖父、祖母に再会できた時の喜びを忘れることができません。

二度とこのようなことがないことを願い、家族がバラバラにならないように、地震が来たら必ず避難することを家族で約束にしています。

保育士になって役立ちたい

【大沢】

6

山田高校3年「当時・山田中学校3年」若江ひかり

震災当時、私は中学3年生でした。午後2時46分に大きな地震を感じました。体育館に移動す

ると、近所の方々も避難してきました。すぐ帰れると思っていましたが、津波が山田町を襲ったと聞いた時は真実だと実感できませんでした。山田中学校に火事が迫っていると聞き、山田高校に行き、夜を過ごしました。とても寒く、毛布も足りず、暗幕も使い、みんなで丸くなって過ごしました。次の日、周りの友達は親が迎えに来て、帰っていく姿を見て、私の家族は無事なのかと思い、不安でいっぱいでした。次女の姉と長女の旦那さんが迎えに来てくれて、家族は無事だと聞いた時はほっとしました。

大沢へ戻った時、私は腰が抜けてしまいました。どこを見回しても、何一つ跡形もなくなっていました。慣れない小学校での生活は毎日がつらかったです。一日でも早くここから抜け出したいと、毎日のように考えていました。食べ物もあまり配給されず、狭い空間での生活は、今までに経験したことがありませんでした。当時、甥は3歳で小さく、母はぜんそくで薬もなく、空気の悪い中で暮らし、夜は眠れなかったそうです。少しでも安眠できるように、姉たちと家を探しに行きました。山田には借りられる家もなく、宮古まで行きましたが全然なく、一カ月かかってやっと借家を見つけることができました。

当時中学3年生で受験は終わっていたものの、可否を知ることができず、卒業式にも出席できませんでした。周りからの情報で、山田高校に合格しているのを知りました。あれからもう3年、親の車で宮古から山田まで送ってもらったり、バスで通ったりしました。家族にはいろいろと迷惑を掛けてきました。あと数カ月で高校生活も終わります。進路は青森の短大に決まりまし

た。保育士になれるように2年間、がんばっていききたいと思います。そして、山田に帰ってきて、山田の保育園でたくさんの子どもたちの面倒を見ていきたいです。復興は何十年とかかると思いますが、山田町に戻れることを望んでいます。私も復興の担い手の一人として役立ちたいと思います。

教訓伝え、未来につなげる

【大沢】

7

大沢婦人会長 大川ヒメ子（68歳）

大好きな山田の海。美しい山田湾は養殖漁業が盛んで、宝に恵まれた豊かな海だ。けれども、自然は宝や恵みだけでなく、時として大きな脅威をもたらすということを身をもって知った。

あの日、体操教室に参加中に大きな地震に遭った。会場のふるさとセンターの天井は大きな音がして剥がれ落ち、ほこりが舞い、視界も悪く、咳き込んだ。このまま建物の下敷きになって死ぬのかと恐怖を感じた。今までに経験したことのない大地震。これは大津波が来ると思って、自宅に急いで戻った。体操教室の参加者十数人も走り去った。

常備しておいた防災リュックを背負い、仏様を手提げに入れ、靴下、帽子、防寒着を着て、長靴を履き、高台の途中（わが家の倉庫がある場所）まで避難した。

夫は車2台を自宅の方から倉庫付近に置いて、家の方へ走って行った。あの時、「行かないで」と止めなかったことが今でも悔やまれる。夕方になって、がれきの中から助け出されたが大けがをしていた。

小学生の孫は学校で全員保護してくださり、安心した。学校の先生方が夜も子供たちを見守ってくくださったお陰で一人の犠牲者もなく、感謝の気持ちでいっぱいだ。中学生の孫たちも、学校は高台だけれど火災から逃れ、山田高校に集団で移動したそうだと情報があり、ほっとした。

私と娘が倉庫に避難している時、明治の津波も昭和の津波もここまでは来なかったと声が聞こえたので安心していった。しかし、車2台や倉庫も流されたり、壊されたりした。

海岸の方から男の人が叫びながら来た。「津波だー、逃げろー」。防災行政無線は「大津波警報発令、高台へ避難を」と繰り返し、ボー、ボーとサイレンが鳴る。

さあ、大変だ。私と娘は高台へ向かった。着いたら、バリバリバリと音がして、土ほこりを巻き上げ、地上5メートル近い高さの防潮堤を越えて、黒くて高い波が襲ってきた。次々と数台の車をのみ込み、建物や住宅を押し流したり倒したりして、がれきの山ができた。海を見たら、相当重みのある養殖いかだが湾口から山田の方に向かって、高速道路の自動車のように猛スピードで一直線に走っていた。係留されていた船も舳（うしほ）い綱が切れ、流されたり、ひっくり返って海中に消えたり、その様子は映画の世界か、夢のようだ。夢であればいいと思った。

一緒に津波を見ていた人たちは、声も出せずに口に手を当てたままの人、「あーっ、何だあ、

こりゃー」と叫ぶ人、「あーっ、俺の家が流されだー」と悲鳴を上げる人、ただただ泣いている人……、様々だった。

「今までの津波は波が引いてから次の波が押し寄せたものだが、今回は押し波が引かないうちに次の押し波がどんどん来たので、波が高くなって被害も大きくなったんだろう」。長老さんたちはこう言っていた。

夫は、大けがをして寒さのためぶるぶる震えている。手の指の爪は2枚剥がれ、血が止まらないう。血圧は下るし、顔色もどす黒い。生きるか、死ぬかの不安の中、私と娘は小学校避難所へ移動した。

夜、たびたび来る余震と、山田の街の空を赤く染める火災の炎におののいた。時々響く爆発音も恐かった。誰も無言だった。家族の安否を尋ねる声も聞こえた。まんじりともせず朝になり、波にのまれた方々の悲報が届く。苦しく悔しかっただろう。残念だ。御冥福をお祈りする。

震災直後、衣食住の支援物資の供給があり、ボランティア、赤十字医療チーム、自衛隊、警察、地元の消防団の方々に本当に助けられた。心から感謝を申し上げる。

津波はどのようにしてやって来たのか。人間の生死を分けたのは何だったのか。海に育てられ、共に生活している私たちは、今後でも多かれ少なかれ、津波と付き合っていかなければならない。「大地震の後には必ず大津波が来る」。とにかく安全な高台に、「てんでんこ」でもいい、避難することを防災の教訓として語り伝えていきたいと思う。

震災から2年がたち、泣いてばかりもられない。暗い夜道に電灯がつき、信号も整備され、がれきもほとんど片づけられた。商店街や水産物加工業も復活、海の養殖施設も復旧し漁船も増えた。街には少しずつ活気が戻っている。地域住民も行政も復興に向けてがんばっている。だから復興の形を早く見たい。長い目で見た時、この大震災も、きっと未来の発展につながっていくと信じている。

民生児童委員の私が心掛けたこと

【大沢】

8

山田町民生委員児童委員協議会大沢地区会長 中村きの（64歳）

地震が起きた時、民生委員・児童委員の私は大沢保育園で会議をしておりました。ものすごい揺れで、立っていられませんでした。机の引き出しは外れ、いすは転がり、夢中で外に飛び出しました。2度目の地震で、これはただごとではないと思いました。小さいころから、大地震の後には津波が来ると聞いていたからです。

家に帰りましょう、と皆さんに話しました。帰る途中、道路に人影はなく、網戸などが倒れていました。家の近くに來たら、近所の人たちが道路に出ておりました。私の家は高台にあったので、皆さんが避難していたのです。家に着き、実家の母が一人暮らしなので見に行きました。妹

の夫がいました。宮古の会社から大浦の家に帰る途中に寄った、ということでした。今から家に帰るといふのを、海のそばを通るのは危険だと制止しました。母を連れて大沢小学校に避難するようにお願いしました。私は家に残り、大事な物をリュックサックに入れて外に出ました。近所の人たちと、ガスの元栓を止めようと話し合いました。

ものすごい音がして、国道を車と家が並んで走っているのが見えました。一瞬、訳が分からなくなりました。誰かが「津波だ」と叫びました。高齢者や車いすの人たちを学校に避難させるように呼び掛けました。津波は、1波、2波が高いと聞いていたからです。学校に着くと、校庭や教室にたくさんの方がおりました。先生にお会いし、今何が必要ですかと尋ねました。ろうそく、トイレットペーパーなどでした。ペットボトル、食事の準備も必要です、近所の人たちに声を掛け、品物を集めて学校に持っていきました。幸い、私の地区は沢水が流れていましたので、ペットボトルに水を入れ、おにぎりともそ汁を作りました。

それから10日間ほどは毎日、三度の食事作りでした。その間、地区の民生児童委員の会長の死亡、弟の行方不明などを知りました。私は、今自分ができることをしようと思いました。避難所はいろいろな人たちの集まりでした。ある高齢者がストレスで様子がおかしいと看護師さんから相談されたり、精神科に通院していた人が家に帰りたいと言って泣き出したり、心臓の薬を飲んでいたら人が不安になったりと大変でした。一方、在宅の時は他人と話すのを嫌っていた高齢者が誰とでも話すようになったり、紙おむつを使用していた人がトイレに杖について行けるように

なったりと、うれしい事もありました。

食事作りも避難している人たちで交代するように話し合いました。その後、班を作り、掃除、食事作りなどを交代でするようになったということでした。短い期間でしたが、毎日が忙しく、食事を取るのも忘れるほどでした。地域の人たちや学校の先生など、多くの人たちにさまざまな経験をさせていただきました。

民生児童委員としての活動を優先し、自分の家は後回しでした。福祉に携わる多くの人たちが、毎日そんな気持ちで過ごしたのではないのでしょうか。家族、地域の人たちに支えられ、感謝の気持ちでいっぱいです。

傾聴ボランティア、民生委員児童委員協議会の仲間、いろいろな人たちに、お世話になりました。「民生児童委員だからといって一生懸命頑張らなくていいんですよ。災害後、私たちがすることはいっぱいあるんですよ。ちょっと肩の力を抜いてやりましょう」。支えてくださった人たちの忘れられない言葉です。

人間は、支えたり、支えられたりして生きているということを実感しました。「津波は、てんでんこ」。昔の人の言葉がよみがえります。私は、生かされている。今は少しずつ前進できるように、頑張りたい。突然、亡くなった多くの人たちのためにも、毎日を悔いのないように生きたい。そんな自分になれたらいいな、と思いながら暮らしています。

中村ふさ（64歳）

何千年に一度といわれる未曾有の災害に、まさか生きている間に見舞われるとは想像だにしませんでした。私たち夫婦もまさに九死に一生を得る体験をしました。

あの日、私たちは「宮古湾温泉マース」（宮古市金浜、閉鎖）にいました。ロビーでくつろいでいたら突然の揺れ、いつもの感じで受け止めていました。が、揺れはますます激しくなり、室内のあらゆる物が大きな音を立て、人々は右往左往するばかり。ほどなく、明るかった館内も電気が消え暗くなりました。皆家路を急ぐとレジに殺到するもレジが作動せず、パニック状態でした。

入口付近にいた私たちは急いで車に乗り、余震が続く中、家へ向かいました。国道はまだ比較的すいていて、行き交う車は皆、先を急いでスピードを上げていました。

大沢に入ると、大部分の人が避難した様子で人影もなく、異様な静けさに不気味な感じがしました。消防車だけが何度も避難を呼び掛け、事の重大さに緊張感を覚えました。マースから20分ほどで家に着くと、家の中は棚の物が落ちたり、トイレのストッカーが倒れ、ドアが開かなかったりで、地震の大きさがうかがえました。

夫は、定置網の船を冲出ししようと急いで家から飛び出していききました。私は落ちた物を片付けたが、地震が大きかったから津波は来るだろうが、堤防を越えて来ることはないだろう。ラジオでも3メートルとか5メートルと言っているし、夕方には家に帰って来られるだろう」と思っていました。気付くと地震から25分もたっていました。

こうしてはいられないと急いで外に出たら、近所のおばあさんが、若夫婦が出掛けて帰ってこない心配そうにウロウロしていました。おばあさんの家は海から60メートルくらいの所にありました。

とりあえず海の見える縁側に腰掛けることにしました。堤防の辺りにもう、6人の男のひとりが沖の方を眺めていました。腰掛けて間もなく、2、3分たったくらいでしょうか。ゴゴゴと今まで聞いたことのないすごい轟音を立てて、津波が堤防を越えて来たのです。「おばあさん、津波だ」。おばあさんは目が悪く何が何だか分からないようでしたが、私はとっさに手を取り、「早く、早く」と言いながら、家の横の坂道を上へ上へと逃げました。

波が物を壊しながら迫って来ます。恐怖で足が動かず、ましてやおばあさんが気になって自分の思うように進めません。すると、そこへ1台の軽トラックが通りかかり「早く乗ったんせ（乗りなさい）」。荷台におばあさんを乗せ、私もへばり付きしました。

助けてくれた男の人にお礼を言うと、安堵感とまだ覚めぬ恐怖感が交錯し、ぼうぜんとしてその場にしゃがみ込んでしまいました。

その日は、近所の人たちも含め10人くらいが近くの高台のお宅でお世話になりました。小雪の舞う寒い夜で余震におびえながら皆で身を寄せ合い、まんじりともせず一晚を過ごしました。

夜が明け、眼下に広がる想像を絶する惨状に驚愕しました。これが現実に起きた事とは、にわかには受け入れられませんでした。

夫は船の沖出しには間に合わず、堤防の上で海の方を見ていたら、海面が一気に盛り上がり、堤防を越える勢いで津波が迫って来たといいます。走って船主さん宅に逃げ込みましたが、1階、2階と波が押し寄せ、天井あたりにできたすき間から屋根にはい上がり、そのまま家ごと流されたそうです。運良く漁協の建物の所に流れ着き、夢中で履いていた長靴で窓ガラスを割り、中に逃げ込んで助かったと知らされました。

本当に私たちは運が良かったとしか言いようがありません。近所では親子、友人、親しくしていた夫婦も亡くなりました。数分数秒の行動が生死を分けました。生きたくても生きられなかった人たちの事を思うと胸が痛みます。

私はこの大震災で大切な事を学びました。海のそばにいなが素早く行動しなかったことを反省しました。想定外という言葉を数多く耳にしました。まさかと思うことも起こる。油断してはならぬこと。津波の教訓を絵空事のように思っていました。が、教訓の大切さを認識しました。

大丈夫だろうではなく、絶対大丈夫な所に避難する。一度避難したら二度と戻るな。欲捨てろ。いつかは来る宿命的な津波から命を守るための教訓を後世に語り継ぐことが、生き残った私た

ちの使命だと思います。

自分の道を探して歩む

【大沢】

10

寺本充子 (68歳)

私にとって、あの東日本大震災の大津波は、一生忘れられぬ、つらく悲しい出来事です。夫と息子はそれぞれの職場に出勤し、私は病院で長兄が一時も目を離せない危篤状態だったので、兄妹で見守っていました。

病院の廊下にいる時、大地震が起きました。義姉を病室に残して大沢に戻り、高台にある集会所に行きました。たくさんの人たちが車で避難していました。その時、海が、大きな白壁と空が一緒になったように目に映りました。大津波です。自分の家の方を見たら建物が音もなく消えていました。その後の記憶は薄れています。

「炊き出しをしなければ」と思い、ふるさとセンターの台所に行きました。若い人たちが数人いて、ガスも水もないので山の沢水をくんでご飯を炊きました。ろうそくの明かりのそばで、小さなおにぎりを分け合って食べました。消防団の人たちは行方不明者の捜索に懸命でした。避難所の外では大きな火をたいて暖を取っていました。皆、無口です。一睡もせず明るくなって、ま

た朝食の準備です。南陽寺さんからお米などを頂き、大変ありがたく思いました。

夜になって、ふとわれに返り、家族のことを思い出しました。「夫は？ 息子はどうしたのかな？ ボランティアをしながら山田のどこかにいるだろう」と思っていました。夜遅く息子が訪ねてきて、手を取り合って喜びました。炊き出しはおにぎりを数百個作りました。

3日目の朝、夫を捜しに息子と山田の方へ行きました。ボランティアをしているだろうと思っ
て行った山田南小学校にはおらず、がれきの山を越え、道のない沢を下って、国道45号線近くの
職場へ向かいました。夫は職場の鉄骨に挟まれて亡くなっていました。

まるで私と息子を待っていたかのようで、私はただ泣き崩れ、記憶を失いました。夫の遺体は
息子に付き添われて警察へ行き、私は避難所に帰りました。

あの日から2年経ち、夫のことは忘れられません。毎日仏様に手を合わせています。3月には
三回忌法要をして冥福を祈りました。今、私は皆様に励まされ、一步一步前進したり、後退した
りの日々ですが、何とか自分の道を探して歩いています。自分のため、自分を少しでも必要とす
る方のために歩いていこうと思います。

今度の震災で「自分のことは自分で守らなければ」と一人一人が思うことが大切だと感じまし
た。

「明日へ向かって」第2集

つらくても生きてこそ

【大沢】

11

中嶋るみ子（64歳）

あの日、浜川目の自宅で激しい揺れに驚いて外に出た。近所の方々も集まってきており、町の
職員だった私は「津波が来る」と感じて、皆さんを避難誘導した。海の方を見ると、すでに津
波が防潮堤を越えようとしていた。「危ない」。小高い場所に逃げてホッと一息ついていると、
「あつ」という間もなく背後から波にのまれた。耳がキーンと鳴った。押し流された。どれぐら
い流されただろうか。長い時間ではなかった気がする。手を伸ばしたら木のような物に触れてつ
かまった。家が流れてきて挟まった。痛くなかった。何度も何度も水を、いや、泥を飲んだ。
「このまま死ぬんだな」と思った。時々意識が薄れていく。家族のことが頭をよぎっては消え、
浮かぶ。多分叫んだと思うが、声にならなかった。

水が引き、気が付くと夫に助け上げられていた。右手首の骨が折れ、右ひざの靱帯（じんたい）を損傷、右
耳にも木片が突き刺さっていた。

あの日から2年4カ月。3回目の誕生日を今日、7月11日に迎えた。今は住み慣れた大沢を離
れて、隣の地区に住んでいる。夢に見るのは、古いけれども思い出のいっぱい詰まったあの懐か
しい海の見える家。たくさんの方の手を借りて生きることができた。感謝しても感謝し切れない。

あれから3カ所の病院に通って、歩けるようになった。自力で歩ける喜びをかみしめている。機会があつてご詠歌の仲間数人で四国参りをした。震災の後だからこそみんなで行く気になったのかもしれない。車中、思い思いの事を話し、涙を流したりし、震災後、初めて大声で笑った。生きたくても生きることができなかったたくさんの方々を思い、四国のご詠歌大会に参加した。私たちのお唱えが、法の道まで届けばと、心を込めて詠った。私たちも心一つにできた瞬間だつたと思つている。

わが家にこの秋、初孫が生まれる。この苦しい時代に生まれてくる子に幸あれと、願わずにはいられない。生かしていただいた。生きてこそやらなければならない事がある。

次の世代を担う若者たちや孫たちには遭遇させたくないが、必ずや来るだろう大津波のことを教え、語り継いでいかなければならない。

各地で色々な取り組みが伝えられている。踊りや歌で伝えている市、語り部を養成してガイドをしている市町村、様々な取り組みに感謝しつつ、自分も何かしら教え、伝えることに参加できればと思つている。まだまだ心の傷は癒えず、苦しくつらい日もあるが、これもまた生きている証し。

最後になりましたが、ご支援下さった方々、ありがとうございます。復興への道のりは遠いですが、どうぞ、最後まで見守つていただければ幸いです。

「明日へ向かつて」第2集

不安と寒さに震えた夜

〔大沢〕

12

箱石初代（67歳）

あの日、近所の家の法事でご詠歌を唱え、玄関前で大きな地震に遭つた。立つていられず木につかまる。電線は揺れ、地面はひび割れるようで、「早く逃げて」という声を聞いて、車で自宅に戻つた。途中、自転車をこぐ人、足早に走る人たちが「3メートルの津波が来るぞ」と叫んでいた。

千年に一度の津波が襲来する寸前のことなのに、私は家に着くと、まず先祖のお位牌をこたつの上に出し、仏壇のこぼれた水を拭き、散らばつた茶筆筒ちやんすの中を片付けていた。その時、娘が来て「早く逃げて。大きい津波だつてよ」と言う。今思えば、着物姿でも何でも格好はどうでもいいから、あの時、娘の車に乗れば良かったと後悔する。

着物を脱ぎ始めた時、海岸の方から異常な音がするので、見ると津波だつた。

上着だけを持ち2階に上がる。よその家が流れてきて、大きな音と共にぶつかる。ガラスは割れ、水しぶきが天井まで跳ねた。海水がどんだん入り、畳が持ち上がり居場所がない。押し入れの上の天袋に上ろうと思ひ布団を積んで、無我夢中ではい上がる。危機一髪だつた。真っ暗な中、不安と寒さに震え、恐怖の一夜を過ごした。

夜明けに「おーい、おーい」と声がした。「ここ、ここ」と叫んで、窓から外を見たが、誰もいなかった。

家は200メートルくらい流されたのか。船が流れて来て車はひっくり返し、がれきの山ができていた。変わり果てた大沢の町を見て涙が出た。2階はヘドロや色々な物が流れ着き、その中から新しいマジックペンを見つけた。孫の服に「助けて、2階にいます」と書いて屋根につしたが、ヘリコプターも気付かなかった。

自力で脱出する覚悟で息子のブーツを見つけ、シートを身体に巻いて窓から一歩踏み出した。がれきの山の上で、漁網やロープが何本も絡まり大変だった。消防隊員がいて、避難所まで案内された。「助かった」と思った瞬間だった。会う人ごとに「娘さんが捜していたよ」と言われた。多数の死者と行方不明者の安否を聞き、一喜一憂した。

大沢小学校の避難生活では、たくさんの支援物資と善意の人たちの好意を頂き、感謝に堪えません。ありがとうございました。

「明日へ向かって」第2集

避難所で心の交流

【大沢】

13

富士鷹子（75歳）

あの時、私は大沢地区の健康体操教室が午後1時からふるさとセンターの2階で開催されたので、近所の友達と参加していました。

運動中に突然ものすごい地鳴りと共に地震が発生しました。揺れはだんだん大きくなり、建物が壊れるのではないかと思いました。天井から落下する物、壁に沿って積んであった机が崩れ、室内はほこりが舞い、息も苦しくなりました。どこが安全か、ただただ逃げ場を探して走り回らばかりでした。揺れが少し収まった時、皆で1階に下りました。その後は「てんでんこ」に自分の家の方へ走ったと思います。

私は家の近くまで来た時には、胸が苦しくなり、歩くことも困難でした。十五、六分ぐらいは走ったと思います。玄関の前では夫が車を準備して待っていました。私が「茶の間の引き出しに財布と薬があるので取ってきてほしい」と頼むと、「テレビで大津波が来ると言っている。何にも要らないから早く車に乗って逃げるんだ」と怒鳴られ、慌てて何も持たずに逃げました。

もし、私があ那時、強引な態度で行動していれば、2人とも危険に晒さらされていたかもしれませ
ん。今、その事を思うとゾーッとして胸が締め付けられ、しかってくれた夫に感謝しています。

私たちが避難場所にいると、遠くから消防団の人が大声で「大津波が来たぞー！ もっと高い所に上がれー！」と叫んでいるので、杉林の高い所に上がりました。中には腰を抜かしたのか歩けない人もいて、皆で腕を組んだり、後から押し上げたりしてどうにかたどり着くことができました。そこはまだ積雪が30センチくらい残っており、すぐに足が冷たくなりました。大きな余震が頻繁にあり、恐ろしくて皆でしがみついたりして、「この山も、どうにかなるのでは？」と心配になってきました。

下の方を見ると、さっき乗ってきた車が流されていき、建物の屋根などが次々と流されて来ます。「これが津波なのだ」と思いながらも、何が起きているのか分からず、ぼうぜんとしていました。助けを求める人の声、流されて来た人のうめき声、がれきはどこどん押し流され、水が押し寄せて来たり引いたりするのを数回見ました。その場にいた人たちはパニック状態になり、体の震えが止まらず、お互いに声を掛け、励まし合って落ち着こうとしていました。山の峰伝いに来た人から「袴田、川向は家が全部流された」と聞き、ますます不安になってきました。

夕暮れになったので山を下り、サンヨーソーイングの方へ歩きました。工場内には30人ほど避難していて、電気もつかない暗闇の中、石油ストーブで暖を取っていました。すると、豊間根支所に避難所ができたとの情報が入り、バスで送ってもらいましたが、その避難所も満杯となり、私たちは豊間根の新田集会所へ移ることにしました。大沢、川向の人たちが一緒だったので心強く思い、ここから避難所生活が始まったのです。

最初の夜は、山田、田の浜、大沢と全部で30人ほどでした。余震も続き、皆、命からがら逃れて来た人たちで、顔は青ざめてボーっとしており、無口なまま一睡もせず過ごしたと思います。新田地区の皆さんからは大変親切にいただき、ありがたく、心も癒やされました。朝早くから忙しい中、おにぎりを作り、食事の支援をしてくださり、大変申し訳なく、感謝の気持ちでいっぱいでした。そこで私たちもお世話になっているだけではなく、皆で話し合い、自分たちの食事は自分たちで作り、各避難所へのおにぎり作りを手伝うことにしたのです。少しずつ仕事もできて笑顔も出るようになり、身体を動かし活動的になり、元氣を取り戻すようになったのです。豊間根の避難所に落ち着いてからは、日頃、食生活改善推進員として勉強した事をここで活用しようと思い、先頭に立って皆の健康を考え、自分たちの食事作りを頑張ることにしました。最初は食材が少なく支援物資の缶詰ばかりでした。食欲のない人に何かおいしく食べてもらえるメニューがないか考え、サバの水煮缶を使ってカレーライスを作ったのです（ルーは近所からの頂き物）。これが大好評で、「こんな食べ方もあるんだね。おいしい、おいしい」と言って食べてくれたので、私も大変うれしかったです。次はサンマの蒲焼丼です。その時も喜んで食べてくれました。日がたつにつれ、支援物資の食材も徐々に増え、本当にありがたく食事を取ることができました。

このような事をしながら、今度は全壊した自宅を修理改築することになり、夫と2人で毎日豊間根から大沢に通って、1階部分の壁を壊し、残した柱を塩分除去のため水洗いし、乾燥に取り

織笠

Orikasa

3

chapter 3

土煙を上げて流される織笠川流域の集落
(3月11日午後3時23分撮影)
橋浦恒一さん提供



掛かりました。後は大工さんに頼んで修理することになりました。

早いもので、津波から4カ月も過ぎ、7月半ばには石峠仮設住宅に引っ越すことになり、長い間家族のように一緒に生活してきた避難所を出る時は、全員一緒に出ることにしました。別れは本当につらいものでした。また、お世話になった新田集会所の近隣の皆さんには盛大な送別会をしていただき、いろいろ思い出の詰まったつらい別れとなりましたが、皆様とは今なお親しくお付き合いをさせていただいております。

10月半ばには待ちに待った自宅の修理改築も終わり、自宅に引っ越しをしてうれしいはずなのに、それほどありません。まだ仮設住宅で暮らしている人を思うと、自分だけがもろ手を挙げて喜べないような気持ちがあります。仲の良い友達が遠くに行ってしまったら、いろいろな事があつたりして、寂しいばかりです。少し大きな地震があればすぐ避難で、不安な生活をしております。早く防潮堤ができることを願っています。この大震災により、日本国中、世界中の皆様から温かいご支援を頂き、心から感謝いたしております。本当にありがとうございます。

「明日へ向かって」第1集

織笠

高台から山田湾の丸い形を美しく見渡せる風光明媚な織笠地区は震災前、織笠川河口の北側に市街地が形成されていた。漁協では毎年、サケの稚魚の大規模な放流を行い、川には秋から冬にかけて成長した無数の親魚が遡上する。高さ10メートルに及ぶ津波は、織笠川に架かるJR山田線の鉄橋や織笠駅の駅舎、密集する住宅などをことごとく押し流し、火災も発生した。住民らは高台の織笠保育園や織笠小学校、地区のコミュニティセンターなどに駆け込んだが、逃げ遅れた100人以上が犠牲になった。



地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

死者・行方不明者	117人
震災前の人口	2,812人
全半壊家屋	522戸
被災家屋の割合	52%

山田中学校3年 堀合紳弥

あの日、東北地方を中心に、日本の広い地域をマグニチュード9・0の大地震がおそった。

僕たちは、帰りの短学活中で、教室にいた。いきなり大きな地鳴りと共に、教室が揺れはじめ、それが1分以上も続き、揺れも収まり切らないうちに、外に出て校庭に避難した。その後、たて続けに大きな地震が発生し、とても恐ろしかった。

その後、学校の下の方でザー、ザーと音がし、電柱が倒れていくが見えた。先生たちの話を聞くと、「すぐ下まで津波が来ている」とのことだった。自分の家も学校のすぐ下なので、家はもうない、と思った。

同時に、大沢で働いている母は、宮古市役所前の道路工事をしている兄は、大丈夫だろうかと思った。

体育館に行き、織笠の方を見ると煙が上がっていた。体育館に来て、余震が収まらず、気温も下がり、寒さと余震に耐えていた。午後5時から6時を過ぎたところ、短時間で教室に戻り、必要な物を持って来てよいと言われた。教室に戻る時、町の方を見ると、やはり、5カ所くらい大きな煙が上がっていた。阪神大震災の時の映像を思い出した。山田もあのような感じになっている

のだろうか、と不安になった。

夜になり、みんなで集まって話をしていると、「すぐその山まで火が回っているので、山田高校に行きます」と言われた。荷物を持って学年ごとに出発した。

街の方の空を見ると、火でオレンジ色になっているのが分かった。山田高校の体育館に行った後も、余震が多発し、起きるたびに寒さや怖さで体が震えた。

次の日になると、航空自衛隊や防災航空隊のヘリで人や物資が運ばれてきた。すると、一番心配していた兄が入り口の所に来ていた。海のすぐ近くが現場だったが、山に上がっていればいいな、と思っていたので、ホッとした。少し話をして、「家、ないっけぞ（ないぞ）」と言われ、「まあ、しょうがねえ」と答えた。「おかあは」と聞くと、「まだ連絡がつかない」と言われた。そうしているうちに、新潟に行っていた父が帰って来てくれた。その後は、父と兄とで各避難所を回って、母の安否確認をした。

どこにも、母の名前がなかった。父と兄に呼ばれ、車で話を聞いた。「おかあのは、半分諦めた方がいい」と言う。同時に、母の兄も行方不明になっていることを知らされた。

体育館に戻る時、消防がたくさん来ていた。小さいころから消防が好きだった僕は、本などで見ていた各都道府県の緊急消防援助隊のすごさを知っていたので、「よっぽど、すごい事になっているな」と兄と話した。

発災から1週間ぐらいしてから、北浜地区のばあちゃんに会いに行った時に、初めて被害の状

態を見た。山田ではなかった。母の兄は、1カ月ほどたったころに、津波で流されて移動していた家の中から見つけた。母は、3カ月たった6月に確認された。

僕のDNAと近い遺体があったと警察が来て、写真を見ると、3カ月間、遺体安置所に通って見ていた焼死体の写真だった。そこで父のDNAも採り、「旦那さんと遺体のDNAを足して、息子さんのDNAが出たら、この遺体はお母さんです」と言われた。それから2週間ぐらいしてから、警察からの電話で母だったと知らされた。

合同葬儀には、県中総体で出られなかったのも、出発前の朝と、帰ってきた次の日にお寺と墓に行って拝んだ。「今までお疲れ様。ゆっくり休んで」と心の中で伝えた。

人は、どうなってしまうか分からない。この津波で生きたくても、生きられなかった人もたくさんいる。その中で、生き残れた僕たちは、亡くなった人たちの思いを、次世代に伝えていかなければならないと思う。

僕は将来、消防士になりたいと考えている。今回の震災でもそうだったみたいに「消防が来てくれて、よかった」と言われるような消防士になりたい。今回犠牲となった人々に伝えたい。「その死を絶対無駄にはしません。次に起こり得る未曾有の災害に備えていきます」と。

だから、この命を大切に生きていこうと思っている。

「やまだの作文」第40集

価値観がすっかり変わった

【織笠】

2

ケアマネジャー 稲川 壽子^{ひさこ}（65歳）

あの日は宮古の共同生活事業所で仕事でした。とてつもない地震で、矢巾町にある県の消防学校で震度7の体験をした時のようで、利用者さんたちとテーブルの下に頭を入れて揺れが収まるのを待ちました。そのうち、市の公報で大津波警報が発令されたと放送になったので、すぐに宮古小学校の体育館に避難しました。皆で17人、肩を寄せ合い、持っていたあめ玉を分け合って過ごしました。体育館は避難者が集まっていっぱいになりました。市内に大津波が来て「シートピアなあと」（観光施設）や宮古市役所に押し寄せたとの情報が入り、小学校のプールの近くまで津波が来ていました。落ち着いてくると、織笠の家に1人でいる母親のことが心配になりました。92歳の母はよたよたとしか歩けず、町の避難訓練の時でも織笠保育園まで上ったことがなく、坂の下に止まっていたので、きつと流されてしまったのではないかと考えると、申し訳ない気持ちで眠れませんでした。

翌日、自分の車は浸水し、エンジンがかからないので、職場の人に豊間根、関谷、白石と、山伝いに織笠まで送ってもらいました。龍泉寺近くの石切り場まで来ると、家という家は全て流されて道はありませんでした。屋根から屋根をよじ登り、一步一步進んで行くと、火事でパチパチ

と燃える音がして火の粉が飛んできたので、草木^{くさき}方面へ行こうとしたのですが、織笠川に架かる橋は全部流され、向こう岸に渡れないので、かばんを頭に乘せ、胸まで川に入って越えました。頭の上を自衛隊のヘリが旋回していました。

織笠保育園を目指して歩いていくと、保育園で同級生が私の名前を呼んでいました。「おめえ、生きていだったんだなあ。行方不明者の名簿に載っていたがなあ」と言われました。たくさんの人が流されたことが分かり、母のことを尋ねると「保育園にはいない」と告げられ、愕然^{がくぜん}としました。それでも「織笠小学校に避難しているかもしれない」と励まされ、泣きながらお墓^{いん}の引導^{どうば}を通じて小学校に行くと、何と母は隣近所の人たちと一緒にいたのです。抱き合って喜びました。それも、父の位牌とデイサービスの着替えを入れた袋を持っており、本当に不思議でした。人は火事場のばか力が出るものだと感じました。あの時、母が流されていたら、私は悔やみながらその後の人生を歩かなければなりませんでした。母は津波を3回も経験し、地震が大きかったからとにかく逃げようと思ったと話しました。あの日、仕事が休みで家にいたら物欲のある私のこと、あれもこれも持っていかうとして、きつと逃げ遅れたと思います。「津波でんどこ」といいますが、母も私に頼れないと思ったからこそ一人で逃げ切れたのだと思います。

地震の後は津波が来る。何も持たなくてもいいから、身一つでとにかく逃げるという事を後世に言い伝えていかなければならないと思います。

この津波ですっかり価値観が変わりました。土地や建物は生きている間の地球からの借り物。

物にあふれた生活が幸せだと思っていた不遜な心がよくないのです。物がなければ代用品を考え、工夫する力が出てきます。自分さえ良ければという気持ちもなくなりました。

生きていればこそ泣いたり笑ったりできます。物は失ったけれど、突然亡くなった人の気持ち（悔しさや無念さ）を大切に引き継ぎ、今日一日を大切に生きていこうと思っています。

「明日へ向かって」第2集

誰もが地獄に突き落とされた

〔織笠〕

3

昆野昭子（81歳）

忘れようにも忘れられない、あの日。悲惨な地獄を見た。

あの時、私は縫い物をしていた。何だか体がふらつくようで、グーグーだかゴーゴーという無気味な音を感じたと思ったら、大きな地震の揺れ。立とうにも立てず、揺れが収まるのを待って、手早く普段から準備してある非常用リュックと、風呂敷に包んだ毛布2人分を玄関に出した。外に出ていた主人も急ぎ足で帰って来た。

まず隣の一人暮らしのおばあさんを見に行く。親戚の車に乗り込んだのを確認して家に戻る

と、主人は壊れた物を片付けていた。私は「津波が来るのに片付けなくてもよござんす。早く薬と、荷物を持って学校に行くように」と伝える。着替えをし、食べ物を手提げ袋に詰めて両手に持ち、重いリュックを背負って外に出た。

主人は隣の母様^{かみ}2人と立ち話をしていた。私は大声で「早く逃げねーば、津波が来やんすが」と促し、急いで歩くと、3人も後をついてきた。70段の階段を上り、下を見ると3人は半分も来ていない。2人の母様は小さな手提げ一つ、主人はリュックと手に提げた荷物で、ふうふう言っている。毛布を受け取った時はやれやれと思った。

織笠小学校の校庭では生徒たちが先生と腰を下ろし、避難していた。私たちが来た時は10人余りと避難者は少なかった。しばらくして胸のドキドキも収まり、海の方を見ると、バリバリと大きな音を立てて家や建物が押し流されてくる。眼下では車や多くの人たちが「逃げろ、助けろ」の声も空しく、流されていくのが見える。あの恐ろしく荒れ狂った濁流は、ものすごい爆音と茶色の砂煙を高々と巻き上げ、一瞬にして全ての物をのみ込んだ。最愛の家族、友達、財産……。辺り一面、砂煙で何も見えなくなった。砂煙が収まった後は、ただ広々とした水面に残骸が浮き沈みしながら行ったり来たりするばかり。屋根の上で助けを求める人や、ずぶぬれになって支えられて来る人がいる。大声で泣きながらう、6人の男たちに運ばれてきたお母さんは、病院に行くこともできずに亡くなった。

あと五分早ければ助かったのに、あつという間に見えなくなった人たちのことを思うと、悲

しみと悔しきで日暮れの寒さが身に染みた。80代の自分たちのわびしさ。主人はよたよたと歩き、一時はどうなるかと不安だった。

空からはちらちらと雪が落ちてきた。体育館に入ると、電気、水、食べ物もなく、ストーブも少なく、空腹も感じて寒さが増すばかり。肩を寄せ合って寝るが眠れず、夜明けを待つ時間の長さ。夜が明けて下を見れば、海の色は黒々として、辺りには残骸が広がっている。海の底からは津波にのまれた人々の叫びが聞こえてくるようで、やり場のない空しさを感じる朝だった。

亡くなった人も、生き残った人も皆地獄に突き落とされたと思つた。「それぞれに思いを残して逝った人、それぞれの思いを背負って生きる人」。言葉では言い表せないほどの苦難に満ちた道なき道を、共にはい上がる努力をしなければならないと思つた。しばらくは何かと不自由だったが。自衛隊の皆様をはじめ関係機関の方々から多大なる支援物資を頂き、苦しみ涙しながらも後片付けに無我夢中だった。

慰問公演では、沖縄から来た「那覇太鼓」（創作エイサーのグループ）の演奏は力強く、亡くなった人たちにみんなの祈りを乗せて届けとばかりの音が、織笠小体育館にいた私たちの心の奥底まで響き渡り、大きな感動を与えてくれた。また、山田の龍昌寺の本堂いっぱいに響いた大正琴の音色も素晴らしく、亡き人々のご供養になったのではと思うと心が安らぎ、感涙した。

避難所を出て入居した仮設住宅は、こぢんまりと設備が整っていて、感謝、感謝の気持ちで手を合わせた。不自由さの中でお互いを思いやった避難所の暮らしを振り返ると、ただ涙が流れた。

こうして今は、皆様のお情に勇気付けられながら震災から2回目のお正月を迎えることができた。残り少ない人生を感謝の気持ちで忘れずに過ごし、悔いなく健康で美しく老いるよう努力したいと思う。

震災で声もなく逝きし多き人魂安かれと我等は祈る

避難所の人との交流生きがいと思い出語る心わびしき

震災に亡き父を思う

【織笠】

4

織笠婦人会長 沼崎敦子（67歳）

あの日、私は自宅の2階で書類を整理していました。突然の大きな揺れに驚き、思わずこたつに潜りました。揺れはそのうちに収まるかと思いましたが、激しくなるばかりでした。立てかけてあった姿見が倒れ、本箱の上にあったスチール製の書類ケースの引き出しが目の前に転んできました。テレビは突然電源が切れました。いつもならすぐテレビが地震情報、津波注意報を放送してくれるのに。

私はパニック状態になり、バッグ一つを持って階下に入りて、外出していた義姉（83歳）を心配して、ただただ、おろおろしていました。そのうち、義姉が無事帰宅して、2人で織笠保育園

に避難しました。保育園の坂を上る途中、T子さんにあいさつし、N子さんの車とすれ違いました。なぜあの時「早く逃げるべし！」と言わなかったのか。後々まで悔やまれてなりません。数分後に会えない方々になってしまおうとは。

私と義姉と長男は保育園も土砂崩れの危険があるというので、織笠コミュニティセンターに一晚避難しました。翌朝、妻の神地区の従姉の所に行き、仮設住宅に移るまでの5カ月間お世話になりました。その間、友人、知人をはじめ全国の方、世界中の方々に温かいご支援を頂き、心から感謝しております。とりわけ婦人会の方々からは何回にもわたり支援物資を頂き、感激しました。婦人会活動をしていて仲間がいてよかったと思いました。

私は今回の震災で、亡き父のことを強く思い起こしています。昭和23年9月16日、私の生まれた宮古市藤原は、アイオン台風により大水害に襲われました。死者89人も出ています。その中に私の母（当時29歳）と弟（生後5カ月）も含まれています。父からは「空襲で家を焼かれ再建した矢先だ」と聞いています。父は今度の震災で家族を失った方のように「毎日、藤原から津軽石方面まで妻子を探して歩いた」と言っていました。あまり思い出したいくないのか詳しくは話しませんでした。「幸治（弟）を背負わせねばよかった」と口にするだけでした。父の生存中、もっともつと当時の事を聞いておけばよかったと心から思っています。

現在このような状況を見るにつけ、当時の父の無念さ、悲しさ、悔しさがやっと分かった気がします。30代という若さではあったものの、今のように行政からの援助とか義援金とかはあった

のでしょうか。磯^{そけい}鶏石崎の復興住宅から、藤原の自宅を再建した時は50歳近くになっていて、実に13年もかかりました。妻子を失い、幼い私をはじめ残された家族と生活するのに必死だったのでしょうか。

終わりに今回被災し命を失った方々に哀悼の意を捧げるとともに、亡き父へも祈りを込めて合掌したいと思います。

合掌

「明日へ向かって」第2集

変わり果てた町に涙

【織笠】

5

中村あづ子（54歳）

あの日、私は電力関係の仕事で陸前高田の山中にいました。

男性作業員の「おーい、地震だぞー！」の声と同時に大地震が襲い、立っていることができませんでした。生まれて初めて経験する揺れに、どうすることもできず、木の切り株にしがみつきました。収まる気配もなく揺れは続きました。班長の指示に従い、道具を片付けて車に乗って走り出した時、30分は過ぎていました。運転手の判断で、海岸の国道は通れないだろうから、内陸

へ向かい、山道を走るようになりました。車内のラジオで時々「壊滅的被害」の報道を聞きながら、「私たちの山田はどうなっているの？」と不安になってきて、車は進んでいるけれど「一秒でも早く家に着きたい」というもどかしさでいっぱいでした。

ふと、中学生の息子が学校を休んで1人で家にいたことを思い出し、「無事でいるのか？ 家はどうなっているのか？」と不安が大きくなりました。辺りが少しずつ暗くなるにつれて、雪の量も増え、本当にこの道でよかったのか心配になりましたが、もうあとには引き返すことができません。豊間根の田名部^{たなぶ}から関口に向かって走っている時、暗闇の空が赤く見え、山田が燃えていると直感、車内の誰もがそう思いました。

3時間かけてわが家に帰ってきました。真っ暗でしたが、息子は隣の実家に駆け込んでいて無事でした。夫と実家の父と一緒に山仕事をしていて、私より自宅に近い鶴^{うのすまい}住居（釜石市）の山で働いていたにもかかわらず帰りが遅く、どうしてなのか分かりませんでした。2時間遅れて帰って来ました。誰もが連絡の取りようがありませんでした。翌日になって、息子夫婦や孫、親戚などを捜すため、山田高校の坂を国道側に向かって下がった時、目に見えたのは変わり果てた町の姿で、涙が止まりませんでした。時間がたつにつれて息子、嫁さん、孫、嫁さんのお母さんにも会えて喜びました。

あれから1年。あの時と同じ寒い雪が降りました。余震もまだありますが、この東日本大震災を決して忘れることなく、後世に伝えなければと誰もが思っているでしょう。助け合い、誰かの

ために一生懸命になることも経験しました。これからは誰かのために一生懸命になりたいと思っています。

「明日へ向かって」第1集

意識が薄れていくのを感じた

〔織笠〕

6

蛇石福子（57歳）

私にとって、あの津波は一生忘れることのできない、恐ろしく、つらい出来事でした。

高台に上がった時、波に飛ばされて近くの家の中に4人が流されました。崩れてきたがれきに挟まれ、浮いていた冷蔵庫に押しつぶされそうになりながら、意識が薄れていくのを感じ、「このまま死んでいくのだ……」と迫り来る死の恐怖に耐えていました。私の横では、本家のおばあさんががれきの下になって亡くなっていました。

助けてあげることができなかった悔しさ……。何が起ったのか分からず、頭の中はパニック状態でした。そんないろいろな事を思い出すとつらく、涙が出てきます。私は肋骨が3本折れ、左の腿に杭が突き刺さり、宮古病院に運ばれて手術を受けました。でも、大変な思いをしたのは

自分だけではない、ほかの人たちも私以上につらい毎日を送っているのですよね。

自分は死なずに助かったし、幸い家族も皆無事だった。それが救いだったと自分に言い聞かせながら毎日を過ごしています。これから生活していくのに大変な事をいっぱい抱えていかなければなりません、少しずつ強い気持ちになって頑張っていきたいと思います。

婦人会のいろいろな方から多数の物資を頂き、ありがたく思っています。全部流されて何もなの中で本当に助かりました。会長さんをはじめ、役員の方々にはご苦勞を掛けましたが、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

「明日へ向かって」第1集

虫の知らせと夫の声

〔織笠〕

7

八木良子（65歳）

あれからもう2年半が過ぎた。私はあのころ、膝が痛くて大槌の治療院に通っていた。あの日は虫の知らせのようなものがあり、どうしても治療院に行きたくなって、夫に「行け、行け」と言われたが動かなかった。

午後、すごい地震が来た。私は92歳の義母と2人で家にいたが、2人とも足が悪く、歩くのも億劫おっくうだったので「おばあさん、2人で2階にいきましょう。津波は2階にまでは来ないだろうか

船越

[Funakoshi]

4

chapter 4

山田湾(写真奥)と船越湾(手前)の双方から津波が押し寄せてぶつかった船越地区。
船越湾側の防潮堤が激しく破壊されている
(3月28日午前10時19分撮影)



ら」と言った。宮古で用事を済ませて帰ってきた夫に「何をしている、早く車に乗れ!」と言われ、着の身着のまま車で織笠小学校の校庭に避難した。義母を車に乗せたまま私は外に出た。織笠小の子供たちは下校時刻で外に出た直後の地震だったので、先生の指示で学校に戻り、皆が無事だった。「もし、あの時、あと10分下校が早かったら」と思うとぞっとする。

余震もあり、校舎の中は危険なので生徒たちは校庭に集まった。避難から30分過ぎたころだろうか。フェンスの所で海を見ていた人たちが、ワーとかキャーとかいう声を上げた。津波が来たのだ。その声を聞いた子供たちのうち何人かは、恐ろしさのあまり泣いていた。

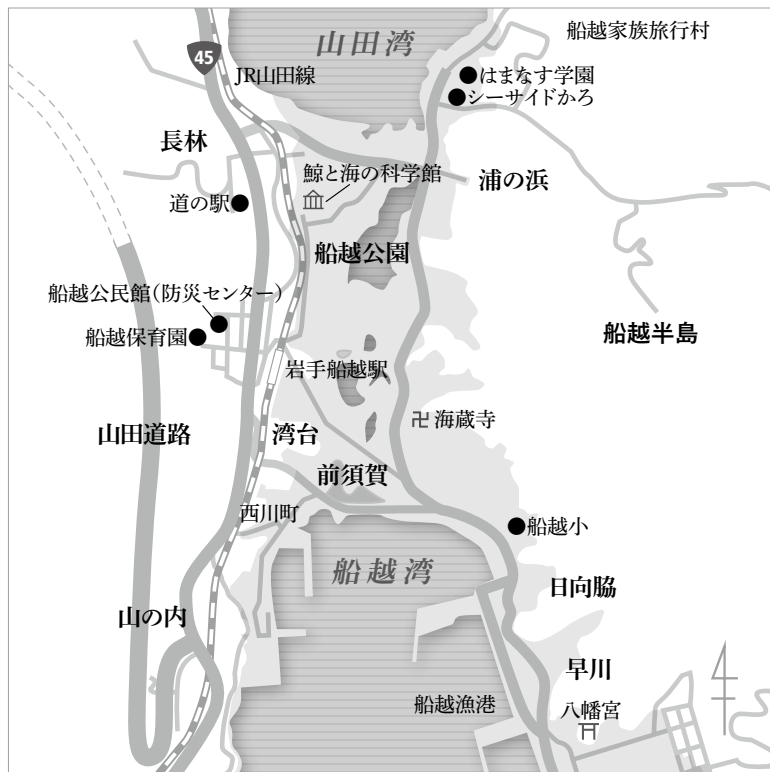
すごい波が階段の下まで来ている。ここも危ないと、学校裏の階段を上り、織笠コミュニティセンターまで避難した。コミセンでは皆が外に集まっていた。落ち着いたころ、寒くなってきて外も暗くなった。「津波は、もう大丈夫だろう」と子供たちと一緒に学校へ戻った。体育館は広くて寒いので、各教室を片付けて、それぞれ落ち着いた。私は孫と一緒に教室にいて、届けられたおにぎりを皆で食べた。ありがたかった。その夜は寒さで眠れなかった。

あのころを思い出すと涙が出る。あの虫の知らせと、夫が私の命を救ってくれた。いつもテレビで被災した人の姿を見ていたが、まさか自分たちがその当事者になるとは思ってもいなかった。今は少し不自由な事はあるが、落ち着いた生活を送っている。一步一步焦らずに進んでいこうと思っている。

「明日へ向かって」第2集

船越

船越半島の付け根に当たり、北側が山田湾、南側が船越湾に面した船越地区。南北を走る国道45号を挟んで山側の高地と海側の低地に分かれ、海側の地域では二つの湾からの津波がぶつかり合って威力を増し、甚大な被害を出した。浦の浜にあった介護老人保健施設「シーサイドかる」に津波が直撃、入所者74人と職員14人が犠牲になった。海沿いの古刹、曹洞宗海蔵寺も丸ごと流され、津波は避難場所に指定されていた船越小学校の1階天井部分(海拔18メートル)まで達した。いったん校庭に集まった児童ら約160人は海の異変に気付いた校務員の機転で裏山に逃げて助かったが、昇降口付近に避難した近隣住民の中には津波にのまれた人もいた。同小に近い日向脇^{ひなたのわき}の集落も大きな被害を受けた。



地図内の■は津波の浸水範囲
※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

死者・行方不明者	86人
震災前の人口	2,178人
全半壊家屋	172戸
被災家屋の割合	26%

助けられた命を生きる

【船越】

1

山田中学校1年「当時・船越小学校4年」富山浩恵

地震が発生した時、私は教室にいました。4年生で、高学年ではあったのですが、何がなんだから分かりませんでした。こんなに大きく、長い地震は初めてで、もしかしたら地震じゃないのかもしれないと思ったほどでした。

教室から外に出た後、校庭に避難しました。割れそうな勢いで窓ガラスが揺れていました。校庭に避難して少しすると、サイレンが鳴り、大津波警報が発令されました。校務員の方が走ってきて、その指示でもっと高い避難場所へ行きました。後で分かったのですが、校務員さんは校庭では危ないことを校長先生に伝えるために走ってくれたそうです。

避難場所に着いて間もなく誰かが大声で言いました。「津波が来たぞ。山へ登れっ!」。びっくりしましたが、がむしゃらに登りました。少し平らになっている所でみんな座っていました。しばらく話をしたり笑ったりしていました。その時は何が起きたのかやっぱり分かっていませんでしたが、暗くなるにつれて、泣く人も出てきました。下山というほどの距離でもありませんが、いったん下りました。すると、火がたかれていて、そこで温まることにしました。雪が降ってきたので近くの家に入れてもらいました。余震が続き、長い夜に感じました。

朝、起きると消防団の人たちが来て、おにぎりとおペットボトルの水を配布してくれました。私たちの学校は船越半島にあります。船越半島は津波により、一時孤立しました。おにぎりを食べ終わってしばらくすると、船越保育園に避難することになりました。そちらへ向かうためには、浸水によりぬかるんだ所を行かなければなりませんでしたが、消防の人がある程度歩きやすくしてくれていたのを助かりました。津波警報が出たままで大変でしたが、無事に着き、その後家に行きました。家は高台にあるのですが、しばらくは電気も水も使えなくて苦労しました。

後から思えば、多くの人に本当に助けられたと思います。校務員の人がいなければ生きていなかったかもしれないし、津波が来たと叫ぶ人もいなかったら逃げなかったかもしれません。家に入れてもらえなければ、一夜を越すことができなかったと思います。消防の人や先生方、いろいろな方々に助けられ、支えられてこうして生きていられます。感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。

山田中学校1年「当時・船越小学校4年」芳賀優香

私たちがあんな経験をするなんて、思ってもいませんでした。

あの日、私は「行ってきました」と言って、いつも通り学校に向かいました。まさか家にもう二度と帰ることができなくなるなんて思ってもいませんでした。学校に着いてふだん通りの学校生活を過ごしていました。

午後2時46分。大きな地鳴りと共に大きな地震が発生しました。今まで経験したことのないような揺れでした。みんなが机に隠れ、泣いている子もいました。そんな中、先生は2階にあるパソコンルームに、他の子たちの無事を確認しに行きました。何分かつて帰ってくると、みんなでベランダから外に出ました。その後、津波警報が発令されたという放送が流れ、安全な校庭に移動しました。校庭に行くと、すでに他の学年は避難していました。ですが、1年生の何人かはもう下校していて、どこにいますのか分かりませんでした。

何分かつと、親が迎えに来たり、地域の方々が集まって来たりしました。とても不安で、どうしたら良いのか分かりませんでした。「みんな同じ不安な気持ちなんだ。大丈夫。大丈夫」。そう自分に言い聞かせて次の指示を待っていました。

その後、田代修三さんという昔から地元に住んでいる校務員の方の指示を受けて第2避難所に避難しました。5分位経過したでしょうか。背後から「ゴーツ」という音と共に大きな津波が押し寄せました。皆叫びながら最終避難所に駆け上がりました。何とか助かりましたが、この時、この瞬間からつらい生活が始まりました。

午後5時、津波が引いたということで少し下の竹林に下りていきました。とても残酷な景色が広がっていました。電柱は倒れ、船が転がり、木が散乱していました。皆ぼうぜんと立ちつくしていました。すこしたつと、大人の方たちがたき火をしてくれて、みんなで温まりました。そこに、けがをした人が担架で運ばれてきて、津波や地震で多くの人がひどい目にあつたことを知りました。

午後7時。近くの家に入り、暖を取りました。5人で一つくらいの毛布を借り、不安な夜を過ごしました。

次の朝起きると、とても悲惨な景色に自分の目を疑いました。堤防に乗っている船、散乱している木々、転がっている車、倒れている電柱。昨日の夜よりも無残な景色で胸が痛みました。おにぎりや飲み物の支援が届き、みんなで食べました。午前8時ごろ。船越保育園に移動しました。移動するといとこがいて、安心しました。私の家族は皆助かり、再会することができました。

あんな残酷な光景を見た私たちだからこそ、できる事があります。それは、この恐ろしい体験を後世に伝えていくことです。まず、私たちから語りかけなければなりません。この「自ら進ん

で」を暮らしにも発展させていき、新しい山田をつくりあげていきたいと思います。

誰かを助けられる人に

【船越】

3

山田中学校2年「当時・船越小学校5年」大畑優美^{ゆみ}南^{みな}

地震が起きたのは確か金曜日の5時間目だった。体験したことのない大きな地震と共に「津波」という言葉を聞いた。気付いたら山を登っていた。誰もが必死に登った。上へ、上へと、とにかく登った。そしてずっと時間が過ぎるのを待った。私たちはまだ想像を膨らますことしかなかった。逃げながらたった一瞬見た信じられない景色が脳裏に焼きついた。

空が暗くなってきた、何人かの先生たちが初めに下山した。しばらくして、私たちも続いた。下山後初めて、津波という災害の恐ろしさを知った。思い出すのは家族のこと。私たち人間はなんて無力なんだろう。ただこの現実を受け入れるしかないんだからと心から思った。下山してすぐ、火が見えた。大人たちががれきで火を燃やしていた。

その人たちは、生徒を優先的に火の前に立たせてくれた。私は少し安心した。雪が降ってきた。この日の雪は、みんなの悲しみがまるで空に届いたようだった。私たちは近くの民家にお邪魔して今日の話を話しながら眠った。長い1日がやっと終わった。

朝が来て、消防団の方々がおにぎりや飲み物を持ってきてくれた。食べ終わって少し休み、船越保育園に行くことになった。保育園への道はぼうぜんとする光景が続いた。私の知っている所とはまるで違っていた。途中からバスに乗って保育園に向かった。

保育園に着いて少しすると、父が迎えに来てくれた。父と弟と私は歩いて家へと向かった。家には母がいて、家族の無事を確認できた。それから水をくみに行ったりして、大変だった。でも、ガスが通ったので米を炊くこともできて少し楽になった。配給にも並んだ。自衛隊の人たちにもいろいろ助けてもらった。夜は静かだった。父は毎日ラジオを聞き、母は防災センターなどに知り合いの情報をつかみに行った。田の浜に住むおじいちゃんとおばあちゃんが家へ来た。毎日色んな話をした。そんな毎日が続いて、電気が通った。生活が充実しつつあった。陸中海岸青少年の家（研修施設）の仮校舎で学校が始まるころには地域が少しだけ元気になった。

あれから、約3年がたった。今、私がこの真実を作文につづれるのは、あの時の私たちを支え、助けてくれた多くの恩人たちのおかげだと思う。多くが名も知らない人々だけれど、私はこの人たちに感謝でいっぱいだ。あの時の恩は、いつか返したいと思う。私自身もこの人たちのように、誰かを助けられる人間になりたい。もし将来、同じようなことが起こったとしたら、私は、あの時の犠牲を無駄にせず、それぞれが命を守る術を身につけるべきだと思う。

みんなが一つになれた

【船越】 4

山田中学校2年「当時・船越小学校5年」三上涼太

あの日、僕らはまだ小学生だった。何が起きたか分からず、ただ一心不乱に逃げた。大きな波と共に家や車、何から何まで流されていた。すぐに分かった。

「津波だ!」。少し前に僕らは近くのおじいさんから津波について話してもらっていた。その時はただの大きな波とだけ思っていた自分の考えが甘すぎた。その後、たくさんの人々が亡くなった。家族を失ったりして悲しい目にあったことが分かった。

夜になり、僕たちは火に当たっていた。でも僕たちが温かい思いをしている時も、ほかの人たちは寒い思いをしているんだと思うと、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。その後も何人も何人も津波をかぶってしまった人や、かろうじて生き延びた人たちが来て、僕は切ない気持ちになった。

月日が流れてもみんなの気持ちは変わらないと思う。あのような出来事は二度と起こってはいけない。でも、この震災を通して世界の人々と一つになれた。助け合う心、つながる絆、日本だけではなくみんなが一つになれたことを大切に思う。だが、震災の最中に犯罪や盗み、争いなどが起きていた。なぜみんなで頑張っているのにくだらない争いをするのか、今からでは遅いかも

しれないが、皆さんにあやまってほしい。

だが、一番考えていたことは小学校だ。学校もこわれてしまい、震災後はなかなか行けなかった。でもある日、近くの保育園に皆が集まることになった。たまらなくうれしかった。週1回だったが、本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。陸中海岸青少年の家の仮校舎で学校生活を送り、卒業式を行うことができたのも、近所の人たちや施設を貸してくれた方々の支えがあったからだ。本当にありがとうと言いたい。

3年がたとうとしている今でも僕の気持ちは変わらない。震災で学んだ事を絶対に忘れずに、世界の人々との絆を絶やすことなく前に進んでいく。それが今の山田には一番大切なことだと思う。

判断力の大切さ学ぶ

【船越】 5

山田中学校2年「当時・船越小学校5年」山崎魁斗

あの日、僕は小学校の図工室にいた。午後2時46分、大きな長い地震と共に、ドーンと、今までに体験したことのない大きな地震がきた。僕たちは、急いで机の下に隠れた。怖かった。長い地震が収まり、全校で校庭に避難した。そして、校庭にはあぶないと先生たちが判断し

て、学校の裏にある山に登ることにした。山に向かって歩いていく途中、バキバキバキと波で倒される木の音がした。後ろを振り返ると黒っぽい、大きな、大きな津波が迫ってきた。みんなで必死に山に登った。山のかなり上まで登った所に少し広場があってそこで待機していた。

しばらくすると雪が降ってきた。寒かった。あたりもすっかり暗くなり、下山することになった。下山すると、小学校の裏にあった家の人たちががれきを燃やして温まっていた。そこに僕たちも交じって温まった。するとそこに、津波で流されて、けがをして苦しそうにしている人が来た。その人を見たら家族の安否が急に心配になった。僕たちは4軒くらいあった家に入れてもらえることになった。家に入ったら暖かった。その日の夜、僕は、家族や知り合いのことが心配で全然眠れなかった。

次の日、高台にある保育園まで移動することになった。歩きながら、津波によって破壊された町を見て、どこがどこだか分からなかったし、何が起こったかもこの時はまだ理解できなかった。保育園に着いたら、じいちゃんが迎えに来てくれた。やっと家に帰れた。

僕はこうやって家に帰れたけど、もう少し判断が遅れていたなら、学校生活を今のように楽しく送れていなかった。だから、判断力はとても大事だと学んだ。次にこのようなことがあったら素早く避難すべきだと思うし、自分もそうしたい。

3・11を経て原子力を考える

〔船越〕

6

あの日から原子力への考え方が一変した。

午後2時46分の地震。今までに体験したことのない大きな揺れ。大きく白波を立てて押し寄せた津波。ただでさえ東北の人は苦しんでいた。その中で、福島第1原発の事故が発生した。なぜこんなことになってしまったのだろうか。

僕はそれまで、原子力についてあまり考えたことがなかった。原子力発電は、少ない原料で大きな電力を発電でき、しかも地球温暖化で問題になっているCO₂を排出しないクリーンな発電方法。ただ、発電に用いられた核燃料の処理は地中奥深くに埋めるしかない。でも、僕は、安全で空気を汚さないならとてもいい方法だと思っていた。

そして3月11日。僕の考えは全く逆の方向に傾き始めた。今まで安全だと思っていた原子力発電が、人間に牙をむいた。誰も想像していなかった。想定外の津波の被害を受け、冷却不能になった炉心はどんどん熱を持ち、冷却用の水をどんどん蒸発させていく。放射性物質を含む汚染された水や蒸気が空へ、海へ放出された。目に見えない放射能の恐怖が人々を襲い始めた。

毎日休むことなく育てた牛が汚染される。土を作り、水を与え、肥料をやり、草を取って育て

山田中学校2年 山崎昂太^{こうた}

た野菜が汚染される。海が、魚が汚染される。牛の、魚の、植物の、そして人間の命が奪われる。なぜこんなことになってしまったのだろうか。

これは誰かのせいなのか。いや、これは便利な生活に慣れ過ぎ、便利な生活ばかりを追いかけてきた私たちが悪いのではないだろうか。「安全」も「科学技術」も「人間」も完璧ではない。世の中に「絶対大丈夫」はないのだ。それも今回の震災が教えてくれたことだ。今、誰のせいと話し合う時間も必要もない。

今この瞬間も、命がけで原子力を何とかしようとしている人がいる。放射能の恐怖から人々を守ろうとしている人がいる。今この瞬間も、もう二度と戻れないかもしれない故郷を思い続けている人がいる。

僕も家を津波に流された。思い出の詰まった家、安心して暮らせる場所を奪われた悲しみは深い。でも、仲間のいる町にすることができ。福島の人たちは、帰ることすらできない。

この現状を生んだのは、僕たちだ。便利な生活のありがたさに気づかず、資源には限りがあることを知りつつ、便利すぎる生活を求め続けた僕たちだ。震災は多くのものを奪ったが、たくさんんことを教えてくれた。蛇口をひねれば水が出る、スイッチを押せば電気が付く、暖かい部屋で家族と過ごす、そんな当たり前の生活は、決して当たり前のことではなく、多くの人たちに支えられていたこと。原子力の安全を守るとは命がけなのだということを。

今、原子力に代わる自然エネルギーに切り替えようとか、原子力発電をやめようと思う人が

増えてきた。僕は思う。今、原子力発電をやめてしまったら僕たちの生活はどうなってしまうの

だろうと。ちょっとやそつとの節電では甘いと思う。僕たちは今、自分たちの生活をふり返り、本当に必要なものは何なのか、これからの生活に残すべきものは何なのか、真剣に考えなければならぬのではないのか。原子力を廃止するのではなく、徐々に新しいエネルギーに切り替え、自然と共存しながら安心して生活できる未来を創っていかなければならないのではないのか。

3月11日のあの日から、もう6カ月。あの日のこと、あの時の事を忘れかけている人もいるかもしれない。僕にとって、原子力を取り巻く人たちにとって、あの日は始まりだった。今も命を削って僕たちの安全を守ってくれている人たちがいる。素直に心から「ありがとうございます」と伝えたい。3月11日から学んだこと、それはしっかりと自分の目で見て、自分で考えること。僕たちは今、一つになり、行動しなければならぬ。

「やまだの作文」第40集

「正常化の偏見」から脱する

【船越】

7

奥州市立梁川小学校長「当時・船越小学校長」佐々木道雄（56歳）

あの日、校長室にいた私は、緊急地震速報を受信するとすぐ、職員室のテレビのスイッチを入

れました。その直後、地震が起こり、間もなくテレビの画面も消えてしまいました。停電でした。テレビが倒れそうになるのを押さえながら、地震が収まるのを待ちました。校内放送が使えなくなったので、副校長と養護教諭に、各教室に行き、避難所とされていた校庭に避難するように伝えてもらうことにしました。その後私は、管理棟の西側のつなぎ目の部分の状態を確かめ、上着を着て靴を履き替え、校庭に行きました。

この日、全校児童174人のうち6人が欠席・早退。1年生は帰りの会が終わり、下校していた児童が9人。159人が校内で地震を経験したことになります。

後から調べてみると、校庭にいた間に8回の地震がありました。その間、海の様子を見に行ったりしていました。でも、それほどの変化を見つけることができませんでした。地震のたびに怖がる子供たちを励ましていました。

そうしているうちに、校務員の田代修三さんから、「もっと高い所に避難しましょう」という進言をもらったのです。校庭に避難したのが午後2時50分過ぎ。裏山に避難を開始したのが3時20分ごろ。約30分間、校庭にいたのです。群馬大の片田敏孝教授の分析による心理、「逃げない」という意思決定をしたのではなく、逃げるという意思決定ができないで」「ここは大丈夫だ」と思い込む「正常化の偏見」のため、時だけが過ぎていったのです。田代さんの一言で「よし避難しよう」という意思決定ができました。先生方もすぐ私の指示に従ってくれました。整然とした避難でした。津波を見てからの避難ではなかったので、落ち着いた行動となったのです。この

時点で、23人の児童を家の方に引き渡していたので、児童は136人でした。

一列のまま校庭を離れ、後藤自工所有の空き地を目指している途中で、沢が上がってくる黒い波を見たのです。

後日、めちゃめちゃになった校長室の机の上に、どこからか掘り出された時計が置いてありました。時計の針は午後3時27分ごろを指していました。「生かされて」という言葉が実感として重みをもって体の中に入りました。片田教授の言葉は、理性的に考えればその通りですが、私が思っていることは、やはり荒神様（荒神社）が子供たちや私たちを救ってくださったのだな、ということですね。なぜなら、避難した私たちだけでなく、下校していた1年生も、その安否を確かめに行った教職員も無事だったからです。ただ、パーフェクトとまではいきませんでした。だからこそ、「生かされて」という言葉の重みがあると言えるのかもしれない。

あの後、荒神様の所までは何回か行きました。鳥居のあった右側の坂を上がり、外海が見えるいつもの場所まで行くことができました。でも、磯伝いに、黄色のペンキが塗ってあった小さな灯台の見える場所には、一度行って足がすくんでしまいました。胸が締めつけられるような感じがしたのです。残念ながらその後は、まだトライしていません。

「忘れない・そして前へ」

船越婦人会長 後藤夕香里（58歳）

早いもので東日本大震災から1年半がたち、以前の暮らしと変わった事といえば、家族が3人増えたことでしょうか。

震災当日私たちは、娘の結婚式で内陸の奥州市にある式場にいました。今これから挙式が始まるという時の地震。立つことも座することもできないくらい揺れ、今まで経験したことのない状況に頭の中が真っ白になり、自分が何をしていたのか分からない時間がただ過ぎていきました。少し落ち着きを取り戻したところに目に入ってきたのが、仙台空港を襲う津波の映像でした。

「あー、私たちの工場ももうないのかな」と頭をよぎり、とても不安と焦りでいっぱいでした。でも、隣で泣いている娘を見ると、その思いを顔に出すこともできず、とても苦しかったです。

結婚式は式場の配慮で式だけ挙げ、電気もないビジネスホテルで一晩を過ごしました。いつもなら3時間弱のところを12時間かけて帰って来た山田は、火の海でした。その後、三陸道を織笠の龍泉寺から歩いて、船越に着いて真っ先に目に映ったのは、何もなくなって湖のようになっていた自動車工場の跡地でした。

一時は廃業を考えた夫でしたが、地域の人たちの励ましの声で車の事務処理から工場を再開し、今では仮設ながら一般修理・車検修理もできるようになりました。

夫は以前より集中力がなく、人の話を聞いても頭に入っていない状態が震災当時と変わりなく今も続いているのがしばしば見えます。そんな中でも、日々仕事に励んでいる姿に私はただただ敬服です。

その夫の提案は、「後藤家の避難場所は船越防災センターにしよう。いつどこで震災に遭うかわからないので、自分の命は自分で守る『てんでんこ』で。生きていれば時間がかかっても必ず会えるから、焦らず落ち着いてから防災センターに集合するように」ということでした。ごく当たり前のことですが、常に頭の隅に入れておくのが私たち被災者の教訓かなと思います。

私は津波には実際遭っていないし、見ていません。でも、現実に仕事場がなくなり、住んでいる家の1階が壊れ、物がなくなっただけからは、海が怖い、地震が怖い状態が今も続いています。これがいつまで続くのかも不安です。こうして生活できているのは、震災当時から私たちのために一生懸命お世話していただき、見守ってくださった地域の人たちのおかげです。また、世界や全国の人々からお見舞い、義援金や物資を頂き、ありがたうございました。

私たちは、東日本大震災から学んだ地震、津波の恐ろしさ、人を大切に、敬うということを子供や孫に伝えていかなければならないと思います。

命ある感謝と生きるつらさと

【船越】

9

船越婦人会副会長 三浦初子（63歳）

あの日の事、あの時の事、忘れられない記憶と忘れてしまいたい記憶をたどると、ただ恐怖心だけが思い起こされます。

昼食を済ませたころ、今まで感じたことのない異常な揺れを感じて身構えた時には、すでに電気も携帯電話も途切れていました。茶の間に1人でいる母のもとへ駆けつけ、早く安全な所へ連れて行かなければと焦っても、立っているのがやつとの揺れではどうにもならず、しばらくは2人で手を握り合い、ぼうぜんとするばかりでした。

地震の合間を見計らい、夜には帰って来られると信じて、着の身着のまま高台にある友の家に向かいました。数度の地震におびえながら頭をよぎるのは、八戸市から国道45号をわが家目指して自動車を走らせているだろう娘の姿でした。「今、どの辺りだろうか。津波に遭ったら自動車ごと流されてしまうのだろうか」など、悪い考えばかりで頭がいっぱいでした。

何度目かの揺れの後で「津波だ」の叫び声に海の方を見た時、波の大きさに驚きました。その後にもまた押し寄せた津波は、想像をはるかに超えた巨大なものでした。鉄筋2階建ての工場をのみ込み、その屋根よりはるかに高く大きな波が、船もろともものすごい速さで迫ってくるのが見

えた時は、この場にいることさえ危険に思えました。正に恐怖の絶頂でした。さらに高台の避難所を目指して移動し、避難して来た大勢の人たちと落ち着かない一夜を過ごして、翌朝、目の当たりにした惨状は信じがたい光景でした。

母と自分はここに無事でいるけれど、「娘は？ 息子は何？」と2人の子供たちの安否を憂えながら、連絡の取れないもどかしさの中、婦人会はじめ各団体の炊き出し等の作業を手伝って心を静め、3日後の夜に、娘の無事な姿と対面した時の喜びと安堵感は生涯忘れられないと思います。命があったことへの感謝と、生きることのつらさを味わいながら過ごしたこの1年半でした。

「明日へ向かって」第1集

人の温かさに触れた

【船越】

10

大槻悦子（63歳）

「夫が帰って来ないんです」。私はTBSテレビ報道局の森岡梢さんとカメラマンに涙ながらに伝えた。この言葉が様々な出会いの始まりであった。

大槌町吉里吉里で用事を終えようとした時に地震が起こった。友達と急いで帰宅し、津波が来る前に何とか家に着くことができた。友達も無事に山田の長崎地区まで帰った。夫は長崎の食料

品店「フレンド」で働いていた。娘は大学卒業で、3月10日に卒業式の打ち合わせのため盛岡へ行っていた。地震後すぐに電話がなくなり、声を聞くことができた。八戸の自衛隊に勤めている息子とは連絡が付かなかったが、娘が「母は無事だが父の行方が分からない」と伝えてくれた。

家から大事な物を持ち、船越保育園へ避難。船越湾漁協の建物が黒い波にのまれていくさまをこの目で見ていた。何が起きているのか、何も考えることができなかった。湾台に住んでいる叔母も避難してきたが、家は津波にのまれたと涙ばかりであった。

大沢、盛岡、東京に住む妹たちや親戚などに連絡したくてもできないもどかしさ、頼れる夫、家族がいない寂しさで胸がいっぱいだった。「夫はもしかしたら配達中に……」と嫌な考えもしてしまっただが、どうか生きていてほしいと思いを強く持った。船越公民館に行き、近所の人たちと不安な夜を共にした。電気の明かりも食料も何もない状況でこれからどうしたらよいのか、生きていけるのか、様々な思いが交錯した。

そんな中、釜石の中村家（料理店）を取材後、宮古へ向かう途中に山の内では被災したTBSの森岡さん、秋田でカメラマンをしている伊藤優さんなどが公民館へ来た。「盛岡へ映像を届けるので現状を伝えたい。話せることがあれば何でも話してください」と言われ、夫が帰って来ないこと、食べ物がいないことなどを訴えた。その後、彼女らは何度も山田町を訪れ、映像を記録してくれた。

翌朝から婦人会の仲間と炊き出しを始めた。皆いろいろな思いを胸に、一つ一つ心を込めておにぎりを握った。2日目のこと。夫が歩いて探しに来てくれた。夫は自衛隊の官舎（山田町飯岡）近くに車を止め、避難していたそうだ。お互いに「死んだかもしれない」と思っていたようだ。夫に会えたうれしさでいっぱいであった。言葉にはできなかったが、「生きていてくれてありがとう」と心から思った。

3日目、娘も盛岡から何とか帰宅、やっと家族3人がそろい、気持ちが少し落ち着いていた。娘の話だと、涙を流しながら「食料がない、どうしたらいいのか」と訴えている私の姿がネットにアップされていたという。全国の方々が見ていてくれた。カメラマンたちに感謝した。

家が無事だったので、3日目から家族と叔母の4人で生活した。日中は家族3人で公民館へ行き、私は炊き出し、夫は物資の仕分けや会議に参加し、娘は窓口での対応や名簿作成などを行った。家族も家も無事だった分、私たちができる事をやらせてもらった。船越公民館にはたくさんの人が毎日出入りしていて、おにぎりの配給がいつなくなるか分からなかった。誰もが不安で目の前が見えない日々。当時の状況には、絶望という言葉が当てはまっていたように思う。

そんな中、全国から支援物資が届き、東北を応援する新聞記事も掲載されていた。東京に住む妹の知人が秋田の商工会議所において、大型トラック2台に物資を満載して届けてくれた。後日、秋田の皆さんにはカレーライスの炊き出しもしていただいた。人の温かさに触れることができた。そのほかにも多くの方々に支援していただいた。このことを一生忘れてはいけな

自衛隊の支援活動も忘れてはいけない。国の仕事とはいえ、救助、捜索、復旧作業、心も体も温めてくれたお風呂の設置と、助けていただいた事は数多くある。仕事で山田町に来ているのに自衛隊員の息子とは震災後2カ月会えなかった。息子は陸前高田など被災地の至る所を回っていたという。そんな息子の仕事に誇りを持ち、感謝した。

TBSの森岡さんは「被災地取材を通して、何か自分にできることはないかとの思いが強くなっていった」と話してくれた。彼女は、鎮魂の思いを込めた花火を被災地で打ち上げたいという東京の若者たちが立ち上げた「LIGHT UP NIPPON」という団体の一員になっていた。

2012年8月11日、変わり果てた風景の山田町で、希望の光と多くの笑顔が山田湾に咲いた。娘も山田のために役立ちたいと、花火の打ち上げでは商工会青年部と一緒に運営を手伝った。震災を機に、たくさんの方と出会うことができた。つらさの方が多いが、決してそればかりではなかった。

震災から2年が過ぎ、これまでの生活、当たり前の事が当たり前ではなかったことに気付かされ、一日一日を大切に過ごさなければと感じている。生かしてもらった私たち家族は地域の人と交流し、できる事を少しずつやっていきたい。何事も感謝しながら笑顔で過ごそうと話し合っている。

「明日へ向かって」第2集

夢なら覚めてほしい

【船越】

11

黒沼五百子^{いおこ}（50歳）

今までに経験した事がない巨大地震と大津波が沿岸を襲いました。わが家は海のすぐそばにあります。海を見ていた父が「津波が来る」と言ったので、高い所へ避難しました。

津波にのみ込まれながら流されていく家や船を、ただぼうぜんと眺めていることしかできませんでした。あの日を境に私たちの生活は一変しました。ライフラインも寸断され、仕事に行っていた夫と連絡を取ることもできませんでした。でも、どこかに避難して無事だと思っていたのが、何日たっても夫は帰って来ませんでした。けがをして動けないのか、記憶でも失っているのか、色々な事を考えながら避難所を捜して歩きました。

絶望の中、日数だけが過ぎていき、遺体安置所に足を運ぶようになりました。毎日、毎日、何か所も捜しました。亡骸^{なきがら}がずっと並んでいる所を一体ずつ見て確認しました。

見つからないというつらさと同時に、ホッとしている自分がありました。亡骸に会わないということは、まだ生きているかもしれないという希望が持てたからです。でも、亡骸を確認した時は、私たちの希望は打ち碎かれ、夫の死を認めなければなりません。皆が悲しみました。あれから、私たちは夫がいない悲しみを背負って生きています。夫と生活してきた日々がどん

なに幸せだったか、震災後あらためて感じました。

2年3カ月がたつというのに、夫の話が出たり思い出したりするとすぐに涙が出ます。「行ってきました」のあいさつを最後に、「ただいま」の声を聞けなくて、本当につらい思いをしました。あのころは長い夢を見ているのか、夢なら早く覚めてほしいと何度も思いましたが、全て現実の出来事でした。現実を受け止め、前へ進まなければなりませんでした。

私たちは、震災で亡くなった方々の無念の思いを胸にがんばって生きていかなければなりません。大震災の経験を次世代に伝え、防災意識を高め、誰も犠牲者が出ないように、つらい思いをする人がいないようにと切に願っています。

「明日へ向かって」第2集

思い出すだけで恐ろしい

【船越】

12

福舘真美子（52歳）

東日本大震災から2年以上が過ぎた。今でもあの日の事は忘れることができない。私はその日の午後、家業の造船所の集金のため田の浜地区に車を走らせていた。船主さんの自宅の広い庭を見学させていただいて、奥様との会話を弾ませていた。「もつときれいになるよ」「暖かくなった

らいつでも見に来てね」と優しい言葉を掛けていただいた。

「ありがとうございます」と庭を出た瞬間、あの揺れを感じた。今までに体験したことのない揺れに身動きできなかった。すぐそばの電柱にしがみついたが、なかなか揺れが収まらない。家々から人が道路に集まって来た。私は「すぐに工場（造船所）に戻らなければならない」と思いながら、どのくらい立ち止まっていただろう。しばらく余震が続いていた。

その後、船越湾漁協の方向に車を走らせた。途中、わかき保育園の園児と保育士さんが避難をしていた。工場へ向かっているが、気持ちとは裏腹に、なかなか前に進まない。漁協前の道路は水門が閉ざされていて通行できず、田の浜郵便局側の道は田の浜から出ようとする私の車と、田の浜の上方向に行く車とのすれ違いが、その日に限って思うように進まなかった。やっと前須賀の道路を一直線に進んだ。

工場近くの水門も閉められていて西川町を迂回し、いつもなら工場に向かうのに、なぜかその日は高台にある自宅に進んでいた。自宅に着いたが、ハンドルを握ったまま、しばらく動けなかった。近所のおじさんが「津波が来んがよお！」と大声を上げていたが、私は何も考えられず、体が震えていたことを覚えている。

車から降りた私は家の前を通るJR山田線の線路の上で、海の方を見ていた。急に夫のことが心配になり「お父さんは？」と大声で叫んだ。すると、工場から避難してきた息子が「心配すんな。近くさ、いたから」と近寄ってきてくれた。それから間もなくあの大津波が眼下の山の内

の集落に襲いかかった。あの波のスピード、今まで聞いたことのない恐ろしい音、家々の流される速さ、船が流され、波にのまれる瞬間、今でも話をしていると思いい出してしまふ。私の工場も全壊した。もしも、あの時、あと少し時間がずれていたらと考えてしまふと、思いい出すだけで恐ろしい。

「明日へ向かって」第2集

無常を突き付けられた

【船越】

13

港 安子（77歳）

突然発生した大地震と大津波にあつという間に押し流されてしまふという現実を目の当たりにして、大自然の威力にはいかなる高度な科学的技術でも無力であることを知らされました。

あたり一面がれきと化した町、あの残酷さには言葉ありません。ライフラインはストップし、被害状況等の報道は得られず、親族や知人を案ずるばかりでした。2日後に実家の全壊と妹の行方不明を知らされ、命あることを祈るばかりでした。総出で探し回りましたが願いはかなわず、掛け替えのない妹を失い、信じられない日々を過ごしました。日がたつにつれ親族の訃報や行方不明が続出し、心を痛める毎日でした。

妹のいる遺体安置所を探すのも時間を要しました。町はがれきの中を必死な面もちで家族を探す人々が右往左往し、緊迫した状態でした。

遺体安置所で名簿を確認し、妹と対面しました。顔は泥まみれで土が口にいっぱい詰まっております、ハンカチで拭いてやりましたがなかなか取れませんでした。「苦しかったろう」「つらかったろう」と声を掛けるのが精いっぱい涙が止まらず、何度も名前を呼び続けましたが答えてくれません。ただただ冥福を祈るのみでした。

これまでに両親や知人を失い悲しい思いはしましたが、これほどの悲しみはなく、「無常」を突き付けられた思いでした。

この犠牲者の無念に報いることは、大震災での教訓を後世に語り継ぐことであり、時を経ても3月11日は、忘れてはなりません。きつと亡くなられた方たちは、私たちを見守ってくださいと思っています。その事を信じて、忘れてはならないと心に誓いました。

「明日へ向かって」第1集

船が逆さまになって

【船越】

14

村木まさ子（70歳）

大きな揺れに家の中の物がガラガラと落ち、立っていられずぼうぜんとしてみると、階下から「小学校1年生の孫が下校途中で歩いているから、迎えに行け」という姑の声が聞こえました。私も心配でしたが、娘からは「常に学校からの指示が出てから動くように」と言われていたので、ためらっていると、また「早く行け」という声。もう家に着いてもよいころだと思いながら、歩いて迎えに出ました。

道路には車も走っておらず、人も子供たちの姿もありませんでした。堤防の上で消防団員2人が、ただならぬ様子で作業をしていました。

私は不安で仕方なく、とにかく急いで歩き、学校に着きました。子供たちは校庭の端の方に集まっていました。孫は先生に連れられて泣きながら来ました。その時、同級生のお母さんが車で迎えに来ました。同じ方向でしたので乗せていただきました。

家に着き2階へ上がって窓の外を見ると、堤防にぶつかった津波が高く上がり、波にのまれた船が逆さまになっていて、真下の船着き場では別の船をロープでつなぐようとしている人がいました。一瞬のこの状況に驚き、階下に行くと、消防団員の「早く逃げろ！」の声。玄関を開け

ると津波が目の前でした。急いで高い所に駆け上がり、振り返ると前の家が流されていました。電柱が倒れ始めたので、近所の方たちも国道の方へ上がりました。あの荒れ狂う津波を、高台にあるお宅の前でみんなで驚きながら見ていました。

あの時、孫と私を乗せてくださったお母さん、本当にありがとうございました。命の恩人だと思っています。船越小学校では1人の犠牲者も出ず、本当によかったと喜んでいますが、一歩間違えば私たちが大変な迷惑を掛け、今、こうして元気にしていられなかったと思います。

2年過ぎた今、振り返ると、本当に多くの方々からご支援を頂きました。心から感謝しています。そして多くの事を学びました。皆様、本当にありがとうございました。

「明日へ向かって」第2集

津波にのみ込まれて

【船越】

15

長根美紀（42歳）

あの日、大きな揺れが収まらない中、家にいた私たち4人は非常袋を持ち、船越小学校に避難しました。小学校には次から次と避難の方々が集まり始めました。

私は「ここは高台だから津波は心配ないだろうし、持病がある義母がもし具合悪くなったとし

ても、避難所になっているから安心だ」と思いました。まだ強く揺れてはいるけど、安全な場所にいると思うと少しホッとして、調理室側の緑のフェンスまで近寄り海を見ていました。

すると、潮が引き、黒い海底が現れ、沖から津波が押し寄せ始めたのです。海面はみるみる水位を上げました。大きな、大きな渦を巻き、サップ舟などが巻き込まれ始めます。あつという間に防潮堤のギリギリの所まで水かさ上がり、前須賀公園の防潮堤から津波があふれ出しました。

一分一秒と変わりゆく状況に私は怖さを覚え、まだまだ強く揺れている地震と押し寄せた津波に「もし、私のいる小学校前の防潮堤が……」と思うと身体がガタガタ震えました。小学校の昇降口まで下がり、義母にフェンスから離れるように促しました。でも、周りの方々と「ここまでは来ない」と言って、家のある方向を見ていました。その時点で、小学校の昇降口側に避難していた方はざっと30人強はいました。

しばらくすると「津波だ」の声が所々から上がりました。声がする方向を見ると、防潮堤からあふれ出した津波の勢いで、学校坂下の民家が土台からスパッと切られたかのようにひっくり返りました。津波は土手を駆け上がり、先生方の車が波頭に押されて傾き、一斉にボンネットを上げました。

そしてそのまま押し上げられ、今度はボンネットを下にし、坂に向かってダンと落ちたのです。同時に、津波の先頭が白波を立てながら、坂をぐんぐん上がってくるのが見えました。

私たち家族は津波のものすごさに「てんでんこ」に逃げました。「ここは安心、安全だ」と思

い込んでいたため、逃げる時機の判断を狂わせたのです。

たくさんの方々が走り去る中、私は1本の木にしがみつきました。「さっき見た津波が夢であってほしい」と、胸がドキドキしていた次の瞬間、津波にのみ込まれ、その勢いで木から手を離してしまいました。幾度か流れに逆らってみました。どうにもできないと分かり、身を委ねた方がいいと思ったことを今でも覚えています。その後、私は気を失ったようです。

どのくらい時間がたったのでしょうか。どこか遠くから車のクラクションの音が聞こえてくるなあと思っていると、鼻を突くようなガソリンの臭いがしました。「私はまだ生きている……」と意識が朦朧とする中、深く、そしてまた深く呼吸しました。自分がどこに流れついたのか確認しようと目を開けると、杉や松の木が重なり合い、倒れているのが見えました。

そこは学校脇の沢で、とても大きな木が立ち並んでいる中の3本の木に魚網が絡み付いていて、それが私の命綱になって助かったらしいことが分かりました。そつと後を振り返ると、茶色に濁った津波の山にたくさんの方が浮かんでいるのが見えました。「この津波に、またさらわれたら、もう駄目だ。助からない。ここから逃げねば」と思った時に、役場の放送が聞こえました。「もつと高い所へ逃げろ」というのです。私は、この言葉に正直少々腹が立ちました。

全身、脱力感で思うように力が入りませんでした。手で足を引っ張り上げ、立ち上がり、四方八方に倒れた木や何台も重なってできた車の壁、ありとあらゆる物ががれきとなり散乱している中、腰くらいまである沢に顔を沈め、土手に向かって潜りました。どうにか渡り切り、土手を

田の浜

Tanohama

5

chapter 5

大津波は船越漁協(写真奥、黒っぽい建物)と船越漁村センター(左上、白い建物)の最上階まで達し、町をのみ込んだ
(3月24日午後4時22分撮影)



はい上がると、目に飛び込んで来たのはがれきの山でした。

状況のひどさにショックを受け、一緒に避難した家族は誰一人生きてはいないのではないかと
思えてきて、こみ上げてくる恐怖心と悲しみでいっぱいになりました。最後の気力を振り絞り、
助けを求め、歩き出しました。しかし、そこには見慣れた家はなく、土台と流れついたがれきだ
けでした。脱力感と無力感に襲われた私は、正常な判断ができないまま、高い所を求め、山の中
に独り避難しました。

翌朝、一緒に避難した家族と再会することができました。みんな無事で良かったと思うと、涙
と安堵が入り混じり、言葉になりませんでした。最後の最後まで家族に心配をかけて申し訳な
かったと思いました。

今、私が笑顔で日々過ごしているのは、私の生存を信じてあきらめず捜してくれた家族のおか
げです。心から感謝しております。ありがとうございました。しかし、多くの犠牲者が出た事を
考えると、胸が痛み複雑な気持ちになります。あの日・あの時を忘れず、生かされた命を、私な
りに精いっぱい前向きに生きていかねばと思います。

「忘れない・そして前へ」



地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

田の浜

船越湾に面した漁村、田の浜地区は明治三陸津波(1896年)と昭和三陸津波(1933年)でも甚大な被害を受けた。今回の津波は高さ8.35メートルの防潮堤をなぎ倒して集落に襲いかかり、指定避難場所の船越漁村センターの建物ものみ込んだ。昭和の津波の後に造成された高台の宅地まで浸水し、破壊された家屋から火が上がって背後に広がる山林に延焼、約166ヘクタールが燃えた。全壊した家屋の割合は町内で最も高く、6割以上に及ぶ。がれきで道をふさがれた地区は孤立、懸命の消火活動に当たった消防団員らを除き、住民は救助のヘリコプターで山田高校などに避難した。

死者・行方不明者	105 人
震災前の人口	1,275 人
全半壊家屋	345 戸
被災家屋の割合	71%

船越小学校6年 荒川茉莉亜^{まりあ}

私は、この震災が悲しいことだけを生み出したとは思いません。もう一つの何かがあったと思いました。私はその何かを、悲しみと一緒に震災から教えてもらいました。それは、「人と人とのつながりの大切さ」です。

震災から約8カ月がたちましたが、今は震災がうのように感じます。震災によってとても不便な事があって、やった事がない事をたくさんしてきました。でも私は、それがむだな事だとは思えませんでした。この8カ月は、とても貴重な時間に思えるのです。この貴重な時間の中でたくさんの思い出をつくりました。震災前の暮らしとはまた別の暮らしをしています。そこには新しい楽しさもありました。

まず、お風呂が使えなかった時に、自衛隊の人たちが用意してくれたお風呂に行くと、私たちを温かくむかえてくれました。お礼を言っても言い切れないほどうれしかったです。中はとても広くて、温かかったです。その時、私は、「このありがたみをふつうのことだと思っはいけない」と思いました。世界には、こうして私たちに優しくしてくれる人がいた事に初めて気が付きました。

その次は、修学旅行が思い出になりました。震災のために行けないかと思ったけど、行くことができてうれしかったです。これも私たちを支えてくれた人たちのおかげです。これにもお礼を言いたいです。この時に「人間は、人間に支えてもらって生きている」ということを学びました。また、「楽しさは、周りにいる人たちにつくってもらっていたのだ」ということが分かりました。

そして今年の中でも、私が最もがんばった事があります。それは運動会です。使う道具も場所もなかったところへ、全国や世界の人たちからの支援があったから運動会ができたのです。だけでもかにも、運動会が実現したわけがあると思います。それは、「みんなの心を一つにして、運動会をやるうとした気持ち」だと思います。みんなの運動会をやって必ず成功させようとした思いが強く感じられました。

運動会の中で私がとくにがんばったのが、ソーラン節とこてきパレードです。これは船越小の伝統行事だったので、地域の人たちも一番見たかったものだと思います。私たちは地域の方々にようやく恩返しができたと思いました。これは、私にとって小学校生活最後の良い思い出になりました。

この8カ月間は、町の人にとっても大事な時間だったと思いました。これから私は、「町の復興と心の復興」のどちらにも取り組んでいって、いつかはこの町を元通りにして、たくさんの人が笑顔になれたらいいなあと思います。そして希望に満ちあふれた山田のために、未来の山田

に必要とされる人間になりたいです。それが私の夢であり、子どもたちみんなの夢だと思っています。

「やまだの作文」第40集

生涯で3度の大津波に遭う

【田の浜】 2

中村とき（93歳）

人々の心に永久に消えない記憶を刻んだ、東日本大震災から2年の歳月が過ぎた。マグニチュード9・0の大地震による巨大津波は、一瞬のうちに人の命も財も家も奪い去った。

91歳だった私には3度目の津波である。13歳の時の昭和8年3月3日真夜中の大津波、昭和35年5月24日の早朝、日本には地震もなくチリ地方の大地震によるチリ津波を経験しているが、このたびの巨大津波は言語に絶する災禍であった。海近く住んでいれば津波は常に念頭にあり、大地震のたび津波を思い、警報発令と共にいち早く高台に避難する。それを習性として海辺に住んできた。

しかし、今度の地震は今まで経験したこともない大きいものであった。私が浜の郵便局から貯金を下ろし、家に入った時だった。激しい揺れに「あつ、これは津波が来る」。とっさに思っ

た。下ろしたばかりのお金と通帳、ラジオ、補聴器の電池、病院の薬などをリュックに入れたが、すぐそばにあった私の大事な物にすら手を伸ばせないほどの緊迫感があり、心を残しながら孫の車で高台に向かった。高台にはわが家の古い家が2棟、空き家としてあり、このような時のために電気は引いてある。ここがわが家の避難場所であり、いつも警報の時はここに逃げてくる。

場所は田の浜消防団屯所のすぐ上であるから大勢の人がいて、サイレンや防災無線の音が響き、不安と緊張感の中でどんな不測の事態になるのか、あの大地震だものと思っっているうち「大きいのが来るぞー、逃げろ、逃げろー。上がれ、上がれ」の声がした。皆、一斉に高台に続く山を目掛けて逃げ始めた。足が悪い私は杖をついて一歩、一歩、転ばないように山に続く丘畑に登った。誰と一緒に登ったか今思っても分からない。ただひたすらに地面のみ見て歩いたが、もう限界と思った時、山に一番近いKさんが私を背負ってくれた。そして、私を抱き上げ垣根を越えてKさんの庭の中に入れてくれた青年Iさんがいた。このお二人には今でも感謝している。津波は来ていたのであろうが、振り向きもせず登ったから見ていない。

日が暮れかかり、寒くなってきた。見ると1台のバスが山道にいた。山田幼稚園のバスが、園児を送ってきたまま帰れずにいたのだ。皆それに乗せてもらい、暖めてもらった。中には津波でずぶ濡れになった人もおり、どんなに寒だろうと心を痛めながら見守った。そのうち、木の間越しに炎が見えた。火災発生である。バスは何度も移動し、民家近く来て止まった。私は古家に帰ったが、バスの運転手さんが暗くなった道を手を取って送ってくれた。

その夜は食事もしたかどうか記憶にない。横にもならず古家がつぶれるかと入り口に腰をかけたまま、地震のたびに外へ飛び出した。私と娘、避難してきたMちゃんと3人、ラジオを聞きながらであったが、男性たちが中にいたから心強かった。地震のたび、外へ飛び出してみると、流れた浜は真っ暗な中に赤々と火事の炎が見え、時々プロパンの爆発音が聞こえる。民家の火事は山に飛び火して高台の山は所々に山火事が発生した。燃え広がったらどこに逃げたらいいのか、雪も降って寒い。屯所には大勢の人がいて、山火事の消火で慌ただしい。この世の地獄とも思われる中で、ひたすら夜の明けるのを待った。

夜が明けて見た惨状は恐るべきものであった。昭和8年の津波後に造成した高台は安全と思われていたが、そこまでも津波は襲った。昨日まで人々が生活した物全てががれきりとなって、下の浜から山のように押し上げられている。高台の家々も浸水、破壊された。

流れた浜に二夜を過ごし津波3日目、ヘリコプターで山田高校に運ばれた。宮古の職場から山伝いの道を帰ったという孫娘が私を見つけ、家族の無事を喜んだ。この大災害の中で避難所では人々は心を寄せ合い、労わり合い、嘆きを分かち合った。その中で昼夜休まず励む保健師さんたちには頭の下がる思いがした。

津波から5日目、やっと道が通ったと釜石から孫夫婦が来た。年寄りの私がいては皆に世話を掛けるので、私だけ釜石に行くことにした。途中の惨状はむごく悲しかった。国道と新しい三陸縦貫自動車道を通り、徒歩の人を4人乗せた。私はこの時「道」の大切さをしみじみ思った。

釜石から支援に来る孫夫婦について、たびたび田の浜に来たが、初めてわが家を見た時の衝撃は強く、辺りに自衛隊、県警の人たちがいるのも憚らず声を上げて泣いた。私の部屋のあった木造家は流失、形のみ残った家は屋上に物が上がり窓は破れ、空洞化した家の窓から向こうの光が見える。何という無惨、一浜壊滅である。廃墟のごとく化した浜に立っていると、寒々とした風が心の中を吹き抜ける思いがした。この小さな浜で死者、行方不明は100人以上と新聞は報じている。その中に95歳の姉もいた。来るべき終末は安らかにと思っていたが、「シーサイドから」（介護老人保健施設）で流され、いまだ不明である。そして定年を3月末に控えた甥は大槌町役場で、会議中とかに被災し、行方不明でいる。

この巨大津波の前年の平成22年2月28日、2度目のチリ地震による津波警報が出た。しかもこの時は津波の上に「大」の字がついた。今までにない大津波警報にどんな大きな津波が来るかと、午前であったから夕食まで持って避難した。何時間たっても津波の気配はなく、夜遅く5センチくらいの潮位の変化が報じられた。この時ばかりでなく、警報が出ても大きな津波が来ることはほとんどなかったから、人々は大津波と言ったってその程度だと思ったかもしれない。けれども自然災害に油断は禁物である。「想定は何メートルだから」「ここまでは今までも来なかったから」とか、「津波が来ると思わなかった」とか聞けけれど、大地震即津波を思い、いち早く高台に逃げ、忘れ物をしてでも取りに戻ってはいけない。自然災害の猛威を軽く見てはいけないことを後世に伝えたい。

このたびの震災に際し、日本全国、海外からも心温まる支援を受けた。自衛隊、各県警の車、支援の方々の車が雪の日も雨の日も走っている。出会うたびにお辞儀をしているが、その都度、ありがたくて涙が出た。漁村センターが被災したので田の浜地区の中心部は消防屯所に移った。その近くに避難していたから、私はその様子をつぶさに見た。物資の支給、医療、給水、炊き出し、その他どれだけ人の情けを受けたことか。強風の日も大雨の日も炊き出しがあった。こんな日に私たちのために足を運んで下さる方に感謝し、心の中で手を合わせながら食べた。2年が過ぎても感謝の心は常にあり、亡き人々への鎮魂の念を、受けた恩をいつも心に忘れず、復興への道を前向きに進んでいきたい。

火事から逃げ回った日々

【田の浜】

3

田の浜婦人会長 菊地みち子（57歳）

何事もなく過ぎるはずだったあの日、親戚の家で娘と孫とのんびりお茶飲みをしていた。突然の大きな揺れ、長い時間揺れた。8カ月の孫を抱いた娘に「屋根から瓦が飛んでくるから外へ出るな!」と大声を出して、すぐに高台の自宅に帰った。自宅の義父と義母は無事に安全な所にいた。余震の中、前民生委員として、自分の担当地区だった一人暮らしの高齢者の家々を見て回っ

た。デイサービスに行った人以外は家にいて、全員無事だった。「すぐに避難場所になっている瑞然寺に逃げて!」と声を掛け、目の不自由なKさんをお寺の広場に連れて行った。その時には、わかき保育園の園児は広場に避難していて、軽トラックの荷台にいた。

自宅に戻り、2階から海を見ていた。対岸の山の内の方に養殖いかだの浮き玉が流されていくのが見えた。私はそのまま階下を下りたので、その後の様子は見ていない。ほんの数分後に下りてきた夫が「これはとんでもないのが来る」と言いながら外へ出て行った。義母に夫を呼び戻すようにと大声で言われて外に出た。道路脇の階段まで来て驚いた。400メートル近く離れた海岸の漁協給油所の油タンクがSおじさんの家の所にあった。「何で?」。理解できないまま道路に下りたら、水が、Sおじさんの家からさらに4軒上の「上倉」(屋号)の玄関近くまで来ていた。それが津波だと気付かず「どこの水道管が破裂したのかな」と思っていた。その時、夫が大声で私を呼び「T子(Sおじさんの娘)を連れて行け!」と彼女を水の中から引っ張り出した。

彼女は目の前で家と両親を流されて、ただただ泣き叫んでいた。何とか彼女をわが家に連れ帰り、びしょぬれの衣服を着替えさせていると、次から次とぬれた人たちが避難して来た。義母と2人で着替えを出したが、どうにも足りない。何が何だか分からず、服やら綿入れを出していたら「火事だから逃げろ」と言われた。それから、近所にいる人たちと共に瑞然寺の修練道場(旧ホテルタブの木荘)へ車で避難した。

タブの木荘のガス炊飯器が使えることが分かり、炊き出しをすることになった。近所の家や山が燃えている中、自宅に米を取りに行ってくれた人、寒くなるからと灯油やストーブを取りに行ってくれた人、家から血圧計を持ってきて血圧を測り「大丈夫だよ」と安心させてくれた人など、いろんな人の協力があつた。小国屋さんからは、カップラーメン、乳製品、子供たちのためにお菓子やら、たくさん品の差し入れてもらった。瑞然寺さんからも米やみそ、ろうそくをダンボール箱でもらった。ろうそくの明かりの中、皆の協力で避難した150数人は、余震におびえながら何とか一夜を過ごした。

翌日の午後になり、自衛隊のヘリが救援物資を届けてくれるということだったが、山火事がタブの木荘に近づいてきたので、急ぎよヘリで全員避難することになった。それぞれが着の身着のままヘリに乗り込み、山田高校の避難所へ向かった。私は自宅に残った。わが家に男たちが6、7人とどまるので、食事の用意を頼まれたのだった。

昼夜を問わず、風向きによって、どこへいつ逃げればいいのか、夫から聞いてばかりいた。今夜はこっちへ逃げろ、明日はあっち、と4日間、山火事から逃げ回った。

夫や近所の男の人たちは水不足の中、必死で消火作業をしたそうだ。家の後ろを流れる小川をせき止め、水をためて使ったり、わが家の地下水をバケツでくみ上げたりして家に燃え移るのを防いでくれた。

だが、どこでも水は足りず、山へ延焼してしまった。消防団はそれから毎日、山の消火活動に

追われ、見ていて本当は頭の下がる思いだった。日中は搜索活動、サイレンが鳴ると、昼であろうが夜であろうが水を背負い、スコップなどを持って山に入って消火活動をしていたので、体も心も疲れ果てていたと思う。限界を超えながらも頑張っている姿を見て、言葉に言い尽くせないほどありがたかった。

初日、あの火の燃え盛る時に、近所のお嫁さんを連れて旧タブの木荘からわが家まで何回も水くみに来たことを今思うと、ぞっとする。何事もなかったからよかったが、もしもの事があつたら、彼女の家族に申し訳ない事をしたでは済まされないと反省している。どんなときも冷静に行動することが必要だとあらためて思う。

「忘れない・そして前へ」

亡くなった人の分も生きる

【田の浜】

4

五十嵐浩子（70歳）

あの日の午後1時20分ごろ、「今日は瑞然寺コースね」と、友達と2人で散策に出掛けた。その日の気分によって、山から海岸に抜ける瑞然寺コースか、逆の道をたどる荒神あらがみコースかのどちらかを選び、草花を見てはおしゃべりをして、1時間くらい歩く。あの日も山を下り、荒神の浜

に出た。気のせいかな、いつもよりきれいに見えた海。千年に一度ともいわれるあの日にぶつかるとは思ひもなかった。

家に着いたのが午後2時20分ごろ、夕食の支度には早い、同級生から頂いたカキをフライに作り終えて、テレビの前に座る。その後、あの大きい地震、頭がパニックになったが、それでもガスの元栓を閉め、ストーブを消す。なかなか収まる心配がなく、夫は自治会へ行った。何が何だか分からないが、「冷静になるんだ」と自分に言い聞かせ、大切な物をまとめ外に出て、家の周りの人たちに声を掛けながら、避難場所になっていた漁村センターへ行く。広場に20分くらいいたかな。いとこの人たちとう、6人で……。

今になって思うのは、あんなに時間があつたのに、何で早くもつと高い所に上がらなかったのかということだ。悔やんでも悔やみ切れない。同級生の一声に無我夢中で走った。途中、知人のおばあさんに手をつかまれた。最初は、すっかりつかんだが、息子さんに支えられていたので、それを見て手を離れた。海の方を見たら、何と家の高さの2倍もの黒い波が目に入った。

それからの記憶がぶつりと消えている。孫の友達の「ばあちゃん、早く！」との大声にわれに返ったが、頭は真っ白で、涙も出ない。気がついたら高台の山だった。15年間もウオーキングを続けていたので、足腰には自信があつた。夫も無事だった。大粒の雪が降り、足はガクガク、言葉にならない。周りを見れば火事。暗くて何も見えない。高台で残つたのは夫の実家だった。火事は風の向きが変わつたので延焼はないと判断し、その日は実家に兄弟たちとごろ寝した。

次の日、火事は収まるどころか、飛び火する危険が出てきたので、避難所の山田高校にへりで移ることにした。そこで4日間世話になり、実家に戻った。人の事を考えるどころか、自分の事さえ何をしたらいいのか、どうなつたらいいのか。気が狂いそうだった。

おばあさんの手を離れた時の感触が頭から離れず、夜になると寝るのが怖い。おばあさんは流されて亡くなったと後になって聞いた。悪い事をしたと罪悪感だけが残った。でも生かされたのだから、あの人たちの分まで生きなければ。実家に50日間お世話になり、その後、山の内のみなし仮設に夫と2人で生活して今に至っている。

「忘れない・そして前へ」

より高い所へ逃げねば

【田の浜】

5

金子真喜子（59歳）

あの日のことは一日も記憶から消えることはない。生涯忘れられない、忘れてはならない3月11日となった。

月命日にテレビ等から流れるニュースを耳にすると、あの日の自分の行動が脳裏に浮かんて、「どうしてももう少し高い所へ、どうして一緒に上へ、どうして！」と、何度も自分に問いかける。

あの日の午前中からの行動が、テレビのチャンネルを変えて観る映像のように、何度となく浮かんでつらくなる。津波の犠牲になった親戚や両親の友人、同級生、幼いころからの顔なじみ、知人の方々を思うと、目頭を押さえてしまう。

午前中に、箱崎（釜石市）の叔母から間引き若布^{わかふ}を頂いてきたので、お昼もそこそこに、親戚におすそ分けの準備をして車で出かけた。とても寒い日だった。友人の所で立ち話が長くなり、暖かい茶の間に通されて間もないその時だった。「あつ、地震だ」。想像を絶する大地震だった。なかなか収まらない大地震に、じいちゃんの肩を押さえながら、じっとしていることしかできなかった。テレビが消えて停電になった。

余震に震えながら家の方に戻ると、防災無線から「3メートルの津波」という言葉だけが耳に入った。一人暮らしの分家の叔母が心配になり、とっさに玄関にあった長靴に履き替えて走った。叔母は手押し車を押して、実家の義姉を迎えに行くところだった。「行かないで」と私が代わりに叔母の実家へ走った。胸がドキドキして、長靴の足は思うように進まなかった。高齢のおばさんは、しっかりと足取りで気丈に手押し車を押して歩いて来ていた。

急ぎたい気持ちを抑えて、ゆっくり一緒に進んで分家へ到着した。「ここまで来れば大丈夫」の言葉にホッとしたことを覚えている。その時、私は「3メートルの津波」を忘れたのだろうか。どうしてあと100メートル、いや50メートル歩いて高い所へ行かなかったのか……。悔やんでも悔やみ切れない。2人とも大津波に巻き込まれてしまった。叔母は命からがら助けられ

たけど、おばさんは帰らぬ人となって見つかった。私は「2人のおばちゃんを流してしまった」と悔いて声を上げて泣いた。

次の日、叔母と再会できた時はうれしかった。安堵した。「津波はまた来る」。高い防潮堤が出来ても、過信せず「高い所へ、より高い所へ逃げる」。自分を見失わないように、慌てず、素早い行動で避難することを自分に誓った。

「忘れない・そして前へ」

内陸にいて難逃れる

【田の浜】

6

後藤マツノ（68歳）

あの日、私たち一族は分家の長女の結婚式で奥州市にいました。

「何で平日の結婚式なんだろうな?」。私たちにとって、この日取りが明暗を分けるとは思いもよらず、そんな気持ちが胸をよぎりました。

着付けを済ませ、両家の集合写真のシャッターが切られようとしたその時、ゴーツと大きな音と共に激しい揺れ。天井の照明が落ちてくるのではないかと思わず伏せました。揺れは収まることなく続き、ホテルの中庭に避難したわれわれは式だけではどうにかその場で挙げ、披露宴は延期

となった。

車のラジオが大津波を報じていた。他のホテルに移り、電灯のない所で食事を済ませ、各部屋で休んだ。夫と息子夫婦と孫2人、6人そろって少しの間、幸せだった。

夜が明け、早々に宿を後にした。盛岡方面に向かい、国道106号線に入る寸前で沿岸に行く道を止められてしまった。右往左往したが、何とか106号へ入ることができた。釜石に住んでいた息子たちは遠野回りで行くことにして、二手に分かれた。義弟の知り合いから食べる物が届けられた。他人の情けがうれしかった。その後、私たちは食事に困ることはなかった。

宮古に近づいた時、また道は通行止めとなった。通ったことがない山道を越えて、着いた所は織笠のサケふ化場の前だった。田の浜の消防団員が病人を乗せて、奥の方面に走って行くのを見た。近所の人だった。車を置かせてもらい、徒歩で山田道路に登った。痛めた膝が完治していなかった私にとって、きつい坂だった。眼下に織笠地区の火災が見える。家屋はなかった。途中で知り合いの車に乗せてもらった。

彼は一言「おっかあ（妻）を流した」と言った。慰めの言葉も言えず、胸がしめつけられそうだった。彼女は娘の友達で、私知った1人目の犠牲者だった。山田道路を湾台地区に下りた。義弟たちが経営していた自動車工場は、曲がった骨組みだけ残して水の中に沈んでいた。もし結婚式がなければ、夫をはじめ義弟たちは無事に避難できたのだろうか。もしかすれば……とぼんやりと考えていた。地元にいなくて助かったのだと、声を上げて泣いた。

田の浜に行く道路は寸断され、湾台の友人宅で過ごした。息子たちの安否も分からず焦った。4、5日したら友人の息子さんが釜石方面から帰宅した。「通れる」。夫と2人で釜石に向かった。息子の会社を訪ねた。「いた」。孫娘が駆け寄って来て私に抱きついた。愛おしかった。会社は電気もついていたし、寝る所も確保できていた。一安心。

がれきの片付けや不明者の捜索に出ていた夫は疲れたのか、風邪を引いてしまい、それを機にわが家に戻った。友人と一緒に暮らした皆さんに心から感謝しながら、月は4月が変わっていた。多くの人が犠牲になり、多くの物が破壊された。自然の出来事は人間の力では防ぐことはできない。あの時のショックは私から思考力を奪ってしまった。どうしてあの事をしなかったのか、なぜその事ができなかったのかと反省している。物忘れが激しいのは震災のせいなのか、年のせいなのか（どちらもだろう）。毎日、物探しをしている今日このごろだが「負けるものか」と空元氣を出し、「人生全うしてやる」と意気込んでいる。

「忘れない・そして前へ」

佐々木サツ（62歳）

私たちは、毎月のように11日はお墓参りに出かけています。2年半たった今でも、あの日の事を思い出すと気持ちが沈んでしまいます。

地震があった時間帯、私は飼い犬の散歩中でした。石山水産の手前の堤防の辺りで、突然大きな揺れに襲われ、立っているのが精いっぱいでした。揺れと同時に、目の前の地面に無数の亀裂が入り、動揺しながらも大急ぎで家に戻りました。その後も大きな余震が続き、着の身着のまま、またすぐ外に出ていました。庭でおろおろしていると「津波が来るぞ、早く逃げろー」と義兄が大声で叫びました。貴重品を取りに家の中に入った家族に「早くー」と声を掛け、私たちは家の脇の墓所への道を急いで駆け上がりました。

背後の海からゴーッと大きな音が聞こえ、途中で振り返ったら、下の道路に大量の水があふれ、車や船がすごい勢いで流れていく光景が見えました。後は振り返ることなく、無我夢中で墓所までの道を駆け上がりました。

墓所に着くと、先に避難していた人たちが津波の様子を上から眺めていました。大波が家々をのみ込む音と、見ている人たちの悲鳴のような叫び声、プロパンガスの爆発音も聞こえ、火の手

も上がり、辺り一帯が壊滅状態でした。

日が暮れる前に墓所から八幡神社へ移動して、一晚を過ごしました。雪のちらつく寒い夜でした。たき火で暖を取ったこと以外、周りに誰がいたのか、誰と何を話したのかあまり覚えていません。暗闇の中で、時々揺れる余震と、遠くに見える火事、爆発音におびえ、ただただ不安で心細い夜を過ごしました。

翌朝、船越地区を目指し、がれきで覆われた道を皆で移動しました。私が暮らしていた早川地区は、全く家が残っておらず、弟が住んでいた日向脇の家も見当たりませんでした。見たことのないがれきの山に言葉が出ませんでした。時間の感覚も空腹感も全く感じないまま、目の前のがれきを避け、ひたすら歩いたことだけが記憶に残っています。

弟はいまだに行方不明です。兄も震災の3カ月後に亡くなりました。たくさんと同じ地区の人たちが亡くなりました。もう一度会って話したい人たちが大勢います。住んでいた家が流れ、大切な人たちを失い、それでも生かされ、今日があります。

震災を経験して、当たり前のような日常が、どれほど掛け替えのない恵まれたものだったのかということに気付かされました。この地域で暮らすということは、常に津波を想定して、日頃からいろいろな備えておくべきだと痛感しました。避難所で生活を共にし、支えていただいた地域の方々と、大勢の方の温かい支援に救われました。ありがとうございます。

「忘れない・そして前へ」

佐々木しめ（77歳）

あの日の事を思い出すと涙がこぼれそうになり、胸が痛みます。

午前10時、ある会社が移転するためお別れイベントがあり、長男の嫁と2人で山田の長崎地区におりました。午前11時、田の浜に帰り、親類の家に寄ってお茶飲み会。その時、2日前の大きな地震の話から「もし、津波が来るのなら、米とみそを持って行くから泊めだんせ（泊めてくれ）」と兄が言う。「米もみそも持たなくていいから急いで逃げて来て」と私。正午のチャイムが鳴り、帰宅しました。それから3時間ほど後の大震災。山を越えて逃げてきた人たちに兄弟夫婦の安否を尋ねても、誰も分かりません。ずぶ濡れの人、赤ちゃんを抱いた若いお母さん、その他、十四、五人の方たちが、かろうじて難を逃れたわが家に入って来ました。皆で協力し合い、炊き出しをして共に頑張りました。

そのうち住宅火災が発生、山火事も迫り、八幡様に移動。私たちは車の中で暖を取り、一夜を明かしました。しかし、山火事はますます激しくなり、私たちも八幡様に避難しました。そこには幼児の遺体が横たわり、可愛い靴がそろえてありました。涙があふれ、合掌し、まんじりともせず夜を明かしました。その晩は幼児のお母様も見えず一層悲しみが増しました。学校で受け持

ちの児童にかかりきりだったという、お母様の気持ちをおもうとき、かわいそうでかわいそうでありませんでした。

3日目、山火事が目前に迫り、避難指示が出ました。83歳のおばあさんを先頭に4人でがれきを越え、倒れた電柱をくぐり、あの沢、この沢と、津波被害のすさまじさを目にしながら歩き続けました。海蔵寺ありません。ショックでした。約1時間歩きましたが、もう歩けず、戻ろうとした時、小型トラックが通りかかりました。海蔵寺の裏の辺りで乗せてもらい、陸中海岸青少年の家にたどり着き一晩お世話になりました。

4日目によりやく長男とも会うことができ、ホッとしました。それぞれが大変な目に遭い、命をなくした人、家をなくした人と枚挙にいとまがありません。あれから2年8カ月、被災された方々の何の力にもなれませんでした。命からがら難を逃れてきた人たちに温かい食事と部屋を提供できたこと、それだけでも心が休まります。

行方不明の兄夫婦、その他多数の犠牲者の方々へ手を合わせ、お寺さんの仮本堂のご位牌を手でなぞり、冥福を祈るのみです。一日も早く復興住宅のめどがつき、元の田の浜のにぎわいが取り戻せたらなあと思う毎日です。

六地藏二体となりし寂しさに心をこめてご詠歌唱^{とな}う

空晴れてみ霊に捧ぐご詠歌と鯨の峰にかかる海霧

視覚障害の夫と共に

【田の浜】

9

佐々木スエ（75歳）

視覚障害者で自由に歩けない夫を避難させようと、私は息子と娘と頑張っていました。夫の身体がなかなか思うように動かず玄関で迷っていると、近所の父さんが夫を背負い、高台の「山っこ」（屋号）の家の下まで連れて行ってくれて、そこからは、「おりわやタクシー」の正純^{せいじゆん}さんに車いすを貸してもらいました。山っこの上り坂は一人や二人の力では車いすは動かず、周りの方に助けていただきました。本当にありがたかったです。

暗くなるまで山にいましたが寒さに耐えられず、真っ暗な家に戻りました。帰る時もまたリヤカーを借りてきて乗せてくださった方がいました。近所の方や見ず知らずの人たち、たくさんの方に手伝っていただき、心から感謝しております。

普段からこういう場合に備えて「ああしよう」と相談はしていましたが、実際にあの日のようにになると、気持ちばかりが焦ってしまい、思うように動けないことがよく分かりま

した。視覚障害者の夫は、私以上に周りも見えず、相当不安であっただろうと思うと涙が出てきます。

あの日は本当に寒かったですし、波が引いた後も何かが爆発する音や火事で田の浜は火の海になっていました。一睡もできず、余震におびえながら朝になりました。

山に火が回ったので、田の浜の人たちは全員避難ということになり、夫は近所の車で旧ホテルタブの木荘まで送っていただきました。そこからヘリコプターで、身体の不自由な人やけがをしている人を先に乗せて避難させるということでしたので、私は一緒に乗ることができませんでした。「夫は目が見えないので心配で」と必死で頼みましたが無理でした。「ヘリはどこへ行くのか？ 下ろすのか？」と聞いても、その都度変わるということで、分からないまま飛び立ちました。結局、夫と離れ離れのまま、私たちは船越まで歩きました。途中の道路もなく、すっかり変わり果てた田の浜を目にしながら、ただただ必死で船越まで歩きました。途中の夕日が不気味な赤い空でした。

船越に着いた時にはすっかり暗くなっていました。船越湾漁協の船越支所に避難しながら夫を捜しました。電話も通じず、いろいろな方から聞いてもらいましたが、夫の避難先は分かりませんでした。離れて出掛けたことは一日もなく、右も左も分からず、どんな思いでいるのかと、ただただ心配でした。

避難6日目に山田南小学校でやっと会えました。「父さん」と声を掛けたら、「母さんだあが、

母さんだあが（母さんか、母さんか）」と言って涙を流して私の手を握りました。目が見えなくてどんなに不安だったろうと思うと、かわいそうでただただ私も泣きました。その後、夫はトイレに行くこともできなくなり、寝たきりになりました。南小学校にいる間も、見ず知らずの方々に世話になりました。

避難所で2週間、実家で10日ほど過ごした後、田の浜のわが家に戻ってきました。電気も水もない間の夫の世話は大変でしたが、夫にとってはわが家が一番で安心したようでした。帰ってきよかつたと思ひました。ケアマネジャーさんと相談して入浴車や介護ベッドを利用し、訪問診療などでヘルパーや看護師の方々にもお世話になりました。

皆さん一人一人が、大変な思いをしたと思います。あの日、あの時を一生忘れることはないでしょう。

たくさんの方々にお世話になりました。心より感謝いたします。ありがとうございました。

「忘れない・そして前へ」

津波碑の教訓、心に刻み

【田の浜】

10

佐々木タミ（83歳）

私たちは船越尋常小学校に通学しました。旧佐々木漁業部の入口の右側に大きな石の記念碑があります。昭和8年の津波の後に船越村で作ったそうです。それに刻まれた内容は次のようなものです。毎朝、その碑の前を通る時は心の中で2、3回つぶやいたものでした。

【大海嘯^{かいしょう}記念】

- 一 大地震の後には津波が来る
- 一 地震があつたら高い所へ集まれ
- 一 津波に追はれたら何處でも此所位の高い処へ
- 一 遠くに逃げても津波に追付かる
- 一 近くの高い所を用意して置け
- 一 縣指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな

あの日、私はタコをゆでる準備をしていて、仕上りをきれいにするため、足を1本ずつ塩で

もんでいました。その瞬間、恐怖の大地震に襲われました。タコのことまで忘れて、大声で「神様、仏様、地震を何とか止めてください（止めてください）」と叫び、気がついたら、テレビにしがみついていた。神棚や人形ケースなど家中の物が飛び散り、私は位牌など仏様の物や枕元にある大切な物だけを手提げ袋に入れ、夢中で家を出ました。

すぐ坂道を上へ上へと歩きました。上の人たちは「よく来た、よく来た」と言っていて喜んでくれましたが、私は涙ぐみだけでした。「山っこ」（屋号）の高台に着いて、雑草の上に腰を下ろし、向かいの海を見つめてびっくりしました。夕日のためでしょうか。いつもより海面が膨らんだように恐怖を感じました。

私たちを育ててくれた大事な海が襲いかかってくるのを見て、本当に悲しくて、寂しかったです。ただ、目をつむっていました。下の方から屋根だけがいっぱい流されてきて「私の家も入っているのかな」と思うと、何も考える気持ちになりませんでした。ガスボンベがボン、ボンと大きな音を立てて、煙はもくもくと上がり、町は火災で焼けそうになりました。

2日目、陸中海岸青少年の家に避難するため、午後3時ごろ出発しました。山のいばらや雑草の中、下り坂は歩けないので、滑りながら下りました。青年たちは両腕を支えてくれて「母さん、大丈夫だんか」と、何回も気遣ってくれました。涙がポロポロ出ました。3時間くらいで国道に出て、漁協の職員たちに車で青少年の家まで送ってもらいました。田の浜の人たちは皆、小さくなって座っていました。寒かったです。

大きな体育館で、妹と毛布2枚を借り、丸くなって眠ろうとしましたが、眠れません。でも、妹に「姉さん、3時間くらい眠っていたよ」と教えられ、助かった気分でした。妹は全然眠れなかったと言っていました。次の日は妹の娘の家に泊まりました。女孫たちの世話になりました。4日目ようやく宮古市新里に住んでいる娘たちと連絡が取れ、夕方、娘の家に着きました。娘は電話だけを持ち、3日も4日も家を出たり入ったりして、言葉も出ないくらい心配していました。

2人の男孫が会いに来ました。「ばあちゃんはお仏様だけ持って来たがよ」と言い、後は震えて声になりません。私より大きな孫たちにしがみついて、ただただ泣き通しました。世界各国の方々、また知人、友人、兄弟から、お見舞いや物資をいっぱい頂いて感謝に堪えません。自衛隊の皆様、県地域婦人会の皆様、ありがとうございます。

やはり、津波が来たら高い所に集まるということを、先祖の教訓と受け止めておきたいと思います。道路が整備されてから津波記念碑の所に行ってみたら、碑は後ろの方に傾いていました。何も言えず両手を合わせてきました。

「忘れない・そして前へ」

佐々木房子（79歳）

あの日、私は山田で所用を済ませ、自宅に向かって車を走らせていました。消防団員に叫ばれ、いったんは高台に避難したものの、そこにいた知人に「家さ帰るなら、今すぐだがえ！」と言われ、無謀にも家へと向かってしまいました。

2度の危機にさらされながらも、義姉と共に早川そうかわの「ノンキ山」に逃げて運良く助かりました。当日と翌日の二晩は田の浜の八幡様で過ごし、3日目は津波直後から燃え続けていた火の手が、風向きが変わって田の浜全体に及ぶ恐れがあり、全員避難せよとの指示で、陸中海岸青少年の家に移動しました。そこでも二晩過ぎました。

5日目になって、やっと私の所在が分かったと姪が迎えに来てくれ、それから約1カ月間、宮古の姉の家で4世帯10人で暮らしました。

ところが、宮古の個人宅に避難していると、山田の情報がなかなか入って来ません。困っていたところに、宮古市から内陸への集団避難の提案があり、山田の人たちと一緒に参加することに決めたのです。行き先は雫石プリンスホテル。約4カ月お世話になりました。そこでいろんな出会いがありました。友人、知人、学校の元同僚、学生時代に盛岡で共に勉学に励んだ同期の

白梅寮生、等々。

私の消息を知りたい人たちが「駄目で元々」と流失したわが家宛てに出した手紙やはがきが、1カ月もかかってホテルに届いた時の感激。「日本郵便も大したものだ」と手紙の主と話したものです（往復はがきでくれた寮生の優しい心遣いは、とてもうれしかったし助かりました）。

ホテルでは私たち被災者を元気づけたいと、いろいろなボランティアのイベントを受け入れてくれました。その一つに雫石混声合唱団があります。最後に歌った「大地讃頌」の力強さと迫力に感動して余韻に浸っていると、1人の男性団員が「専蔵（夫）さんの奥さんでない？」と駆け寄って来てくれました。驚きました。岩泉町の僻地で一緒だった元同僚です。他にも昔の同業者が数人いて、その中の3人が退職女教師の会の会員ということで、新たなご縁が生まれました。私の喜寿のお祝いも、雫石退女の会に招待されて祝ってもらいました。

またある夜、独り静かに温泉に浸っていたら、横浜の退職した仲良し2人組が入ってきました。その場の成り行きで被災の状況を話すと、涙を流しながら聞いてくれました。「翌日帰る」と言っていた彼女たちから「私たちは東北に旅するのも支援の一つと思って来ました。まさかここで被災者と出会えると思っていませんでした。今は旅の途中ゆえ、大した事もできませんが皆さんで食べてください。たとえ一瞬でも皆さんの力になれたらうれしいです」との添え書きと一緒に、盛岡で買ったらしいゼリー菓子ゼリー菓子が50個も送られてきて、驚いたり、うれしかったり。この2人とも、今なお交流が続いています。

プリンスホテルに避難したご縁もあって、私の被災体験を大勢の人々に語る機会が2回ありました。一つは、山形の天童市で開催された退職女教師の会東北大会。もう一つは、岩手山麓の焼走りで行われたヨーガの会主催の岩手大会です。その他、30人前後のこどんまりとした会合でも3カ所でお話しました。

今回の津波で被災した多くの方々が語り継ぐ事の大切さ、必要性を強調しています。私も全く同感です。90歳になる義姉は、明治の津波で両親を失い津波孤児となった父親から「津波の時は、この山さ逃げろ」と幼いころから言われ続けて育ち、明治の津波から115年後に起きた今回の大津波で、父の教えを忠実に守って助かりました。その義姉と行動を共にして助かった私。明治津波の体験者の伝承を受けて助かった者として、今度は私も継承者として一役を担わねばとの思いがどこかにあったことは確かです。だから、依頼されると引き受けて語ってきました。語り継ぎの方法は、いろいろあります。文集にまとめるのもその一つ。婦人会のこうした取り組みは大変素晴らしいことだと思っています。

今、私は被災地・田の浜を離れて、関口の仮設に住んでいます。被災して、車なしの生活が2年9カ月になりました。活動量は半減しました。不便でどうしようもないと思いながらも、今ではここなりの楽しい暮らし方を見つけています。週2回の卓球、週1回の談話室での編み物教室、ウォーキング。それに不定期ながらの諸活動です。

田の浜婦人会の被災者に対する援護の多さ、温かさ。遠方に居住する者への配慮、気配り跟他

には見られない人間愛に基づいた活動理念を、しっかり感じています。いつの日か、私も田の浜に帰ります。そして、田の浜の土になります。

最後に、婦人会、地域の皆様に幸あれ、と祈って終わります。

「忘れない・そして前へ」

それでも海を恨めない

【田の浜】

12

下村房子（65歳）

「早く逃げて。早く、早く」。どんなに大声で叫んだことか。思い出すと涙が出てきます。私は津波の時、2階のベランダにいました。そこから見た光景は、あまりにも無残で言葉を失うありさまでした。家々の屋根が次から次へと流されて、漁協のオイルタンクが浮いたと思ったら、とんでもない勢いで山側の道路を流され、防波堤が崩れる様子が見えました。

真っ黒いすごい高さの壁のような荒波が、しかも公園に見えました。私は、ベランダの柱にしがみつき、恐怖のあまり体が震えました。逃げ遅れて、流れてきた家々の下敷きになり、犠牲になった人が何人もいました。

家の前で止まっていたバスが浮かんで道路をふさいでいました。津波は逃げ遅れた人たちを目

の前でのみ込んでいきました。あと1、2分早く高台に上がってきていれば助かった命なのに。知っている顔の人たち、今でもあの時の光景が脳裏に焼き付いて、震災から2年半を過ぎても、思い出すと涙が出て眠られず、何回も目が覚めるときがあります。

津波が去った後、1階に下りてみると家の中は泥と水浸しになっていました。今度は、火災が発生して多くの家が焼け、山にも飛び火して四方八方から火が上がり、夜は赤々と家や山が燃え、「田の浜はもう全滅か」と思うと身体力が抜け、何の意欲もなくなっていました。

町から避難指示が出た時、田の浜は陸の孤島になり、人々は家々から避難していなくなっていました。津波で残った家だけでも火事で焼きたくないと、少人数の消防団員、地域の人たちで夜も寝ずに消火活動をしました。その時、夫から「母さん、この火事を放っておいて避難することはできない。津波で残った家を火事で燃やすことはくやしい。俺も頑張るから、お前も頑張って消防団員の食事の支度をしてくれ」と言われた時は、何とも切なく、やるせない気持ちでした。残った少人数の団員は、雪と寒さの中、着衣はびしょ濡れでした。顔は真っ黒く、津波と火事で疲れ果て、若い団員は慣れない山火事と恐怖感で途方に暮れ、私に抱きついて泣く子もいました。とてもかわいそうでした。

道路はがれきの山でふさがり、食料品もなく、何を食べさせようか苦労しました。消防団員と地域の人たちが遺体捜索をして、何人も見つけたけれど遺体を運ぶ物がないと言われ、毛布、タオルケット、その他を出しました。遺体が見つかるたび、「どこの母さん。今日はどこそこの父

さん」とみんな知っている人たちばかりで、心が痛み、身震いする毎日でした。

家を失った人々、家族を亡くした人たち、誰もが想像を絶する震災の犠牲になりました。でも、月日が過ぎるといつまでも海を恨むことができず、毎日、戸を開ければ海を見て暮らさなければなりません。

夫は「漁師は、海の恵みでお金を取り生活できるから、海を恨むことはできない。何せ『太平洋銀行』だからなあ」と笑っています。いつまでも泣いてばかりいても、幸福の神様は去っていくから、前向きに生きようと思います。

「忘れない・そして前へ」

毎日同じ空もなし

【田の浜】

13

中村百合（81歳）

「千年に一度の大津波」といわれるあの災害によって、全てを失い、それぞれの人生が変わった。「3月11日」を絶対忘れない。

私はあの時、外にいてスイセンのつぼみを数えていた。突然にもすごい音と大きな揺れが来た。立っていることもできず、そばにあった杭にしがみついた。身体が半回転する。怖くて地面

に座り「おつかねー」と叫んでいた。全身を恐怖が走る。

地割れがして、地の底に引き込まれそうに思えても動くことができず「津波が来たらどうしよう。北海道の奥尻は早かったな。田の浜はもっと早いだろう」といろいろ考え、逃げようとしても、足が震えて歩けない。四つん這いになり、隣の植木につかまって立ち上がる。何とか歩いて、高台にある「大家」(屋号)さんのお宅にやっと着き、少し安堵した。

そして、海を見た。荒神様(荒神社)に行く道路では、大きい船や小さい船もいっぱい列に並んだまま波が引いていた。間もなく1回目の津波が来た。あつという間に水面が上がっていく。白い船が沖に向かって走っていくけれど、少しずつ戻される。沖からものすごい速さで、養殖棚が次から次へと海いっぱい流されて来た。あまりの残酷さに息をのむ。その場で見ている人たちも言葉にならず「あつ、あつ」と悲痛な声で叫ぶ。誰もが泣いていた。

弁天島の沖から浪板の方面に一直線の白い波を見た。もっと大きな津波が来るだろうと、恐ろしくなり、りみちゃんと大地君と3人でもっと高い所へと走る。大家さんが下の広場にいる人たちに「灯台が津波で見えなくなったから、早く上に逃げて」と叫んでいるのが聞こえた。私たちは振り向きもせず、ただ高い所へと走った。「もっと高い所へ」という、りみちゃんと別れ、私は美和ちゃんの家に行こうと山を下りる。見たのはがれきの山だった。生まれて、育って、暮らした田の浜がもう終わりかと言葉も出ない。涙も出ない。黙ってぼうぜんとして眺めた。もう何も考えることができなくなり、美和ちゃんの世話になった。

津波だけでも大惨事なのに、火事になった。どこが燃えているのか、炎が近くに見えて、残った家が全部焼けるのではないかと思い、津波より恐ろしかった。山火事が広がり、ヘリコプターで山田高校体育館に避難、さらに青少年の家に移り、今は浦の浜の仮設住宅で暮らす。

あんなに恐ろしくつらい思いは忘れることはないだろうと思っていたのに、記憶がだんだん薄れていく。今はそんな自分が悲しい。浦の浜から沼のように穏やかな海と沈む夕日を眺めては、「毎日同じ空もなし、人生そのものだ」と思いながら、一日一日を大切に頑張っていきたい。

「忘れない・そして前へ」

高台の家にて助かる

【田の浜】

14

浜登幸子(70歳)

今日は2013年9月30日です。

鳥のさえずりが聞こえます。後ろの山で鳴き交わしているのでしょう。素足にはちよつと冷たい空気です。海側の窓からは、下方に遠く光る海が、右手と左手には低い山が見えます。ここは、三方が山で、海に面した平地が広がる地域なのです。美しくて、恵まれた自然の中にあります。

2011年3月11日。地震は長かったです。揺れが収まって、唯一落下した額のガラスの破片を掃いていました。遠くでゴーツという音がして「何だろう」と思いながらも片付けを続けていました。ふと、海側のサッシに目をやると一面に茶色の粒々が付着していました。その時は「何？」という感じでしたが、後になって考えると津波のしぶきだったのでしょうか。そうこうしていると、たまたま来ていた義姉が「津波が来んが（来るぞ）」と叫びました。2階のベランダに駆け上って外を見ると、家と家の間から、押し寄せられた物々が……。それしか覚えていません。後に、この間30分くらいと知りました。

過去2回の津波の経験から、「ここまでは来ねが（来ないだろう）」と言い張るおばあさんを連れて、裏手の「山っこ」（屋号）へ行きました。たくさんの方がいました。シヨックでした。それすら知らずにいたのですから。ラジオはつけていませんでした。いつも、日に何度もある防災放送も聞こえなかったと思います。もしわが家が下の方にあったら、おばあさんと2人ここに着いたでしょうか。たぶん、間に合わなかったと思われます。

夫は翌日の午前中に現れました。前夜は対岸の国道から火に包まれた田の浜を見て「駄目だ」と思っ泣いたそうです。家、家族3人、義姉も無事でした。無自覚極まりない私が今あるのは、あの日、あの時、たまたま「家の中にいた」こと、「家が数メートル高い所にあった」ということに尽きると思っています。そのくせ流されて亡くなったAさんに「どうしてすぐ逃げなかったの？」とか、「どうして家に戻ったりしたの？」などと心の中で問い続けました。

「津波でんどこ」といいますが……。そう、きつぱりと身一つで逃げられる人ばかりではないのです。下の方が居住禁止区域になって、将来どんな形態の集落になるのでしょうか。途方もなく遠大で見当も付きませんが、より安心な集落になっているはずだと思います。

「忘れない・そして前へ」

職員一丸で患者を救う

【田の浜】

15

看護師 山崎洋子（58歳）

前日に山田病院で当直だった私は午前勤務を終え、夫と買い物をして別々に家に向かった。帰宅してテーブルの上に荷物を置き、冷蔵庫に入れようと一息ついていた。息子は午後4時からアルバイトがあるためシャワーを浴びていた。

午後2時46分、今まで経験したことのない大きな揺れが来た。わが家は3階建てのため揺れが半端でなく、立っていられず、食器が床に落ちて破損。棚から鍋などいろいろ落下し、足元に散乱した。歩くことさえ危険なのでテーブルの下に潜り込んだ。息子に「大きな津波が来るから、母さん、早く逃げろ。俺も後から行くから」と言われ、いつも持ち歩いているバッグと防災バッグを持って、車で高台に急いで逃げた。

車を置いて田の浜のメインストリートに行くと、多くの人が外に出ていた。その後も余震が続き、家の中は危険なため、皆、外に出て海を見ていた。沖へ逃げようとしている船が、渦に巻かれて沈没した様子を見てショックを受けた。黒っぽい壁のような物が見えた気がするが、それが津波だったのだろうか。「ここでは危ない、もつと上に上がれ。もつと大きな津波が来るぞ」との声で、高台へと急いだ。

落ち着いてから下に戻り、わが家を見ると鉄骨だけが露出し、原形をとどめていなかった。声一つ出ず、ただ涙が頬を伝った。しかし、この状況に悲しんでいる暇はなかった。

夫は、口癖のように「大きな津波が来ても、この家は高さが11メートルもあり、水は3階まで来ないから大丈夫。でも、一応おまえたちは逃げろ。俺は3階で海を見るから」と言っていた。

「もし、この震災が夜の出来事だったら夫は3階にいただろう。日中で良かった」と思った。夫は帰宅途中で織笠付近を走行していたが、津波には遭わずに済んだ。

この日は寒く、夜には雪が降ってきた。火災が発生し、あちこちからドーン、ドーンとガスボンベの爆発音が鳴り響いていた。断水で水が使えず、私たちはただ見ているだけしかできなかったが、消防団の人たちはそのような中でも消火活動、被災者救助など一生懸命に活動していた。この行動に感謝するばかりである。

山田幼稚園の先生が「炊き出しをしましょう」と声を掛けた。本家のガス釜を使い、家々から米を集め、おにぎりを作った。水道は断水で使えなかったので沢水を使った。自然の恵みのあり

がたさを痛感した。温かいおにぎりの味は一生忘れることはないと思う。

避難者の中には足首を骨折している人がいた。処置する用具がなく、新巻きサケの箱を利用して足を固定。自分の防災バッグの中にあつたさらしを利用して応急手当をした。職場のことが頭から離れなかった。誰かに「山田病院は全滅だって」と言われた時はぼうぜんとした。

翌日、息子が「一緒に山田病院を見に行こう」と言ってくれたので、がれきの中、道を急いだ。病院の建物が見えた時は安心したが、「職員、患者さんはどうしたんだろう」と中に入って行くと、1階はがれきの山で真っ暗。恐る恐る2階に行くと、皆元気に働いていた。皆と抱き合い、元気であることを確認し合えた時は本当にうれしく、涙が出た。

翌日から病院に全員泊まり勤務をした。夜間は停電で真っ暗なため、懐中電灯を照らし巡視した。今思い出せば当たり前のことだけれど、本当に大変な思いの中で、全職員で患者さんの命を救えたことは良かった。

震災2日目に、私は体調を崩し、盛岡中央病院へ搬送された。手術を受けることになって、約1カ月間、入院生活を送った。その間はテレビ、新聞の情報だけで少ししか状況が分からず、退院して、夫や息子から当時の状況を聞いて大変だったことを考えると心が痛んだ。

お腹の手術痕を見ると、3・11を思い出す。一生忘れれることはない。このような震災が二度とないことを祈る。

震災から早2年半が過ぎているが、復興の遅れにいらだちを感じる。早く仮設住宅から出て、

マイナスからのスタート

【田の浜】

16

阿部優子（53歳）

あの日は朝から晴天だった。仕事仲間3人と磯採りに出かけ、岩場でおにぎりを食べ、楽しい時間を過ごした。家に帰り、採ってきたフノリの処理をして、コーヒーを飲んで寛いでいた。そこに、ガタ、ガタガタガタと激しい揺れ。「あつ、地震だ。大きいぞ」。2回目も大きく揺れ、長かった。

外からゴー、ゴーとすさまじく大きな音が聞こえ、見ると、ほかの家が大波にのみ込まれながら、ゴロゴロとわが家に押し寄せて来た。「津波だー。2階の隅の部屋に行けー」。夫の大声に私は生後2カ月の孫を抱きかかえ、娘と2階の部屋に駆け込んだ。ガタン、バタン、バリバリツ、ガシャン。ものすごい音がして家が傾き、海水が入ってきた。ベビーベッドや家具が転ばないように押さえ、孫を抱いたまま静まるのを待った。

ドアを開けると、階段やほかの部屋、ベランダは跡形もなく、ひん曲がっていた。私は「何こ

れ、何が起こったんだー！」と叫んだ。窓を開けると、見えるはずのない八幡様が目の前にあった。わが家は波に100メートル押し流された後、200メートル引き戻され、ほかの家の上に引っ掛かったのだった。命拾いした私たちは近くの方に長靴を借り、がれきの上を歩いて八幡様へ渡り、一夜を過ごした。そこには三、四十人が避難していたと思う。

次の朝、近くの家で食事を頂いた後、やぶをかき分け、古家に行った。そこにはう、6人が身を寄せ合っていた。落ち着く間もなく、昨夜からの火事が山へ燃え移って消えないので、田の浜地区の全員が自衛隊のヘリで避難することになった。しかし、私たち家族は首の座っていない孫を背負って、道なき道、がれきの上を歩き、3キロ離れた娘の夫の友人Kさん宅に身を寄せることにした。

今、冷静になってみて考える。「なぜ地震が起きた時にすぐ逃げなかったのか。避難所ではなく一般の家に避難したのか」。自分たちの非常識さを心から反省し、Kさん宅の皆様には本当に申し訳なく、心から感謝している。

あの時は一般の家にはなかなか情報が届かなかった。船越防災センターに空きが出たと聞き、電気が復旧するまでの間、センターにお世話になった。電気復旧後、古家に戻り、物資の配給に並ぶ日々が続く、理不尽に思う面もあったが、8月12日、やっと仮設住宅に入居することができた。

娘も財産を失い、今後の生活再建のため働かざるを得なくなった。5カ月残っている育児休業

を断念し、姑が津波で亡くなったために子供を私に預け、出産6カ月目で仕事に復帰した。孫が気管支ぜんそくを患い、毎日の病院通いが半年、週3日通いが3カ月続き、今でも月に4、5回は通院する日が続いている。仕事、孫の世話、家事と忙しく動いていたためか、あまり落ち込むことなく、今日まで過ごすことができた。

昨年10月、釜石に住む実家の父が亡くなった。実家は床上浸水で、半壊通知が出ているにもかかわらず、被災から1年7カ月もの間、何一つ物資の支給がなかった。行政からも訪問されなかったことを知り、いくら父が高齢で病死とはいえ、被災後に市による心のケアがなかったことを理由に、関連死に値するのではないかと、書類を集めて残された母のために申請したが、思いは通じず却下された。「何が絆だ。無情だな」と不満だった。

震災直後は「皆同じ状況なんだ。自分だけじゃないんだ」と、悔しい思いを抑えてきたが、今までコッコツと築き上げてきた財産（新築9年目の家）や生涯の計画を一瞬で失った事の大きさに、日がたつにつれ悔しさが増す。立て直すのは容易ではなく思案している。被災を免れた人との心の溝を今でも感じるのは確かだ。

他国、他県からの物資の支援には、心から感謝している。今なお、田の浜地区では物資の援助が続いている。県内のみならず、他県からのボランティアグループの方たちと婦人会の強い絆には頭が下がるばかりだ。

自分が幸せでないと他人に優しくできないし、心にゆとりが持てない。住環境の再建がなくて

は一步を踏み出せない気がする。まだまだ再建の兆しは見えないが、一日も早く家族全員が楽しく暮らせる日が来ることを信じて、マイナスからのスタートである。この震災を経験して避難訓練の大切さと、人との絆が必要だと感じた。

東日本大震災を忘れることなく、今後、この体験を孫たちに語り伝えていきたい。

「明日へ向かって」第2集

まるで地獄絵図だった

【田の浜】

17

五十嵐まき子（66歳）

あれから2年と4カ月の月日がたちました。あの時のことは一日たりとも忘れたことはありません。誰が想像できたでしょうか、あの未曾有の大津波を。津波は一瞬にして多くの掛け替えのない生命と財産を奪ったのです。

あの時、私は早川^{そうかわ}の親戚宅でお茶を頂いていました。突然の地震でした。今まで感じたことのない強い揺れにただごとではないと感じ、従姉妹^{いとこ}にも「津波が来ると思うよ！早く逃げつぺす！」と言い、家に戻りました。そのころ認知症が進んでいた山田の実家の母が心配で、危険も顧みず夫に車を出してもらいました。

織笠を走っている時、ラジオが「釜石で津波が観測された」と報じていました。私たちは無言のまま車を走らせました。実家に母がいらないのを確認し、長崎地区に住む叔父の所へ行き、母と会いました。ありがたかったです。母を叔父夫婦に頼んで田の浜に戻ろうとした時には、長崎地区まで津波に流されたがれきが来ていました。

津波を見ていなかったのも、何が起きたのかと戸惑い、頭は真っ白でした。がれきをかき分け、やっと山田中学校に着いたのに、ここも火事が近づいて危険だということで暗い道を歩き、山田高校に避難しました。「今、ここに何百人入っているのだろうか?」。不安で興奮している人、おびえている人、泣いている人、無言の人など、あちこちから話し声が聞こえてきます。「船越の海蔵寺が流れたそうだ」「田の浜は津波と火事で全滅だそうだ」と、ひそひそ聞こえる話に耳を傾けては、背筋が凍る思いをしました。また、甥が消防団の活動中に津波にのまれ、がれきの中から助けももらつたと聞き、泣いてしまいました。

身の縮む思いで一晩を過ごし、夜が明けると同時に田の浜へと歩き始めました。途中、三陸道で車に乗せてもらい、浦の浜からは山道を歩きました。間もなく、大人が数人付き添って歩いている船越小学校の子供たち30人ぐらいい出会いました。悲しそうな顔をして歩いていました。きつと心細かったでしょう。「がんばって、がんばってね」としか声を掛けられませんでした。

前の晩、避難所での話の通り、海蔵寺はありませんでした。高台にある小学校にも、がれきや自動車がいっぱいでした。やつとの思いで田の浜に着きました。「あつ、田の浜がない!」と言

葉を失いました。まるで地獄絵図です。でも、高台にある自宅はかろうじて津波と火事からも免れて残っていました。孤立した田の浜は山火事などで避難指示が出て、少しでも歩ける人は徒歩で、高齢者や子供たち弱者は自衛隊のヘリで対岸の避難所を目指し、避難しました。私はそのまま田の浜に残りました。誰もいないと思うためか、暗くて寂しかったです。数人の女性たちと消防団への炊き出しのお手伝いに参加しました。行方不明者の捜索や山火事の消火など、不眠不休で働く消防団員には、ありがたさで頭の下がる思いでした。

私たちはとんでもない災害に遭遇しましたが、お金に換えられないものを世界中から頂いたと思います。復興はまだまだ遠い道のりだけれど、絆と感謝の気持ちを忘れずに、前へ前へと進んでいきたいです。そして、私の大好きな田の浜へ一人でも多く戻ってほしいです。以前のような集落になってもらいたいです。

はやり言葉の「津波でんでんこ」ですが、私は一人でいた実家の母を心配して、大津波警報の中、山田の実家に向かいました。後に母にこう言いました。「ばあちゃん、津波でんでんこだって。ばあちゃんを助けようとして私たちも危なかったよ」。母は「そうだが(そうさ)。おめえたちに何かあったら、おら困るから来るなよ」と。その後、母は病死しました。あの時、苦勞して育ててくれた母に何であんなことを言ってしまったのだらうといまだに後悔しています。

私の中で「津波でんでんこ」の意味はよく分かります。では、弱者はどうすればいいのか、答えが見つかりません。

今日より良い明日を信じて

【田の浜】

18

坂本加代子（69歳）

「あなたの家はどうか?」。「田の浜のメインストリートへ来れば分かるよ」。友との会話である。

しかし、家も庭の木々も草花も、たくさん思い出につながる品々は跡形もなく一瞬の間に消え去り、1年半たった今、メインストリートは雑草の中に埋まったままだ。

3月11日、地区の比較的高台の親戚に避難したが、よもやそこまで津波が来るとは思いもよらず、気がつけば91歳の義母と一緒に遠くに流されないように流木にしがみつき泳いでいた。

その後の行動は無我夢中で、瑞然寺の避難所に義母を預け、私の着替えを確保できたのは日暮れ近くだった。そのころには家屋も山も火が回り、安全な場所へと移動を繰り返した。自分の住む集落が火の海となっている現状を、なす術もなくただぼうぜんと眺めていた。皮肉にもその熱が冷え切った私の身体には暖かく感じられ、どこか他の地の出来事のように思えてならなかった。

陸の孤島となった集落から、ヘリコプターで山田高校の避難所へ移動した。3日後に夫の元気な姿を見て喜んだが、周りには家族を亡くした方も大勢いて、複雑な思いだった。日頃の便利で

ぜいたくな生活とは一変した避難所暮らし。誰しもが我慢の連続で、これからの事が不安だった。じっと動かず、目を伏し背を屈め、おびえながら三食のおにぎりの配給をじっと待った。そんな状況の中でもほとんどの人が同じ集落で顔見知りだったから助け合い、励まし合って救われたような気がした。

「今日より悪い日はない、明日はきっと良い日」。この言葉で自分自身を奮い立たせ、震災後半年くらい苦しめられた、海を見ると感じた胸苦しさや吐き気から何とか切り抜けた。幸いにも一軒家を借りることができ、入院していた義母も快復。1年半たった今、生活面では落ち着きを取り戻しつつある。

多くの方々から感謝し切れないほどの善意を頂いた。今までの自分本位の行動や考え方から、常に周囲の事も気にかけるように変わらなければと思う。

婦人会の呼びかけで集まる仲間との出会いが、やむなく離れて生活する者にとって、どれほど元気を与え、張り合いになったことか。今後どのように集落が変わるのか見当もつかないが、いつでもどこでも目を閉じると、私のメインストリートは以前のままの姿を、ありありと脳裏に映し出してくれる。

今日よりも明日の良い日を信じて、これからも前向きに生きたいと思う。

「明日へ向かって」第1集

明けない夜はない

【田の浜】

19

保育士 佐々木千秋（59歳）

あの日、船越保育園で午後からの仕事に就いていた私は、子供たちを守ることに必死でした。長く強い揺れに不安がる子供たちに「大丈夫だよ」と声をかけながら避難した園庭で見た津波の光景。対岸に見える田の浜の堤防を、津波が船と共に越えて行くさま。その先はわが家。「夫は？」と頭の中は真っ白になり、津波に飲み込まれ流されていく家々や、津波がぶつかり合って上がる水柱をぼうぜんと眺めるしかありませんでした。

強い余震におびえながら、「明けない夜はない」と心に言い聞かせて待った夜明け。翌日、夫と再会できました。津波にのまれながらも自力で屋根にはい上がり、流されていくところを助けられた、と聞いた時には、安堵と同時に身震いを感じました。2日目の夜には、安全だと思い、全然心配していなかった実家も流されたと聞きました。

夜明けを待つて避難所を探し歩き、実家の家族皆と無事を確かめました。83歳の母が津波にのみ込まれ、もがきながらやつとがれきの上に出て、1人で助けを求めて歩いたことや、避難所に来るまで多くの人に助けられたことも、知りました。

県外にいる娘夫婦と息子と連絡が取れず、携帯電話を握りしめて過ごした夜。衛星電話がつな

がってやつと声が聞けた時のうれしさは、次の希望へとつながっていった気がしました。

今、この文章を書くにあたって、いろいろな事を思い出そうとするとやはりつらくなります。先の事を思うと不安になります。でも、震災で亡くなった方々の無念の思いを胸に、命ある限り自分らしく生きていきます。もう二度とあんなつらく悲しい思いを誰もしないように願って。

「明日へ向かって」第1集

張り詰めた心を支え合う

【田の浜】

20

佐々木光子（77歳）

2年前のあの日、友人宅へ行くとしていた私は、ただならぬ状況に外の様子を見ると、近くのおわき保育園の子供たちが上の方へと避難しているところでした。すぐ近所の家に行くと「津波が来るかもしれないから上着を着て来て」と言われて自宅へ戻りました。

日頃から防災リュックは出してはいたものの、中身は特別用意しておらず、貴重品が入っている手提げと、前日買ってあったパンをとっさに放り込みました。仏壇の線香台などがいろいろとひっくり返っていたけれど、後で片付けようとそのまま外へ飛び出しました。

ものすごい音が背後から襲ってくるのを体中で感じ、気づくと足元に水が迫っていました。サ

大浦

Oura

6

chapter 6

のどかな漁村の風景は津波で一変し、漁具
やがれきが散乱した
(3月25日午後0時21分撮影)



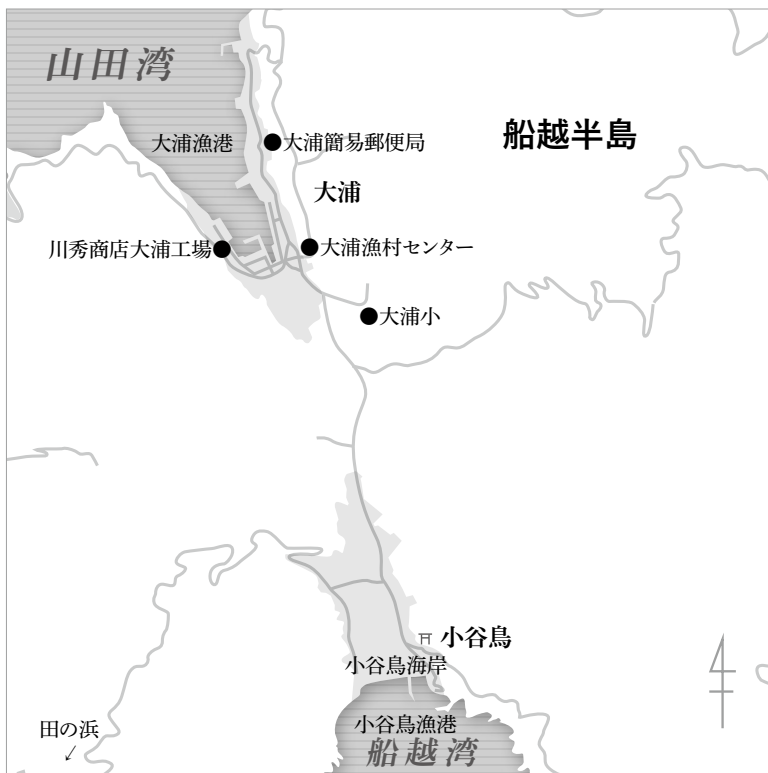
ンダルをつつかけた足がもつれそうになりながらも、必死に山の方へと走りました。あの時、倒れた物を片付けたり、色々と物を用意したりしていたら家と共に流されていたに違いありません。振り返ることなく走ったから、あの恐ろしかった波は目にしていません。着の身着のまま外に飛び出したから、今日こうしていられると思います。

その後は高台の民家で2泊、自衛隊のヘリで運ばれた吉里吉里中学校（大槌町）で2泊、山田高校の避難所で一夜を明かしました。翌朝、探し回っていた娘が迎えに来てくれて、そのまま娘夫婦の家へ身を寄せました。仮設住宅に入居するまで、4カ月もの間同居させてもらいました。娘の家も知り合いの家族が3組避難していて、10人ほどが共同生活をする状態でした。

避難所で生活した人たちよりは恵まれた環境でしたが、電気が復旧するまでは、明るいうちに食事作りを手伝ったり、水をもらいに行ったり、張り詰めた気持ちを皆で支え合い、心を一つに協力し合って過ごしました。夜になると、お湯入りのペットボトルを何本もこたつの中に入れて皆で囲み、ひたすらラジオに耳を傾けたこと、娘の結婚式で使ったメモリアル・キャンドルが役に立ったことなど、いろいろと思います。

現在の暮らしにも慣れ、皆様のお陰で何とか生活しております。本当にありがとうございます。これから先、老いていく自分に不安は隠せませんが、一日一日を大事にして、感謝の気持ちを忘れることなく、自分なりに歳を重ねていきたいものです。

「明日へ向かって」第2集



地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

大浦

大浦地区は山田湾の南側に面した船越半島の入り江に沿う、静かな漁師町。ホタテガイやワカメの養殖のほか、天然の漁場に恵まれ、アワビやウニの漁も盛んだ。防潮堤を乗り越えた高さ9メートルに及ぶ津波は、大切な漁船や漁具、住み慣れた家々を押し流してがれきの山を築き、港を見下ろす小高い場所に立つ大浦漁村センターの手前まで迫った。大浦の集落から南に2キロ余り、反対側の外洋に面する小谷島海岸には、さらに巨大な津波が襲来した。防潮堤と防潮林を一気になぎ倒して山間の奥深くまで浸水し、津波の先端が到達した遡上高は約25メートルとされる。

死者・行方不明者	38人
震災前の人口	921人
全半壊家屋	117戸
被災家屋の割合	37%

二度と犠牲者出さぬよう

【大浦】 1

山田中学校2年「当時・大浦小学校5年」 小林夏希

日本の国は、あのほんの一瞬の出来事で真逆の世界に変わってしまいました。

3月11日、こんな大きな地震があるとは知らずに私は過ごしていました。あともう少しで6年生だから、いろいろがんばらなければならぬと毎日思いながら普通に過ごしていました。その日はちょうど学校が5時間授業、しかも短縮授業だったので女子3人でゲームをして遊ぶ約束をしていました。5時間目と帰りの会が終わって、すぐ楽しみにしていた遊びの時間。私たちは急いで2階の教室から、1階の玄関まで走っていききました。そして靴をはき外に出ようとした瞬間、ゴォーという音がしました。トラックが来たのだらうと一瞬思いました。けれど、そのすぐ後にすごく大きな揺れを感じました。最初はそれほど大きいというほどではありませんでした。それから男子も来て、5年生の全員5人は、すごく大きな揺れで立っていることもできず、ランドセルを頭にかぶせ、玄関の所にみんなでかたまっていました。そうすると、職員室にいた男の先生が来てくれました。

あの、大きな、大きな揺れは長い時間続きました。私はすごく怖くて、怖くて号泣していました。そして、みんなでなぐさめ合いながら、教室に戻りました。すると、複式学級で5年生と一

緒の4年生と担任の先生がいました。4年生7人はみんなで机を近づけ、その下に隠れていました。怖くて泣いている女子もいました。私たちも同じようにして隠れました。その後何分かつと、2階のホールに避難している人たちが、「津波が来た」とすごく大きな声で叫んでいました。先生は「怖い人は見に行かない方がいいよ」と言っていました。後で見に行くと、前までのあのきれいな大浦ではなくなっていました。道路には、製材所や「川秀」（水産加工会社）の建物の一部、小屋などいろいろな建物が堤防を乗り越えて散乱していました。

あの一瞬の出来事で、亡くなった人々、家を失った人々がたくさんいます。私の所は、家も家族も全員無事でした。きつと亡くなった祖父が守ってくれたのでしょうか。幸せな事です。

今でも地震は毎日のように起こっています。また、いつどうなるかわかりません。そんなの誰にも分からないのです。また家族がバラバラになるかもしれません。もしこんな事がこれから起こっても、もう二度とこんなに多くの犠牲者を出したくありません。

心も体も強くなる

【大浦】 2

山田中学校1年 佐々木智輝

あれから、1カ月以上たったある日、母は遺体で見つかりました。悲しかったけど見つかった

本当によかったと思いました。

3月11日午後2時46分。僕たちは帰りの会の最中だった。その時だ。「ゴゴゴ」と耳に伝わってくるかすかな音がした。「地震だ」。みんな、一斉に机の下にかくれ、収まるのをまった。でも、収まる気配はなかった。

揺れは強く、学校が壊れないようにと、自分は祈っていた。やっと大きな地震は収まり、担任の先生が来る間も余震が続く。担任の先生が来た。その後に1階にいた先生や、低学年の生徒たちも2階に集まって来た。ラジオで先生が地震の情報を聞いている。

ラジオから聞こえた言葉に、自分は恐怖を感じてしまった。津波警報が発表された。みんながざわめきはじめた。僕は家族や自分の家のことなど心配になってきた。先生は、みんなの家族が働く場所は海の近くかどうか聞き始めた。僕の父は大工で、母は看護師だ。そして2人とも海から遠くはない場所で働いていた。僕は心配でならなかった。

先生は廊下に出て、校長先生たちと話していた。

「家はだいじょうぶだろうか」「家族はだいじょうぶだろうか」

こんなことを話しながら心配していた時のことだ。津波が来たのだ。先生が最初に津波に気づいた。みんなは窓の近くに集まってその光景を見た。

この世のものではなかった。家や漁船が波に乗って流されている。津波は家や人などあらゆるものをうばっていった。

その日、僕たちは学校に泊まった。僕は、心の中がもやもやしていた。みんなもそうだったと思う。毛布をかぶって余震にたえながら夜をすごした。その時、みんながお互いに協力し合っていることがわかった。学校に避難しに来た人たちは家族や近くの人に自分の毛布をかけてやっていった。暖房もなく寒い時なのに、自分は毛布を遠慮して他の人に渡している人たちがたくさんいた。

次の朝の食事は、おにぎりと非常食のクラッカーだった。おにぎりは、避難してきたお母さん方が作ってくれた。それを見て僕は心がいたんだ。家や家族が心配なとき、自分たちのためにおにぎりをにぎってくださった気持ち、僕は忘れられない。

3月12日、朝おきたあと、先生に集められて手伝いをした。水くみだった。校庭の近くの川の水をバケツリレーのように渡し、歩いて水を集めた。その水は、トイレで流すために使った。僕は、水を運んでいた。でも水をこぼしてしまっていたら、先生に「無理するな」と言われた。僕は、その時、人の役に立とうと思ってやっていたが、はりきりすぎて役に立てなくてやしかった。朝ごはんを食べたあと、父が迎えに来てくれた。道路は危なかったので山道を通って家に帰った。

おばあちゃんは僕の顔を見るなり、「心配だった」と言った。お昼前に僕は、姉と2人して被害の状況を見てまわった。僕が思ったこともないような僕たちの村を姉と見てまわった。電柱が倒れていたり、家がもとの所から動いていたり、ひどい姿だった。

実は僕は何より心配だったことがあった。

「お母さんはどうしただろう」

僕が学校から帰っても、母は帰って来なかったからだ。母は看護師だったので、避難所で手伝いでもしているのだろうと信じていたけれど、帰っては来なかった。

1カ月ほどしたある日。母は、がれきの下で焼けただれた姿で見つかった。DNA鑑定で母と確認されたそうだ。僕は母の姿を見ていない。

僕は、母にいつもたよってばかりだったので、がんばっていけるか心配だ。でも僕は、協力するということはこの震災で学んだ。姉は大学生になり家を離れ、母は天国へ旅だった。僕は人にとよるだけでなくて、これから祖母や父を自分が支えていけるように、がんばっていきたいと思っている。

中学校に入学して僕は柔道部に入学した。

心も体も鍛えて強い人になる。

「やまだの作文」第40集

気付いたら屋根の上に

【大浦】

3

大浦簡易郵便局長 阿部裕徳（52歳）

あの日は、いつもと変わらず局舎で事務を取っていました。午後2時46分、今まで感じたことのない縦揺れの大きな地震に見舞われました。実際は、数分間だったのでしようが、随分と長く感じました。まさか、あのような巨大な津波がやって来るとは思わず、同居していた母とのんびりと構えていましたが、母にせっつかれ叔母の家まで車で避難しました。私は郵便局を運営している以上、規則で局舎に戻らなければならず、母を置いて局舎のある自宅に戻りました。

停電により電気も携帯もつながらない状態で、唯一の情報収集手段は車のラジオでした。私は車庫に車を入れ、家の中にいたのですが、ラジオを聞こうと外に出ようとしたその瞬間、玄関の向こう側にさざ波が見えたのです。玄関の外に出た私は、あつという間に津波に飲み込まれ、気が付いた時には母屋と離れのつなぎ目の屋根の上まで流されていました。

今思うと、玄関の扉が偶然にも開いていたこと、自分の靴に履き替えようと思わずに、その場にあった長靴で外に出たことなど、偶然がいくつも重なり、一命を取り止めたのです。けがは、

両手と側頭部の裂傷だけで済みました。第2波が来る前に屋根の上に登り、裏側から逃げたこともよかったのだと思います。もし、玄関が開いていなかったら、もし、外へ出るのが一步遅かったら、確実に家の中で死んでいたでしょう。津波は2階の床から1・5層の高さまで達した痕跡がありました。

この震災で、東北地方の沿岸は、甚大な被害を受けました。亡くなられた方は2万人弱、いまだに行方不明の方も数千人と聞いております。私たちは今、この大津波でこうむった未曾有の被害を後世に語り継がねばならない使命があります。復興の兆しはいまだに見えませんが、国政、地方行政、私たち被災者が三位一体となって、未来を築いていかねばなりません。

母の教訓が役立った

【大浦】 4

小林タミ子（74歳）

あの日、私は娘と体の悪い叔母の見舞いに行き、帰宅したばかりでした。夫は体調を崩し、家で休んでおりました。昼ごはんを食べ、洗い物をし、お茶を飲もうと座った時、地震が来たのです。地鳴りに驚き、今まで体験したことのない揺れに、慌てて外に飛び出しました。電信柱がぐらぐらと倒れそうに揺れ、家も壊れるんじゃないかと思うほどでした。

「絶対に津波が来る」。私は大槌町吉里吉里きりきりの生まれで、実家は海のすぐ近くにあります。母が昭和8年の津波に遭い、大変な思いをした体験を幼いころから聞かされ、家族にも「津波が来たら逃げろ」と言い聞かせてきました。したがって、常に大事なものはかばんに詰め、身近に置いてありました。

「津波が来るから逃げなきゃ」。揺れが収まるとすぐ、常に玄関近くに置いてあった物（防寒着、防災リュック、自分の貴重品）を娘の車に積み込みました。防波堤があるから大丈夫という夫を急ぎ立て、私と娘は車で大浦漁村センターへ向かい、夫は仕事用の軽トラックで自宅より1段上の細い道路に別々に逃げました。

漁村センターの広場に行くと、やはり何人かが車で避難しておりました。寒いので車の中にいましたが、携帯もつながらず、車も余震でぐらぐら揺れて怖いので外に出て、数人の人たちと海の様子を見ていました。

灯台の所まで波が来た時、ここも危ないと思い、さらに漁村センター上の広場まで駆け上がりました。怖さから足が上がらず、最後には腰が抜けたようにはって逃げました。娘は漁村センターに止めた車が流されると思い、取りに戻ろうとしましたが、消防団員に引き止められました。漁村センターの手前で波は止まりましたが、あんな高い防波堤の上を大型漁船や車、家が軽々と流れていくさまは、とても現実の出来事とは思えませんでした。

夫の安否が気になり、皆に見かけなかったか聞きながら上の道路を歩いていくと、山道を引つ

張り上げてもらい、無事だった夫に対面できました。「小林の家は防波堤の水門から海に流されていったつけよ」と言われても信じられず、とりあえず下りていってみました。自宅は跡形もなく、がれきの山でした。ぼうぜんとしたまま、上の道路に戻りました。そこで親戚の方に声を掛けてもらい、夫の体調も思わしくないことから避難所に行かず、親戚の家にしばらくお世話になりました。

その日は、5世帯くらいの方々と一緒にいました。電気もなくろうそくをともし、こたつに湯たんぽを2、3個人れ、10人ほどで肩を寄せ合って一夜を過ごしました。余震も続き、怖くて眠れませんでした。食事も、その方の保存食のおかげで温かいものを頂きました。あそこで声を掛けてもらえなかったら、あの夜から無事でいられたかどうか分かりません。あのころお世話になった方々、助けてくれた方々には感謝してもし切れません。ありがとうございました。

津波の恐ろしさは散々聞かされて育ちましたが、体験してみると想像以上の怖さで、まるで夢のような感じでした。せめて命が助かったこと、防災用品を持って逃げられたことは母からの教訓のためものです。今後も津波の恐ろしさを皆に伝え、防災に役立つようにしたいです。

大津波、船を避難させる

〔大浦〕 5

野田 實（73歳）

その時、私は浜にある倉庫の薪ストーブで一人暖をとっていた。地震は3分ほど続き、強烈な揺れだった。すぐさまストーブに水をかけ、外に出た。電信柱が大きく揺れている中、すぐ上にある自宅に駆け上がり、ただごとではないことを妻と確認する。

津波の警戒のため船を出そうと防寒着、食料（食パン5枚、あめ、りんご）を妻から受け取り、海岸まで下がった。町の防災無線で3メートルの津波警報が発令されたと放送された。船を出すスタンバイはできていたが、機関士の弟がまだ船に來ず待機する。

昔からの言い伝えで津波の時は潮が大きく引くと聞いていたので、海面を注意して観察していたが、その気配はなかった。大沢地区の方を見ると、船が何艘も沖に向けて避難していくので、早く出なければと焦りが募る。

3時5分ごろ、弟が来たので急いで船を出す。青灯台防波堤先を曲がる時、海底の泥が数カ所から湧き上ってきていたので潮が引いていく現象かと思い、タライ島、立神岩周辺を注視していたが、変化は見られなかった。まだ大丈夫だと思い、慌てることなく普通速力で進んでいた。沖ノ沢付近にかかった時、大沢明神を眺めていたら、松島けだ（海域）から波が盛り上がり、灯台

をのみ込み白くなって入ってきたのが見えた。これでは沖出しが困難かと一時思ったが、湾口に目をやると、中央より大浦けだの方が波がないようなので、そちら側から外海に出ようと舵を切り、全速力で機械を回した。しかし、船は進まず、引き戻される感じであった。

少しずつ何とか進んで大沢明神横にかかったところ、今度は引き潮に乗ったのか、20ノットぐらいの速度で外海に出ることができた。厳密に言えば引き潮で出されたようなものだ。

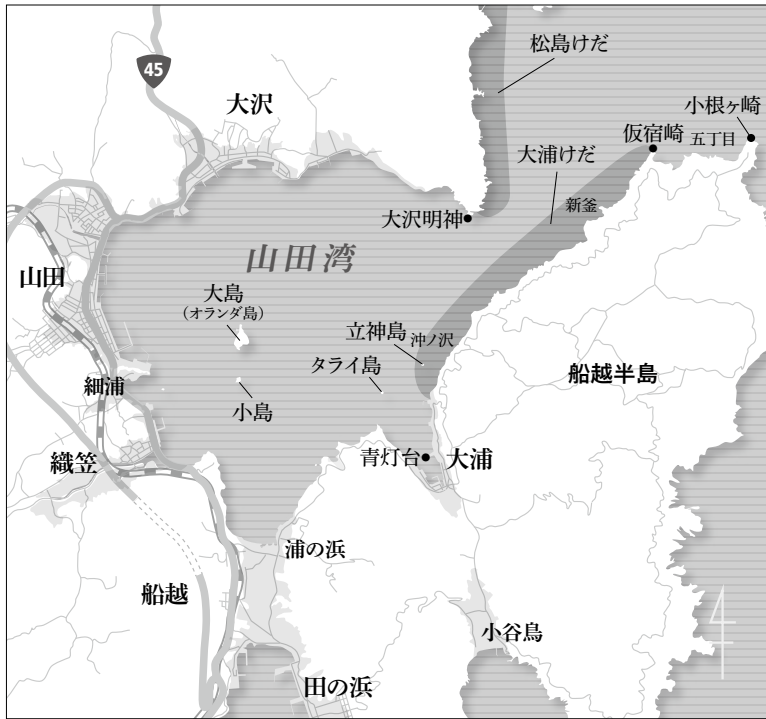
3時半ごろ、五丁目付近の沖まで進み、漂泊待機することとした。その場所からは織笠地区や山田地区が見えた。各地区からはそれぞれ煙が上がり、火災が起きているのが見えたが、大浦地区は陰になっていて様子が分からず、いったいどうなっているのか心配であった。

携帯電話、無線局とも連絡が取れなかったが、ただ一つ船間利用の無線機の一部で湾内待機の大杉丸と交信できた。その際、大浦地区では火災が起きていないと確認し安心する。

弟と2人でブリッジに上がり、流れてくる養殖いかたや家屋、流木をよけながら見張っていた。周囲では海面の上下は感じなかったが、魚群探知機で2〜3メートル上下しているのが確認できた。また、余震のためか小根ヶ崎の岩が土煙を上げ、大音響と共に崩れ落ちるのが見えた。

夕方になり寒さも増してきた。空腹で立ち通しも大変になってくるので錨泊^{びようはく}をしようと考えたが、流木等の漂流物に当たって船が壊れてもいいけないと思い、湾内の退避船と合流することとし、漂流物に注意しながらスローで湾内に向かった。

湾口に入ると、山田地区で火災が広範囲で起こっていることがはっきりと確認できた。空が赤



地図内の■は津波の浸水範囲

く染まり、時々車やガスボンベ等が爆発する音が何カ所からも起こっており、この世のものとは思えなかった。湾内には30隻ほどの退避船がいて、その光景を見守るしかなかった。

翌12日、夜明けの海は一面の漂流物で操船もままならない様子だったが、無風状態でありスロー航行、または停止しては静かに進み、青灯台に向けて船を走らせ、潮の上下や周りの様子を見た。まだ1メートルくらいの潮の変化があるので着岸は困難だった。

大浦地区でも多くの船が流された様子なので、被害状況の調査や搜索等に健在の船が必要と思いい、組合の監視船が新釜付近で漂流していたのが見えたので曳航することとしたが、漂流物が多数あり困難を極めた。大浦まで曳き、風が多少出てきたので監視船は錨をした。大浦港に近づき見渡したが、海岸に人影は見えず、空腹は頂点に達していた。

青灯台を越えていつも船を着岸している所まで行けば、家の者が気付いて何とかなるのではないと思い、何回も巡回したが陸からの反応はなかった。それでも気付いてほしい一心でまた巡回する。何回目かの巡回でやっと長男が岸壁に現れ、手を振って合図した。すぐに接岸し状況、家族の安否を確認した。長男は「全員無事だから安心しろ」と言い、おにぎりを手渡してくれた。自分の目で被害を確認しなかったが、堤防の陰で陸の状況は分からなかったし、またいつ津波が来るか分からない状況なので、すぐまた離岸した。

夕方になっても潮の上下は続き接岸はできず、組合の荷受場前に定置網の土俵網が浮いていたので、それに係船して一晩過ごすこととなった。翌13日午前7時ごろには潮位の変化が収まり、やっと接岸できた。先に上陸した弟が「とんでもねー」と何度も発する。私も船から上がった。堤防のアルミ門をくぐった瞬間、倉庫が二つに折れて山側に寄せられ、周りの家々もなく、漁具も流され、電柱も倒れ、あらゆるものが散乱した変わり果てた漁村の姿が目に入った。目の前の光景を信じることができず、ただぼうぜんとしていた。

10時ごろ、海上自衛隊の方々がボートで駆け付けてくださり、対策本部の所在を聞かれた。今

まで大浦地区は孤立していたこと、妻は炊き出しで家におらず、船が何度巡回しても気付いてくれなかったことをやっと理解した。私は運よく助かったが、船を沖に避難させようとしたが間に合わず不幸にも津波の犠牲になった仲間たちの話を聞くにつけ、船を守りたいという漁師の気持ち痛いほど分かり、胸が痛んだ。私の行動が正しかったのかどうか、今でも分からない。しかし、また地震が来ても相棒の「稲荷丸」を助けようとして浜に下がるだろう。

何も持たず、すぐに高所へ

【大浦】

6

山崎卓三（85歳）

あの日は、実益と趣味を兼ねた、ホタテガイ養殖の沖作業を終わろうとして、老妻と2人で頑張っていた。俺は愛船聡栄丸の船中におり、家内は岩壁で陸揚げした養殖資材の整理整頓をしていた。俺は、明日、数万余にも及ぶ稚貝を養殖施設の何番枠の何番へ、どうしたら効率よく、迅速に垂下の作業を行えるだろうかと思案の最中であつた。

船中で大津波に遭遇するなんて夢にも考えていなかった。平成18年度、地域の防災会議の資料で、今後30年以内に宮城県北部の沖合を震源とする地震が99%の確率で発生するという予測があった。しかし、30年を経ずして東日本大震災という大天災が起き、世界でも例を見ない津波に

よる原発事故を経験した。その恐怖がわが県の産業にも大きく影を落している。

「海の上でも地震が分かるものでしょうか」とよく聞かれる。よく分かるものだ。突然の大激震に俺は驚き、とっさに岸壁上の家内を見ると、どうすることもできず、岸壁にへばりついている。俺は船中に立っていることもできず、船縁にしっかりとつかまっているだけだった。揺れ動く船中から、何の気なしに海底を見ると、何と、今まで全く見たことのない異常現象が起きていた。海底が真っ黒になってもうもうと湧き上がり、沖の方へ移動している。目の錯覚かと見直しても同じであった。これは駄目だ、大津波が来ると直感し、岸壁上の家内に大声で叫んだ。「婆さん、駄目だ！ 津波が来る。早く逃げろ」。俺は何とか、婆さんに船から引つ張られて陸に上がった。

事故に遭って以来、足が悪いので耕運機を運転して岸壁から防潮堤の門扉の方へと向かう。消防団の誘導で道路に進み、明治、昭和8年の大津波も到達せず安全だった所にある倉庫の前に耕運機を置いた。すでにその周辺には多くの人たちが津波を見ようと集まっていた。俺は昭和8年の津波はかすかな記憶だけある。35年のチリ地震津波は早朝から日中だったので目撃した。

いろいろな角度から海を見ていた人が、「津波が来た！」と大声を発した。だが、誰一人として恐怖と緊張のあまり、その声に応じられなかった。第1波、第2波と防潮堤に大激突。その響きと同時に防潮堤の高さの何倍にも立ち上る水柱と飛沫。防潮堤を軽々と乗り越え、高所から落下するというより、大きく口を開いて襲い来るテレビ漫画の怪獣のようだ。明治、昭和8年の闇

の中を襲来した津波とは雲泥の差。今度のように津波の実態を見た人は少ないと聞いている。俺は安全と思われる場所にいたが、2波、3波が急激に来襲したので、皆でさらに高い方へ移動した。長靴を履いていてよかったが、足元をさらう津波の流れはとても強く、津波そのもののエネルギーを感じた。何とか津波から脱出したが、いろいろ大事な物を詰め込んでいた倉庫が、再三にわたって襲う大津波に耐えられず、目の前で大破。中身を何も残さずに流失した。ひどく落胆して帰途に着いた。

数日後、被災の興奮覚めやらない中、親しい友人と出会ってお互いの健在を祝した。危機一髪の体験を聞いたが、もしこの津波が明治や昭和8年のように夜間に来ていたらと思うとぞっとする。こうして津波を乗り越え、皆と話ができるのも、神仏の御加護と、古老の方々と祖父母の語った津波の教訓のおかげだ。彼らは異口同音に「大地震の後には必ず津波が来る」。その時には何も持たずに誰よりも早く、高い所へ逃げよという。

人は自然を征服しようとして堤防を築いたが、できなかった。「人は、人を征服できるが、自然はできない」ことを見せ付けられた。まさに自然の脅威である。

大浦婦人会長 阿部秋子（55歳）

4日ぶりに22歳の息子に会えました。

町までの町道は、5、6メートルにも及ぶ漁具や船、一瞬にして剥ぎ取られた私たちの財産で寸断され、山を一つ越えないと確かな情報が得られなくなりました。山越えをしてわが家を目指して帰ってくる人たち。

私は山に向かうように新たにできた一本道で、息子を待ち続けました。息子もわが家を目指して歩いていると信じて……。疲れと余震の恐怖、そして寒風の中、悔しさと、「もしや」と思う悲しみで身体が崩れそうに痛くても、母としてそうせずにはいられませんでした。

山から下がつて来る米粒くらいの人影を涙目に見つけては、足元のぬかるみに足を取られながら、声を掛けながら走りました。

「どこから帰ったの？ ほかはどんな？ どんなになっっているの？」

顔なじみの彼は表情を変えることなく、淡々と、自分が歩いて来た道々の悲惨さ、その目に焼き付くこの世のものは思えぬ光景を語ってくれました。息子より二つ年下の彼は「おばちゃん」とただただ抱きつき、泣きじゃくりました。私は息子のことなど聞くことができなくなり、

「母さんはあなたの帰りを待っているし、家は大丈夫だからね。早く顔を見せて安心させてあげて」と言いました。彼の母親の喜ぶ姿と、自分が息子と会えた時の姿が重なって涙が止まりませんでした。彼の体の温もりも、息子の温もりと重なりました。

その後、避難所で食事の支度をしている時に「おかあー」と息子から肩をたたかれました。被災後、何回か、いや何千回も「返して、私から息子を奪わないで」と願っていたので、私は思わず声高く名前を呼び、自分の心に素直に、人目をばかすることなく泣きました。その晩、叔母の家の2階で息子と床を並べて寝ました。

息子は、かろうじて生き残った人は内陸方面に避難したという誤った情報を耳にし、夫と私を探していたと、穏やかな重い口調で話してくれました。闇の中、息子の布団のふくらみを横目で見ながら冷え切った身体を丸めて、息子の心に包まれ眠りに入りました。朝方、息子のザックの中の衣類をたみ返しました。手探りでたみ返しました。夢も希望も吸い取られてしまった気持ちから抜け出し、初めて闇の中でも充分に幸せを感じました。

今まで、幸せを求め、道に迷ったり、挫折したり、思えば物に惑わされ、欲張りすぎていたかも……。いつも幸せはちゃんと隣にいてくれていたのです。

その後、じきに町道が開通してからは、その道を通ることはなくなりました。息子を待ちわびて苦しかった時の心境に触れなくなかったし、嫌な思い出は忘れなければ生活できなかったから、その道を見るだけでも気が減入りました。

それからまた春が来て桜の散るころ、勇気を出してその道を歩いてみました。急に涙が出て止まりませんでした。あの時は自分の足音を耳にしながら、下を向き、落ちる涙をぬぐいながら、顔を上げると、迫るようにあの山々が見えました。

私は道に咲いたタンポポを摘み、しばらくじっと立ち止まっていました。その時、背後からあの時の自分の足音が軽やかに私のそばを通りすぎて行った気がしました。振り返ると、海はまぶしいほど光り輝き、どこまでも広く穏やかでした。

自然の大きさの中で「生かされている」と肌で感じ、亡き友の名をつぶやきながら帰りを急ぎました。

「明日へ向かって」第1集

父の教訓を語り継いで

【大浦】

8

小林かき子（61歳）

東日本大震災で多くを失った苦しみや悲しみは、いまだ癒えることはありませんが、知り合えた多くの方からの支えがあつて今日があることに深く感謝しています。

あの日の大地震は、突然に大きく地球の底から突き上げられているようでした。ドンドンと強

い地鳴りと建物のきしむ音、天窓や蛍光灯が天井から落ちて来るようで、揺れは収まるどころかだんだん強くなります。こんな地震は生まれて初めてで、ただごとではないと感じました。「大地震の後には逃げる間もなく大津波が来るものだ」との言葉が頭をよぎり、避難の行動を起こすことができたものと思います。

高台に避難している最中、山火事は広がり、炎で空は真っ赤になり、すぐそばまで来る恐怖を感じて、地区の避難所へ移動しました。着の身着のまま、ただただ寒さを我慢し耐えている時、避難所の近所の方々が毛布や衣類を届けてくださいました。そのセーターを着た時の暖かさ。今まで張り詰めていたものが解け、涙が止まりませんでした。

避難所での生活は、震災前の生活とは一変しました。寒く凍った長い道を水くみに通い、重いバケツを両手に持って帰り着いた時には水が半分ほどしか残っていないかったり、寒くて眠れなかったりとつらい事もありました。少しの物も皆で分け合ったり、家族同様に声を掛け合ったりの共同生活だったので、乗り越えられたのでしょうか。今では思い出ともなっています。

いつも平凡で当たり前の生活の一つ一つが至福の時である事を強く感じています。あの突然の大地震の時に、明治生まれだった父の次の言葉がよみがえります。

「地震が来たら出入り口の戸を開けておかないと、戸がゆがむなどして出られなくなる」

「地震の後は津波が逃げる間もなくすぐに来るから、どこにいても道なりではなく、山をめがけて逃げろ」

「どんな大事な物でも絶対に取りに戻るものでない」

父は折に触れ私たちに諭していたものでした。予報だけにとらわれず、自分たちの肌身で感じ得た事を言い伝えていた大切さを感じています。大地震、大津波、火事、原発事故と、この大震災は戦争のようなありさまでした。

失った多くのものを取り戻すことは大変困難ですが、支えてくださった皆様に感謝を忘れず、二度とこのような大災害時にも犠牲者を出さないように次世代の一人一人の胸にとどめ、いざという時、身を守る行動ができるよう語り継いでいきたいものだと思います。

「明日へ向かって」第2集

悲しみも感謝の心も忘れない

【大浦】

9

漣磯一美すくいそひとみ（46歳）

突然、大きな音と大きな揺れ、書棚からはファイルが飛び出し、机の上の物が滑り落ち、パソコンと音を立てて電気が消えた。自宅に電話をかけたが既につながらない。

まさか二度とこの場所に帰って来ることができなくなるなんて思うはずもなく、散らかった書類を片付けて私は八幡町の職場を出た。

車に乗るとワンセグ放送で津波の到達時刻が目に入った。「もう間に合わない」と自宅に帰るのを諦め、他の車につられるように役場駐車場までたどり着いた。それから、あの恐ろしい津波が街に襲いかかった。家族はそれぞれ安全な場所にいと信じていた。けれど、自分は無事でここにいと伝えることができない。どうにもできないまま辺りは暗くなっていった。

次々と聞こえてくる爆発音、燃え上がる街、火は役場付近まで迫って来た。私は真夜中に山田北小学校まで歩いて避難し、そこで朝を待った。翌朝、宮古から何とか帰って来たという人と一緒に、中学生が避難している山田高校へ行き、無事に子供たちと会うことができた。そのまま馬指野まさしのの義姉の家に世話になり、自宅に戻ったのは4日目の午後だった。

義姉の家にいる間、大浦は山火事が民家の近くに迫っていて、住民は遠野にへりで避難するなどの情報もあったが、空からの消火活動により、火災からは守られた。日々明らかになってくる巨大津波による被害の大きさ、死者、行方不明者、原発事故、目の前に広がる惨状、帰らない大切な人たち。毎日泣いてばかりだった。そんな中、多くの支援物資やメッセージが毎日届けられ、世界中の人が私たちを応援してくれていると感じた。「がんばろう東北」「がんばろう山田」の言葉を目に、耳にただけで胸がいっぱいになった。

2年を過ぎた今も、そしてこれから先も、あの悲しみ、つらさを忘れない。感謝の気持ちも忘れない。

自身の家族の事を案じつつ、子供たちを守ってくださった学校の先生方、電気を、水を、電話

を、一日も早く復旧させようと必死に作業をしてくださった人たち。汗とほこりにまみれながらも、被災地のために働いてくださった全国各地の警察、自衛隊、消防、ボランティアの方々に感謝したい。

「復旧・復興がなかなか進まない」とつい不満を口にしてしまうけれど、世界中の人たちにたくさん助けられ、支えられていることを胸に、私たちも未来に向かって努力していかなければと思う。

「明日へ向かって」第2集

傾聴活動の幅を広げたい

【大浦】

10

横田章子（73歳）

大津波が来た日の事は、いくら語っても語り尽くせない、一人一人いろいろなドラマがあったと思います。恐らく、一人一人の心に、深く深く残っていることでしょう。

今日の海はますます青く、何事もなかったかのように広くゆったりとしています。あれから、町では復興に向けて全町民が協力して取り組んでいます。たくさんの方の支援を頂き、感謝でいっぱいです。

私は幸い家も家族も無事でした。「家がある人たちはいいよね」。そんな言葉に申し訳ない気持ちになったりもしましたが、卑屈にならず、いつも応援して明るい言葉に変えてまいりました。仮設に落ち着いたとはいえ、まだまだ不安を抱えておられる人々に対して、今、私に何ができるかを考えております。

入院している人たちが相手の傾聴ボランティアを以前からしておりましたが、仮設に住んでいる人たちにも目を向けて、私にできることから始めようと思っております。悩んでいる人のお話をよく聴いてあげようと思っています。心の底に眠っている自覚しなかった思いや願いに気付いて、プラス思考が湧くように心を開いてあげられれば最高なのですが、なかなかそこまで到達しません。失敗の連続です。

けれども何度かお会いしているうちに、「心のもやが晴れたよ」と言ってくれた時はうれしかったです。でしゃばらず控えめに、いつも寄り添って見守っております。どうぞ、家が残っている人たちも応援しているのだと、常に心に置いてください。そして、一日も早く自分らしい生活を取り戻すことを願ってやみません。

「明日へ向かって」第2集

豊間根 荒川

Toyomane / Arakawa

7 *chapter 7*

荒川農業構造改善センターで被災町民の
ためにおにぎりを作る女性たち
(3月26日午後1時23分撮影)
家の光協会写真部提供



豊間根中学校3年 福士広大

あの日から僕の人生は変わった。その日は掃除が終わり、帰る準備をしていた。その時、大きく学校が揺れた。今までにないくらい大きな長い地震だった。防災無線で津波警報が発表された。さすがにここまで来ないだろうと思ったが、父が心配だった。父は仕事で石巻にいた。海の近くで仕事をしていた。母や兄は仕事が休みだったので家にいた。姉は大槌で仕事をしていたが、海にそれほど近くないので、仕事場の人たちと一緒に避難していると思い、心配していなかった。心配だったのは父一人だった。

家に帰ると家族は外にいた。そこには父の姿があった。その日はたまたま休みだったらしく家に帰ってきていた。僕はほっとした。これでもう大丈夫。家族みんな無事だったと安心していった。姉はさすがに帰ってくることはできないだろうから、2、3日くらいしてから戻ってくると思っていた。

次の日、父と一緒に父の実家の大沢に行った。信じられない光景がそこにはあった。美しい町が消えていた。建物が破壊され、町は跡形もなくなっていた。あまりにもひどい情景だった。父の実家もなくなっていた。声が出なかった。その足で姉を迎えに行った。大槌は想像以上に被害

がすごかった。ここまでは来ないだろうと思っていた姉の仕事場まで津波は襲い、仕事場は消えていた。避難所にいるだろうと思い、それから、すべての避難所を回った。が、姉はどこにもいなかった。

仕事場の人はいたが、姉だけがいなかった。何回も何回も避難所を回ったが、見つからなかった。家族みんなで探したが、見つからなかった。何度も何度も仕事場の跡地に行って探し、手がかりになるものはないか探した。探しても、探しても見つからなかった。絶望の中に家族全員がいた。

数日後に学校へ行った。クラスのみんなは無事だった。みんなの親、きょうだいも無事だった。僕は姉のことを考えると、つらくて、つらくてたまらなかった。大好きな姉。僕の理解者だった姉。学校にいても思い出し、泣き出しそうになったことが何度もあった。しかし、友達のおかげで救われた。励ましてくれ、今まで通りに接してくれた。一緒に笑い、たくさんのかたちと一緒にやることで、つらいことを忘れさせてくれた。

姉のことは一日も忘れたことはない。その笑顔、会話が次から次へと浮かんでくる。見つからないことで悲しんでいる母親を見ることがもつらかった。僕は生きていると信じていた。信じていたかった。

震災から数カ月後、1本の電話があった。姉が見つかったという内容だった。DNA鑑定の結果、一致したという。「ようやく見つかったんだから、納得はいかないと思うけど、姉ちゃん

は家に帰ってくることを望んでいたのだし、お帰りと言ってあげよう」と父は言った。姉は無事で帰ってきた。僕は涙をこらえて「お帰り」と言って迎えた。

あの日、多くの命が一瞬のうちに失われた。今も多くの人の行方が分からない。ニュースで震災のことを聞いたたびににつらく悲しくなる。震災さえなかったら、津波さえなかったらと思うことも多い。

僕はこの震災で命のはかなさを思い知らされた。あつという間に命が失われることも知った。心が引き裂かれるような絶望感にも襲われた。しかし、だからこそ、「生きる」ということの大切さが分かった。命の尊さを実感することができた。

今は、大好きな姉の分まで精いっぱい生きたいと考えている。「僕はがんばっているよ」といつでも姉に自信を持って言える自分でありたいと思う。僕を支えてくれたすべての人のために、家族のために、何より姉のために、僕は前をしっかりと見て、一歩一歩着実に歩いていきたいと思う。生きていることに感謝しながら。

「やまだの作文」第40集

油断と過信があつた

【豊間根・荒川】

2

内田 明（64歳）

私は、昭和24年に東京都練馬区で生まれた。小さいころから生き物を育てるのが好きで、海への憧れもあり、東京水産大学増殖学科に進んだ。

入学してから大学紛争が激化し、大学が閉鎖されたりする中、私は友人2人と連れ立って沖縄に貝の採集旅行に出かけた。当時沖縄はアメリカの施政下であり、入域の許可をもらって3万円を100ドルに替え、東京晴海ふ頭から出港した。

目的地は石垣島の川平湾^{かびら}。川平では、古民家1軒を借り切って長期滞在し、毎日海に潜り、海岸を散策して暮らした。

川平湾には外洋に通じる深いV字谷がある。現在は遊泳禁止だが、何も知らぬ私たちはそのV字谷で強い流れに引き込まれ、外洋に流されそうになった。何とか自力で助かったが、半鐘を鳴らす遭難騒ぎとなり、集落にいられなくなった。

石垣市に戻って民宿に収まると、することがない。友人の提案で山に登ることにした。石垣島には、沖縄で最も高い於茂登岳^{おもとだけ}（標高525・5メートル）がある。私たちは歩いて山に向かった。

道々、不思議な光景を目にした。巨大なサンゴの塊が山麓のあちらこちらにころがっているのだ。海岸にあるべきサンゴの塊が、なぜ山麓にあるのか、理由は分からない。山頂は開けていて小さな展望台があり、360度のパノラマが素晴らしかった。

石垣市に帰って、山麓に散らばるサンゴの塊のことを聞くと、江戸時代の「明和の大津波」によって打ち上げられた物だという。高さ80メートルの大津波が、東から来て西に抜けていったのだそうだ。サンゴの塊は高さ80メートルの大津波として、私の脳裏に焼き付いた。

昭和51年10月、私は山田町の水産専門職員に採用され、定年まで水産一筋で働いた。

昭和53年5月27日に結婚し、新婚旅行から帰ってすぐの6月12日の夕方、宮城県沖地震に遭遇した。津波警報が鳴り響く中、私は新妻を連れて高台に避難し、三陸海岸の恐ろしさを実感した。「安全な場所に住もう」と、私たちは土地探しを始め、豊間根に目を付けた。地価は安く、津波は届かず、国道45号が寸断されても、盛岡に通じる近道がある。昭和57年暮れ、私たちは豊間根に移り住んだ。

それから28年後、巨大津波が三陸海岸を襲った。

3月11日、私は三陸やまだ漁協の嘱託職員として、山田漁連魚市場の2階で働いているはずだった。しかし、長男が青森市から盛岡市に引っ越す日に決めたため、午後には妻と2人で盛岡に手伝いに行かねばならない。漁協を休み、午前中だけ、4月から働くことになっていた町立鯨と海の科学館でアルバイトをしていた。

正午で切り上げ、町の保健センターで働いていた妻と合流し、自宅に戻って昼食を取った。午後2時ごろ出発し、津軽石回りで国道106号に出て、茂市を過ぎた辺りで携帯電話が緊急地震速報を受信した。私たちは、孫を迎えに盛岡へ走らねばならない。

3月15日、私は山田に戻り、娘が働く豊間根保育園で娘と再会した。豊間根の町並みは普段と変わりないが、保育園と、隣接する生活改善センターは避難所になり、自宅近くの健康増進センター体育館が遺体安置所になっていた。体育館の玄関に張り出された収容遺体の名簿には、職場の同僚をはじめ、多くの知人の名前が並んでいた。私は中に入れてもらい、同僚の遺体に手を合わせた。遺体安置所には、家族を探す人が引きも切らず訪れていた。

私は4月から無職になり、役場に頼まれて5月から8月まで豊間根中学校避難所の運営責任者を務めた。被災者は皆、生きること懸念で、家を流されたことや、家族を失ったことを自ら話す人はいなかった。

避難所には、和歌山県、高知県、沖縄県、兵庫県など、多くの自治体から支援の職員が入れ替わり、立ち替わり来た。彼らは支援するだけでなく、津波の被害や避難所の運営を体験するために来ている。私は彼らに、努めて津波談義をした。

21世紀の今日、先進国と言われる日本で、なぜこれほどの津波被害が出たのか。「大した津波は来ない」と高をくくったの油断、防潮堤の過信が原因であるに違いない。住民のみならず、住民を支えるべき役場、消防署、病院さえ被災した。多くの防潮堤が、基礎から倒壊した。戦国時

代なら落城ではないか。

私たちは、「高台に逃げる」「高台に住む」の津波対応の原点に立ち返り、自分と家族の命を守らなければならない。国・県・市町村には、沿岸のどこにいても3・11大津波の到達点が視界に入るよう、各所に表示してもらいたい。合わせて、国には早急に、沖合で検知した津波波高を国民に確実に速報するシステムを構築してもらいたい。

津波の力は強大であるが、地震と異なり、私たちに逃げる数分間の余裕を与えてくれる。その数分間を無駄にするなど、陸前高田市の県立病院4階病室でカーテンにつかまり、かろうじて助かった津波研究者が言っている。その人はすでに亡くなったが、『津波てんでんこ』という名著を残してくれた。地震国日本に住む人必読の書である。あなたは読みましたか？

後方支援に徹して

【豊間根・荒川】

3

荒川婦人会長・荒川婦人防火クラブ会長・町議会議員 吉川^{きつかわ}淑子（70歳）

3・11は山田町定例議会の最終日であった。議会再開が午後3時なので、15分前に議場に入ろうとした矢先、大地震が起きたのだ。議場がう階段なので揺れがものすごく、立っていることも困難で、その場を離れることもできず、誰もが右往左往した。いつまでも続く揺れに、このまま庁

舎も崩壊し、「私はこれで終わりかもしれない」と恐怖を感じた。その後、何とか1階に下り、役場駐車場の車の前に来た時、目を疑った。ドドーン、ドドドーンと今まで聞いたこともない轟音を上げ、大津波が襲って来たのだった。

あちこちにベージュ色の煙が山のように大きく立ち上り、まっすぐ立っているべき電柱が、こんなにやくのようにグニャグニャと激しく揺れ動く不思議な光景。家々がゴシヤゴシヤと木の葉のように流れ、たちまち足元まで押し寄せて来た。「これはテレビのスローモーションか」。紙芝居を見ているようでもあり、錯覚だと思った。逃げ惑い、ようやく避難して来た人たちは「また、大津波が襲ってくるかもしれない」と言い、さらに高台を目指して移動を始めた。

私は八幡神社の境内まで皆と一緒に上がって行った。大勢の中にはけがをしていたり、ずぶ濡れだったりする人もいた。やがて地震が収まり、黒い水が引いていった。もはや誰も声を出す人もなく、辺り一面、シーンと奇妙な静けさに包まれた。それもつかの間、今度はバーン、バーンと爆発音が上がリ、そこからボツ、ボツと炎が立ち上り大きくなっていった。やがて戦場のような様子に変わっていった。車が家に乗り上げたりひっくり返ったり、数多くの車のクラクションがビィー、ビィーと異常を知らせるかのように、切なくいつまでも鳴り響いていた。

下の方から男の人たちが何か毛布にくるみ、重そうに運んで来る。「何だろうか?」。毛布の中がチャッと目に入った。それは痛ましく恐ろしい現実だった。私は両手を合わせ、ただ祈るだけだった。やがて暗くなり、寒さが襲って来た。女性たちはトイレに困り、その都度、私は携帯電話

話の明かりで案内した。紙は詰まるから流さぬよう注意し、皆が協力し合った。

その間も周りはどうどん火が広がり、熱さも感じるようになってきた。じわじわと駐車場にも迫ってくる。「車に引火したら危険だ」と言われ、慌てて公民館の方へ車を移動させた。夜中になり、皆、中央公民館に集まるよう伝えられた。中央公民館は入り切れないほどの人でぎっしりだった。千人以上はいたであろうか。皆、寒さと恐怖で震えていた。コンクリートの上にずっと立っていることもできず、うずくまる人、疲れ切って横たわる人もいた。

午前0時過ぎ、外は見渡す限り全て真っ赤になっている。「どうなるのだろうか……」。不安で皆身を寄せ合っている。刻々と時は過ぎていく、これだけ大勢の人がいるのにおしゃべりをする人もなく、シーンと静まり返り、深刻になっていた。

そんな中、私の隣にいた若い女の人がつぶやいた。「私たち、これからもう何も食べることができなくなるんだね……」。私は「そんなことないですよ。荒川婦人防火クラブの人たちが、今ごろ寝ずに炊き出しをしているはずですよ。明日は食べられますよ。間違いないから大丈夫」と言った。それを聞いていた周りの人たちの厳しかった顔が少し緩み、ちょっと安心したかのように見えたので、私はいくらか救われる思いがした。

午前2時ごろ、「車が通れる道ができました。ここから豊間根方面に向かってください。バスも来ますが、車のある人は先になるべく子供や弱者を乗せて行ってください」と役場の人が言った。「さあ脱出だ」。私は急いで自分の車に飛び乗り、「誰か乗ってください。3人乗れまーす」

と叫んだ。小さな子供の手を引いたおばあさんと、赤ちゃんを抱いた若いお母さんの4人が後部座席に乗り込んだ。前の席にもう1人乗れる。「あと1人乗れます。誰かー」。外には暗闇の中、公民館の入り口の前に大勢の人が立って、皆こちらを見ている。その中から1人、杖をついたおばあさんが皆に促されて出てきた。よし出発だ。「お先にすみません」と叫びながらアクセルを踏んだ。膝がガクガクする。背を丸め目を凝らし、真っ暗な山道を豊間根目指して運転した。やっと、避難所の豊間根小学校にたどり着いた。

だが、私たちが先着らしく避難所はまだ開いていない。小さな子のおばあさんと若いお母さんに、「避難所に置いていかれたら凍えてしまいます。親戚の家がありますから、そこまで送ってください。何とかお願いします」と懇願され、4人を送って行った。88歳というもう1人のおばあさんは、そのまま私の家まで連れて帰り、ものすごく寒いのですぐ私のベッドへ入れ、さらに毛布を何枚も掛けてあげた。

安堵してわれに返った時は朝3時を過ぎていた。4時過ぎになり、荒川農業構造改善センターに行った。センターでは私が信じていた通り、炊き出しをしていた。婦人会の人たちはもちろんのこと、地域の皆さん、学校の校長先生まで皆協力し、必死で支援してくれていた。

その後、避難所に炊き出しを届けてから、被災された方たちの中に入って行き、「今、何が一番必要ですか」と聞いて回った。その惨状を私は黙って見過ごすことはできなかった。一刻の猶予もないその大変な事態を皆に知らせ、独断であったが、荒川地区全戸に支援物資をお願いし、

出してもらうことを決断した。各班長に物資を集めてくれるよう依頼した。皆、ガソリンもない中、家々を回り、頑張って多くの物資を集めて協力してくれた。どこの家でも快く提供してくださったとのことで、本当にありがたかった。

何日も家に帰らず、情報収集をし、避難路を確保した役場職員の方々、お互いに励まし合った避難所の皆様、炊き出し支援などで命をつないでくれた多くの方々、すべての人に感謝したい。

「明日へ向かって」第1集

感謝の心を子や孫に

【豊間根・荒川】

4

尾形マサ子（68歳）

私の住まいは静かな農村地帯にあり、農家の仲間20人で、小さいながら産直の店舗を営んでいます。

東日本大震災では津波を免れましたが、大きな揺れ、寒さと恐怖で誰もが震えておりました。その時から豊間根地区は、大津波と大火事で山田から避難して来た人たちでいっぱいになりました。

役場支所前の広場には自衛隊や消防車のほか、大勢の人たち——はだしの人、足に包帯を巻

き、木の枝をつえにしている人、愛犬と逃れて行き場のない人、一斗缶でまきをたく人たち、身内の安否を確認する人など——が集まって来ていました。支所の窓口は人手不足で対応し切れず、パニック状態でした。私たち新田地区の農業集会所でも被災者を受け入れ、父ちゃん、母ちゃん、誰もが協力し行動しました。

豊間根小学校にも避難者があふれ、先生方も対応に大変なので、同じ地区の者として少しでも手伝おうと何回も通いました。私たちは、心から支援しなければという気持ちでいっぱいでした。私は内陸生まれで津波の恐ろしさ、怖さを半分も知らず、炊き出しに支援活動に無我夢中になっていました。

時が過ぎていくうちに、人づてに様々な消息を聞き、大変つらいことばかりでした。「シーサイドから」（介護老人保健施設）にいた義母をはじめ、とても大切な身内の人たちが犠牲となっていました。

家を失くした親戚、店や職を失った兄弟、そして津波にのまれた、お世話になった友人、義母の介護をお願いした方、施設職員の方々、産直で出会ったお客様……。どうしようもなく悲しい思いが今も駆け巡ります。お客様や友達を励まそうとして、反対に私の方が励まされ、元気を頂くこともあります。私は当たり前の事をしたのですが、今でも「あの時は、ありがたがったあがすう」と声を掛けられ、お礼を言ってくれる方がいます。私の方が感謝でいっぱいです。

遠くからわざわざ心配して来てくれた知人、全国、世界各国の皆様からも支援していただき、

とてもありがたく思っております。これから食料、生活必需品の大切さ、皆様から頂いたご恩、感謝の心を忘れることのないよう、子や孫たちへ伝えていきたいと思っております。

「明日へ向かって」第2集

「結いの精神」あってこそ

【豊間根・荒川】

5

荒川婦人防火クラブ副会長 斉藤順子（58歳）

あの日は、豊間根の会社の事務室でいつもと変わりなくパソコンに向かっていた。午後2時46分、携帯電話からの警告音。「何だろう?」。ミシミシ、グラグラ、ドドドドと今まで経験したことのない、あまりにも不気味で異様な揺れ。「地震だ!」。収まったと思うと、またグラグラと何度も繰り返す。電気も電話も不通になり、慌てて車のテレビのスイッチを入れた。

その映像は、宮古の魚市場や「シートピアなあと」付近に津波が押し寄せて、車やコンテナがブカブカと浮いて流されている、信じられないような光景を映し出していた。「まさか!」。山田の現場から帰って来た従業員は「家も車も電柱も流され大変だ。自分の家も流された。この世の事とは思えない」と話してくれた。

余震が続く中、消防団から「支所に来てほしい」と団員が迎えに来た。急いで役場の豊間根支

所に向かった。本部、各分団も集まっていた。「津波の被害で山田が壊滅状態だ。豊間根全域で炊き出しをしてほしい」との要請であった。荒川地区には全戸加入の自主防災組織「荒川婦人防火クラブ」がある。何度となく炊き出しの訓練もあり、経験済みであったので何のためらいもなく引き受けた。

さっそくその準備で事務所に戻った。ライフラインがすべて切断されていたので地区の人たちへの連絡は足で歩くしかなかった。道を通る人に声を掛け、炊き出しの伝言を頼んだ。従業員も発電機、灯光機、ガソリン、灯油、石油ストーブ、お米などを荒川農業構造改善センターまで運び、取り付けてくれた。このころはもう薄暗くなって雪もちらつき、とても寒かった。

いち早く駆けつけてくれた前会長は米、梅干し、漬物、炊き出しに必要な材料を持参して足早に入ってきた。一人、二人、三人と地域の人が40人も集まってきた。皆「他に必要な物があれば持ってくるよ」と声を掛けてくれ、足りない物は持ち寄った。炊き出しは暗闇の中、発電機の電灯を頼りに作業を分担し、米とぎからおにぎりが出来上がるまでを何度も繰り返した。

作業中におにぎりを取りに来た、役場の職員が「山田の街中が大火事になり、行方不明者も多数いるようだ。亡くなった人も運ばれている。中学校の体育館には五、六百人の人が避難している。まだまだ増えるだろう」と語っていた。その話を聞き、おにぎりはまだまだ足りない、できるだけ作って早く温かいうちに食べさせてあげたい。炊き出しに携わった誰もがそう思うのだった。

5升炊きの釜5台をフル回転させ、2926個を作り終えた時、夜中の1時を回っていた。少し休憩し、早朝4時から始めることにして、いったん解散した。

寒さと暗闇の中、連絡の取れない親、兄弟、親戚、知人の安否が心配で身体が震えていた。他の人も同じだったと思う。

3時半、五つの釜のスイッチを入れた。50人くらいで作業をした。何度か繰り返していると、ガス釜の不具合が出てきて思うようにはかどらない。ここの釜だけでは足りず、各地区でガス釜がある人にご飯を炊いて持参してもらおうと頼んだ。「分かった」と皆が快く引き受けてくれた。センターに来られない人も炊き上がれば運んでくれて、スムーズにおにぎりが作れた。

炊き出しの合間に会長と各避難所に行き、「今何が必要ですか？」と要望を聞いて回り、必要な物を各地区へお願いして、毛布やタオル、衣類、新しい下着、歯ブラシなど日用品を届けた。街の中心地は黒く焼けたがれきの山で、写真で見た戦場のような光景でとても衝撃的だった。また、薄暗い中、煙と火事の臭いが漂っていた。甚大な被害はこの山田町だけではなく、東日本の広範囲であることが分かり、怖さが増してきた。

3日目、米も残り少なくなっていた。電気の不通で精米できず、家々から米を調達するのにも限界に来ていた。モミはあってもどうすることもできなかった。残り少ない米を心配した区長さんたちが、大型の発電機と精米機を探してきて精米してくれたので、どうにか炊き出しに支障を来さず続けることができた。

この炊き出しは4月8日まで毎日続き、物資の調達、運搬配給は4月29日まで続いた。これも普段からの人と人との交わり、人情ある「結いの精神」が当たり前に根付いている地域、荒川からできた成果だと思う。本当に「協力」のありがたさが身に染みる日々だった。

「明日へ向かって」第1集

炊き出しに熱い思いを込めて

【豊間根・荒川】

6

佐々木マサ子（62歳）

自宅で地震に遭った後、私はすぐ、食生活改善推進員としての自覚から炊き出しの指示を仰ぐと豊間根生活改善センターに向かいました。しかし、そこは人であふれていて、指示を待つどころではないと気付き、地区の上豊間根自治交流会館に急行、炊き出しボランティアの活動を始めました。

翌々日、自治交流会館では、津波と火災に追われ、中央コミュニティセンターから平安荘（特別養護老人ホーム）へと移動して来た、在宅の寝たきり高齢者と付き添い家族45人、大沢のグループホーム入居者とスタッフ22人を受け入れることになりました。地域から衣類や寝具が続々と集まり、会館内は座布団が敷き詰められて、寝たきりの人や車いすの人を休ませる避難所とな

りました。

炊き出し用の米は家々で持ち寄り、宝珠院（曹洞宗寺院）や豊間根小学校からも備蓄米や収穫米がたくさん集まって、おにぎりの炊き出しを開始しました。日増しに災害対策本部の豊間根支部から要請される個数も増え、地区の大勢の協力と、5升炊きの大釜2台がフル回転したおかげで、一気に300個のおにぎりができました。

500個や千個の要請にも対応できるようになるまでには、そう時間がかからず、協力人数の調整や、仕事の役割分担などを工夫しながら進めました。被災した人たちに、一つでも多く温かい物を届けてあげたいという強い思いからでした。

当時、自治交流会館の役割は三つありました。災対本部豊間根支部が要請した数のおにぎりを作り届ける▽宿泊者の食事作り▽近くの民家を借りたグループホームの人に食事を届ける——ことでした。当初はおにぎりと漬物だけでしたが、温かい汁物やささやかな副食も添えて届けられるようになり、胸をなで下ろしました。

宿泊の高齢者の中には専門医療を要し、救急車で運ばれる人も出てきて、大変心配しました。避難者の健康管理を不眠不休でしてくれた保健師や社会福祉士さん、遠方から駆けつけてくれた看護師さん、ヘルパーさんたちが皆の健康を案じていました。衛生面の配慮から、私たち炊き出しの者は入室できず、励ましの言葉を掛けてやると思うようにできませんでした。

1週間後、物資も徐々に増え、飲料水から缶詰、乾物類、生野菜等が配給となり、炊き出しを

する者も大喜びでした。限られた食材でどんな献立ができるのか、皆で工夫し、不足の材料を家から持ち寄って作った料理を喜んでもらえた時は、疲れも吹き飛ぶ思いでした。中でも、大量に届いたイワナやサンマなどを日持ちするように工夫し、みりん干しをたくさん作ったことが印象深いです。自治交流会館に避難していた高齢者が他の施設に入所したり、自宅に戻ったり、グループホームの皆さんも職員が自力で炊事できるようになったため、4月12日で会館の炊き出しは終了しました。

作ったおにぎりの数は2万2千個。この炊き出しを支えた老若男女は約1000人にのぼり、被災者を助けたいという熱い思いの大結集となったのでした。私はこのボランティア体験から、仮設住宅を回り、話し相手となる傾聴ボランティアを始め、現在も活動中です。

「明日へ向かって」第2集

住民と避難者が一丸となって

【豊間根・荒川】

7

根子光子（60歳）

東日本大震災の津波と火事で山田の街は壊滅状態になり、間もなく豊間根・荒川の全域で炊き出しが始まりました。八千代地区の炊き出し場所は、豊間根生活改善センターでした。そこは消

防車両や大勢の人たちで騒然としていました。地震直後、安否確認に回り、その時点で八千代地区は特に異常がなかったので、おにぎりの炊き出し要請に、すぐ地区の人たちを招集できました。最初の米は八千代地区で用意しましたが、次からの米は豊間根の農家の人たちから届いたものです。おにぎりは分量を心配することなく作り続けられました。皆が集まって炊き出しが始まると、おにぎりは順調に出来上がり、センターには、他の地区からのおにぎりも集まっていました。その間も豊間根の保育園や小中学校、集会所は避難所になり、大勢の人が避難して来ました。役場の人たちは対応に忙しく、おにぎりの受け入れと配達も人手が足りず、十分機能できる状態ではありませんでした。皆、必死だったので、協力している地域の人たちのいら立ちは大声になり、センター内は右往左往で、冷静さを欠く場面も多くありました。男の人たちは、足りない物の調達や物資搬入の手伝いなどのほか、炊き出しの場所を発電機で明るくしたり、避難所で稼働する数台の発電機の燃料補給のために寝ずの番をしてくれたり、地区一丸となって協力しました。

炊き出し作業も日付が変わり、大きな余震が襲う中、緊張と不安で疲れも見えてきたので、みんなはいったん帰ることにしました。翌朝の作業では、支援の食材で温かい物もでき、おにぎりは夜まで作り続けました。翌日からは勝山地区と作業を交代し、支援体制のサイクルもできました。おにぎり作りには、避難して来た人たちも一緒に参加していました。この事実はずひ伝えていきたいです。

「明日へ向かって」第2集

非常時の初動態勢をしつかりと

【豊間根・荒川】

8

荒川婦人防火クラブ副会長 芳賀恵美子（57歳）

宮古市の特別養護老人ホームでの勤務を終え、買い物をして自宅に着き、間もなくのことだった。体験したことのない大きな揺れに驚いて家を飛び出し、地面の揺れと地響きに立っていられずに座り込んだ。やんだと思いきや許すと、また大きな揺れと、物置小屋からガラガラと資材の崩れ落ちる大きな音がした。恐怖と不安を感じる中、またさらに大きな余震。停電で情報の寸断が起きた。

直ちに防災行政無線が繰り返し緊急放送を流す。「近所の方々と誘い合って避難してください。津波が来ます」。身内が心配になり、確認しに行った。そこで「シートピアなあど」（宮古市の観光施設）が津波にのまれるのをテレビの映像で見た時、私たち荒川婦人防火クラブの災害時の役割である炊き出し、救援活動をすぐにしなければならないと思った。情報手段が寸断されているので、連絡を待っていても来ないと考え、炊き出しの作業をする荒川農業構造改善センターへ駆けつけた。

しかし、鍵が開いていない。急いで借りに行くと「消防団の第13分団が借りて行った」と言われ、こんなときは管理者自身がいち早く開けておくべきだと、役割分担の必要性を感じながらセンターへ戻ったが、まだ誰も来ていない。いつもは防火クラブの会長の指揮のもとで行動していたので、どうすれば良いのか迷ってしまった。

まずは自分の地区だけでも自分が責任を持たねばと考え、地区長宅へ行き、炊き出しの動員でセンターへ集合してもらうことの連絡をお願いし、戻った。各地区から徐々に集まってきた人たちと相談しながら炊き出しを行い、今までの訓練の成果もあり、手際よく協力的に進んだ。作業は深夜まで続いた。その時、防火クラブの会長（吉川淑子さん）は山田にいてまだ帰っていないことが分かった。「会長は無事だろうか。私の職場はどうなっているだろうか」と心配だった。

炊き出しが終わったのは深夜の1時を過ぎていたが、勤め先が心配だったので、1人で車に乗り、山道を回って闇夜の中、宮古へ向かった。職場では非常時のために、ある程度の救援物資（米）は備蓄してあるのだが、職員の分はない。翌朝には職員たちの食料を作り、職場に持って行った。

このことで、支援する側に対しての配慮も大事だと気がついた。幸い荒川地区は農業地帯なので、何とか米は集められ、精米機や発電機を常備してくれた方々の協力で、しのぐことができた。今回の大震災で、災害時の初動態勢をしつかりするために、救援物資が届くまでに必要な物資の常備の仕方や分量、保管のあり方、避難所や炊き出し場所の管理体制を日頃から具体的に検討

し、整備しておくことが重要だと感じた。

「明日へ向かって」第1集

おにぎり作り続けた1カ月

【豊間根・荒川】

7

三ヶ尻ミツ子（63歳）

恐怖の大地震の時、仕事で車の中にいました。異様な地響きと同時に、大型車がシーソーに乗っているように前後にバウンドし、激しい揺れは長く続きました。強い余震の合間に急いで家に戻ると、山田から帰って来た夫は、家から米を持ち出し「炊き出しをするように」と指示をして、また山田へ向かいました。

桜野地区の「農村婦人の家」に私たちミセスクラブ員は集合し、材料等を準備して夜明けを待って炊き出しを開始。地域の方々の協力も得て、次の日から30人くらいで、毎日早朝から夜まで1カ月あまりおにぎりを作り続けました。道路が寸断、ライフラインが全面ストップ、3日もすると物不足は深刻になって、賞味期限の日付も気にしなくなりました。

私の息子は、車がなく買い物ができない山間集落のお年寄りたちのためにろうそくや乾電池などを調達し、移動販売車で届け続けました。燃料も制限され、移動販売車の軽油は建設会社から

譲ってもらい、支援に使う車のガソリンは3時間以上も並び、何とか10リットル給油できました。付近に農家は少なく、お米が底をついた時は苦劳しました。3軒の農家から集めたモミを精米できるまでの間、皆に協力を呼び掛けて米を出してもらいました。

「婦人の家」の前の広場には、警察車両が10台、20台と集まって来て、次の日からは他県の車両も来るようになり、救援活動の拠点になりました。健康増進センター（体育館）は遺体安置所に指定されましたが、後に手狭になり、隣の公園も使うようになりました。警察の人たちは、小雪が降り窓が凍っている車の中で仮眠していて、搜索活動に出かけた後に、ダンボール箱に入った小さな凍ったおにぎりが届けられていたので、温めておくようにしました。休む所は約50人の方にはホールを、遠く九州や福井県から来ている検視官の方たちには、私たちの作業終了後の部屋を使用してもらうことにしました。

支援米も届くようになり、警察官、体育館で確認作業をしている人たちにも安心して分けてあげることができました。私たちが炊き出しをしている目の前の体育館には、連日何体もの遺体が運ばれてきました。身内を必死に捜し回る人たちも日増しに多くなり、余りにも犠牲者が多いため、県内で火葬できず「県外まで行ってくる」と言っていました。その場にいる人たちに掛ける言葉が見つからず、声が詰まり、一礼をして炊き出しに通り続けました。

検視官と机を借りに行った役場豊間根支所の前も、体育館とその周辺も、「これが現実なのか」と目を疑いたくなるような惨状でした。あらためて震災当初を顧みると、大槌から山を越えて歩

いて来た2人の男の子や、濡れて息子に服を借りに来た消防団員、居場所を求めて来た知人たち、私の留守中に訪ねて来た人たちに、何もしてあげることができなかったことが悔やまれます。合掌し、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。強靱な山田の復興と、仮設住宅で暮らしている方々が一日でも早く元の生活に戻れるように、私たち桜野地区ミセスクラブは祈っております。

「明日へ向かって」第2集

故郷・山田町に迫った巨大津波と悲しい被害

— 地理学から見て —

サイエンス・ボランティア 小岩清水

2011年3月11日の巨大津波は、故郷の皆さんの心を凍らせる、すさまじい姿で町の全てをのみ込みました。実際には津波そのものが及ばなかった山間の方々も、その方々にとって大切な人、心のぬくもりであった人々、働き勤しんでいた仕事場に、ただならぬ激動がもたらされたに違いありません。

このような大災害は、私たちよりもはるかな昔にこの地域に生きた先祖の人々や、もっと遠くの時代に今の文明の基礎を創造してくれた原始の人々にも、多くの不幸を与えたと考えられます。現在、山田町で追跡できる最も古い事例は、およそ4500年も前のものでありますが、その時代の津波の痕跡は直接的には得られていません。しかし間接的な痕跡は、船越地区の第5地割や第6地割の高い場所に発見された縄文時代の住居跡（標高50〜60メートル付近）で、当時の人々の地中の食料庫に放棄された食物の残存物などから推測できると考えています。巨大津波

は縄文時代から故郷に押し寄せていたのです。

当時の人々の暮らしが、食物の多くを海に依存する傾向であったにも関わらず、なぜ海から離れた高い山の斜面に暮らし、毎日登り下りの苦心を続けたのかは、巨大な津波で多くの犠牲を出した悲劇を背景としたからだと考えると最も整合します。そして、そのような苦労を伴ったと考えられる場所は、飯岡地区の大畑の上部の尾根斜面や、山田地区の関谷から沢田にかけての域にもあったと想定されますが、これらは津波との関わりとしては検証に手がつけられていないようです。船越と飯岡の大畑が発掘されたのは、三陸自動車道で「山田道路」と呼ばれている区間の造成のための文化財調査が実施されたからです。その記録や文化財資料は残されましたが、貴重な現場は道路建設によって保存できませんでした。

その他の例では、それよりも30メートルほど低い船越地区の国道45号線と、JR山田線（運休中）の間の通称「湾台」と呼ばれる位置に、集落があった時代などが想定できるのですが、その高さは2013年に発掘された大浦地区の畠中遺跡の22メートルの位置とも比較できそうです。畠中遺跡は4500年ほど前と考えられているようですから、湾台と同時期なのかもしれませんし、大浦小学校の基盤整備時にも注目に値する多くの遺物が出土したといわれていますので、ある程度の面的な規模があったのだと考ええるべきでありましょう。

では、低い位置に人々の暮らしは存在していたのでしょうか。低い位置では間木戸（馬木戸、真木戸）の遺物散布地や、船越の低地の浦の浜で貝塚を伴っていたとされる新道遺跡が見つつか

ていますので、私たちの故郷山田町には海岸近くから10数〜20メートル程度、そして50メートルにもなる高い所まで、人々が暮らしていた時代が幻のように浮かび上がってきます。その自然的背景としては、縄文海進期（氷河期が終わり海水が増えてきた時代）と、もう一つは巨大津波の周期的作用が考えられます。海進は少なくとも1万年単位、巨大津波は400〜500年単位と考えられますが、問題は50メートルもの高さに営まれた集落痕跡の存在は、そこまで暮らしの場を高めなければ安心できない、超巨大津波に遭遇した時代があった可能性を考えておくことや、超巨大津波がどの程度の周期で発生するのかを想定する科学の進歩に願いを込める必要があるということを示唆しています。

3・11津波の直後、「千年に一度の想定外の巨大津波」というニュースが日本列島に流布し、多くの方が記憶していますが、しばらくしてそのような言説は幽霊のように消えてしまいました。今回の津波の原因となった地震とは、マグニチュード9クラスで地球の地殻変動でもまれに見る巨大なものであり、幅200キロメートル、長さ600キロメートルの海底岩盤が動いたと判明しましたが、有史以前にはもつと短い間隔で巨大地震が発生していた可能性も捨て切れず、「千年に一度」だと断言できないためです。津波が今回を倍も上回る数値で発生すると想像するのは、とても普通の思考では難しいですが、頭のどこかにしっかりと記憶すべき教訓を、先祖たちは暮らしの遺跡として私たちに懸命に伝えているのではないかと、私は考えています。

船越小学校で今回の巨大津波に直面し、一人の生徒も犠牲にせず、避難に成功した神業的な校

務員・田代修三氏の家伝による津波防災の叡智もそれを見事に示しています。

避難という最も消極的な方法を素朴に信じて、大きな地震があったら短時間のうちに高台に足を運ぶこと、そして目的地に着いて安心してしまおうのでなく、海に注目してその変化を観察すること。避難とは、次に何をするかを決めるための時間的余裕をつくる努力であり、海がさらに押し上がって来ないかを見極め、その時間でおお不安を感じる場合はさらに高い場所へ走る努力をする。それは地震を感じてから直ちに避難した人へのみ与えられたゆとりの存在であり、格段の安全性を確保できることだと考えましょう。

郷土・山田町域には多くの神社や寺院があります。そして、この神社と寺院の位置に注目すると、津波をともに受け止めてしまうような低い場所にあるものと、3・11の巨大津波に対しても安全な位置に設けられているものが、不思議な対比を示すことに気付かされます。

先祖は、危険に対して古くから代々の経験を基に防災叡智を持ち、大切にしていました。「科学的知性の時代」といわれる現代ですが、古い時代よりも危険への対応力が劣化していることに気がましよう。

科学的な思考のなかった時代の叡智とは、物事（自然現象）を極めて単純化して判断基準を設け、幼いころから口伝えて教え込むことでした。危険対応が複雑で結論の出せない思考を省き、単純さの中に救いがあることを根幹に置きました。神社や寺院の配置と海からの高さは、安全かどうかの判断基準を示すための先祖の心配りだと考え、子供たちに大切に伝える努力をすべきだ

と、大人たちは意識してはいかがでしょうか。

しかし、教育制度が整い内容が高度に拡大するにつれて、多くの知識を複雑に組み合わせ、判断をより精緻なものにする努力を重ねることこそが科学であり、正しいことだと考えるようになりしました。地殻変動に伴う最先端の科学を基に、正確で失敗しない避難を論理的にぎりぎりまで追求するのは、仕方がありません。それでも極めて短時間のうちの判断と予報、発信が伴わなければならぬ現象に対しては、一般の私たちがテレビやラジオ、携帯電話の緊急地震津波情報から、自分の身に関わる危険を瞬時に予知して避難行動に移す時間は相当のものです。テレビを見ているよりも高台に駆け上がるの方が良いのは言うまでもありません。

私は、自然災害から身を守るには、瞬間的（反射的）に危険事態から遠ざかる判断をすることに尽きると信じています。地震が津波と結びつくか否かはともかく、海岸線に近い土地が生活域の人にとっては、地震が強かった場合だけでなく、弱い場合でも心構えとして、震動が収まったと同時に、避難の一步を踏み出すのが正しいと考えます。その避難の中で予報が正確さを欠いて津波の発生がないとしても、その姿勢しか自分を救うすべはないと思います。行動規範を確立してほしいと願っています。私たちが現在位置付けている自然に関する知識は、観測などの記録がまだ150年程度しか蓄積されておらず、地球の45億年の推移を把握するには、余りにも資料が少ないと言えます。

それでも人間は、150年の蓄積から45億年という歴史を持つすさまじい対象をひるむことなく探り、それに挑み続けています。その素晴らしく煌煌と輝く意欲に、素晴らしいと憧れてやみません。

こいわ・しみず氏

昭和16年、岩手県山田町生まれ。山田小学校（当時）、山田中学校、山田高校に在学。専修大経済学部を卒業した後、同大付属高校で地理の教員を務めた。「中部以北山岳域の気候学的自然環境の研究」で日本気象学会学術奨励賞。雑誌「地理」でシリーズ「山岳地形を読む」を執筆したほか、学会誌などに数多くの論文を発表している。

「震災体験記」と心の復興

この文を綴るため、2011年の日記を見る。3・11の悪夢がよみがえる。停電や電波基地局の破壊、集中アクセスなどにより情報が全く得られず、何が起きたか知るまでに相当の日数を費やした。私の居住地に電気の来たのが9日目、水道の復旧は11日目である。

未曾有の震災を記録するため、「山田史談会」内に「山田町東日本大震災を記録する会」が創設されたのは2012年9月である。活動の基軸は「震災体験記」の収集だった。テレビやインターネット、写真集などで被災地の映像が大量に流されている中、町民の心の記録を後世に残そうと考えたのである。

聞き書きでなく、被災者自身が書いた「手記」にこだわったのは、湊雅義さん編著の聞き書きの既刊『それぞれの真実それぞれの思い―被災者が直接語る2011・3・11岩手県山田町の記録』を意識した面もあるが、そのみが理由ではない。

千年に一度の巨大地震と大津波。一瞬にして古里の町が廃虚となり、昨日までの「日常」が奪

われた虚脱感、喪失感は深い。愛する家族、友人、知人を失った悲しみを抱えたままでは生きていけない。絶望、悔恨を乗り越えて生きるため力になるのが「書く」という行為なのではないか。人は精神の姿勢が能動的でなければ書けない。書こうと身構えたとき精神の緊張は大きくなり、内面に深く入って行くことができる。言葉を紡ぐことによって、あの日何があったのかを問い、因って来たる悲嘆が明らかに。私たちはそう考えた。

しかし、手記収集は容易ではなかった。吉村昭『三陸海岸大津波』の「子供の眼」に倣い、子供の作文を残すべく、小学校から高校まで川端弘行会長と学校を訪問した。教師たちは心的外傷後ストレス障害を恐れ、消極的だった。

危惧には無理からぬ面もある。埼玉の友人が送ってきたある団体の機関紙に、山田町の同団体会員の震災体験が載っている。その会員の娘さんは震災当時小学生だった。津波の恐怖からか津波映像も写真も見られないという。大人でも、当時の状態が続いていて、津波の夢を見る。書けないと断られる例が多かった。むしろしい状況の中で、児童・生徒37編の体験記を収載できたのは意義深い。

当初、老若男女、幅広い年代層と男女の均衡を理想としたが、かなわなかった。高齢者、女性に偏り、企業、団体等の記録は今後の課題である。だが、109編の手記は町内の全地域にわたり、後世に語り継ぐに足る多様な内容を含む。

収集に当たった者の一人として感じたことを述べたい。大津波が町をどのように襲ったのか、

最もよく伝えるのは、田の浜住民の文である。石井正己著『柳田国男「遠野物語」』（NHKテキスト）によれば、明治29年の津波で田の浜は、138戸のうち129戸が流失。死者483人、生存者325人という甚大な被害に遭った。阿部優子さんの手記は、押し波、引き波の強大な破壊力を、佐々木サツさん、中村百合さんは、ものすごい速度について書いている。山田の本宿一夫さんにも同様の描写がある。

津波の速さはどれほどだったか。2011年4月25日の朝日新聞に、宮古市重茂の川代地区に襲来した津波の速度の記事がある。分析の基は、植物研究者大上幹彦さんが川代で撮影した70枚のデジタルカメラのデータだ。県立博物館の大石雅之学芸員の解析の結果、地震発生後23分で潮位が高くなり、7分後に波が引き、2分後津波が押し寄せる。約800メートル離れた岬から岸まで約25秒で到達していたことが分かった。速度はなんと時速115キロだった。

同年6月25日の朝日新聞には、大槌町の中心街が津波にのみ込まれるまでのドキュメントがある。自営業佐藤明広さんが、高台からビデオカメラで撮影した。地震発生2時46分。3時17分、沖合で津波が発生。21分到大槌川の堤防を越し、22分56秒に役場に到達。市街地全体がのみ込まれたのは24分52秒だった。地震から30分経過しても、役場周辺を中心街には多くの町民が残っていた。

真昼の高速津波は、逃げ遅れた人たちを目の前でのみ込んでいった。知人の顔、光景が目には焼き付き、思い出すと涙が出て眠れないと書いたのは下村房子さんだ。菊地みち子さんは、近所

のおじさんの娘T子が、目前で家と両親を流され、ただただ泣き叫んでいたと記している。哀切な話に言葉を失う。五十嵐浩子さんは、逃げる途中、知人のおばあさんに手をつかまれる。最初すっかりつかんでいたが、息子さんに支えられていたので手を離す。瞬間、おばあさんは波間に消える。手を離れた時の感触が頭から離れず、夜寝るのが恐いと言う。

人を助けられなかった悔恨が被災者の心をさいなむ。悲しい別れをした人が幽霊でもよいから会いたいと思うのは人情だ。2010年文芸評論家東雅夫氏が、『遠野物語』刊行100年を記念して、東北の怪談を集めようと「みちのく怪談コンテスト」を催した。震災年の2回目は、「震災怪談」が多数寄せられた。人々の記憶の中に、死者の思いが長く息づいていく。怪談が持つ大切な力だと東氏は語る。

震災は平穏な日常を一瞬にして破壊した。その喪失感を、高校生の阿部祥子さんは的確に表現している。自宅にいるとき、震災前の生活について考える。しかし、思い浮ばない。思い出せないほどに平和で、当たり前過ぎる日々だったんだと思うと切なくなると言う。家族がそろって健康でいて、変わったことも起こらず、日々同じことが繰り返されていく。その平凡さには折節の移り変わり同様なをいやす何かがある。大人になって阿部さんはそういうことに気づくはずだ。

子供たちの手記には、人のやさしさに触れた内容が多い。佐々木智輝君は、寒い避難所で毛布を他人に譲っている人を見て胸を打たれる。家族が心配なとき、おにぎりを作ってくれたお母さんたちの気持ちを忘れないと言う。福士優哉君も同じ趣旨のことを述べている。ものを豊かに

見、感じる心を持つ子供たちがいるかぎり町の将来は明るい。

手記には普遍的な肉親の情が随所に見られる。例えば、大浦の阿部秋子さんの手記は、息子を思う母の心にあふれ、感動的だ。町道が不通となり、山越えの道で3日間息子を待ち続けた阿部さんは、やっと避難所で会うことができた。息子の名を呼び、人目をはばからず泣き、叔母の家で息子と枕を並べて寝る。暗中、息子の布団のふくらみを見つつ眠りに入った。朝方、息子のザックの中の衣類をたたみ返しつつ幸せを感じたと記す。人の心の琴線に触れるくだりである。親であり、子であることの言うに言われる心のぬくもり、綾、襷あやひだが巧まらずして表現され、余情となつて深く心に残る。

町道開通後、息子を待った道を、阿部さんは意を決して歩く。当時を回顧し、涙が流れる。立ち尽くす目の先に穏やかな海が見える。その時、不意に、大いなる自然の中で生かされている、との思いが胸に満ちてきたと書いている。心の記録としての本書の意義がここに凝縮され、余韻が深い。

震災時、山田交番勤務だった3人の警察官の証言を掲載できたのはさいわいだった。吉田朋史さんは、避難誘導、救助活動を通して生と死がせめぎ合う場面に遭遇する。助けられなかった遺体への哀惜と悔恨の情深く、崇高な使命感に心を打たれる。

豊間根・荒川地区が、後方支援基地として果たした役割はすばらしかった。農村部で交通至便の地にあり、諸施設が整っている。加えて、荒川婦人防火クラブ、桜野地区ミセスクラブなどの



豊間根久子さん(豊間根地区在住)作の日本画「潮の香」(第8回国民文化祭いわて93岩手県知事賞、佐渡市・日本アマチュア秀作美術館所蔵)。三陸海岸の美しく穏やかな海と浜辺の情景を描いている

組織がある。9名の体験記には炊き出しなどのようすが詳細に報告されている。人々の心の温かさ、手厚い支援に感銘を受ける。充実した支援を可能にしたのは、村落共同体的な人のつながりへの信頼であり、地域の底に流れている人の役に立ちたいという意識と他者へのいたわりだろう。

震災で町の風景は見る影も無く変貌した。壊滅した街以外で見ると、海岸林となぎさの喪失が町民の心に寂しい影を落とす。海の町として美しいなごさが常により、未来へと続いていく姿は精神のよりどころとなる。なごさは自然のリズムを最も微妙に感受できる場所である。満潮と干潮の反復、渡り鳥、潮の香り、海風、それらが一体と

なつて自然のリズムを形成する。なぎさを通して私たちは海と触れ合う。個人的なことを言えば、少年の頃私は小谷島海岸に遊び、サヨリが波に打ち上げられ、なぎさでもがいていた光景を今でも忘れられずにいる。

収集した手記は、被災した町民の数に比べればごく一部にすぎない。しかし、体験には共通するものが多いと思われる。互いに胸のうちを知る。悲しみを共有することが大切だろう。そして、自分がけつして孤独ではないことを感じ、希望を持って明日を生きる力にしていただければ、私たちの目的は達成されたといえる。

今も町内には行方不明のままの人が148人もいる。遺体の見つからない家族の死を受け入れられずに悩んでいる人々にとって、死者の思い出を書くことは慰霊と鎮魂になるのではないか。悲しみに耐えて手記を書いてくださった皆さんに感謝したい。一つ一つの話が、幅広い人たちの心に届き、長く記憶され、将来の防災を考える資料として役立っていくことを願う。

付記

「山田町東日本大震災を記録する会」は、2014年度5月から役場総務課と協同で取り組むこととなり、今日に至っている。総務課内の「震災記録誌」担当は佐藤孝雄氏である。この書において、手記の内容に合った適切な題が付けられ、地域ごとに地図・写真・被災概要を配し、字面にも気を配り、読みやすい紙面になったのは、元新聞社勤務のキャリアを有する氏の力に負うところが大きい。この本は官・民連携の成果でもあることを強調しておきたい。

体験手記には「震災を記録する会」が2度の公募等により集めたもののほか、他の出版物からの転載が多数含まれている。収録を了承してくださった「山田町婦人団体協議会」「田の浜婦人会」のほか関係団体に謝意を表する。

山田町東日本大震災を記録する会

●

会長	川端弘行
副会長	阿部武夫(故人)
事務局長	福士博
委員	後藤清郎／長岡豊

3・11 百九人の手記 岩手県山田町 東日本大震災の記録

平成27年3月1日発行

[編集]

岩手県山田町/山田町東日本大震災を記録する会

[発行]

岩手県山田町

〒028-1392 岩手県下閉伊郡山田町八幡町3-20

電話 0193-82-3111

FAX 0193-82-4989

<http://www.town.yamada.iwate.jp/>

[印刷・製本]

株式会社東海印刷所